

安平町北海道胆振東部地震  
災害検証報告書

第1部  
検証結果と提言 編



## 目次

<b>第1部 検証結果と提言 編</b> .....	<b>1</b>
<b>1. 検証方法と検証結果概要</b> .....	<b>1</b>
1.1. 検証結果に基づく提言.....	1
1.2 検証体制.....	6
1.3 検証経過.....	7
<b>2. 検証方法と検証結果概要</b> .....	<b>9</b>
2.1. 検証方法.....	9
2.2. 検証結果の概要.....	9
2.3. 検証結果の詳細.....	10
2.3.1. ①生活復興調査.....	10
2.3.2. ②行政職員ヒアリング.....	36
2.3.3. ③関連組織ヒアリング.....	68
2.3.4. ④中学生ヒアリング.....	93

## 第1部 検証結果と提言 編

### 1. 検証方法と検証結果概要

#### 1.1. 検証結果に基づく提言

北海道胆振東部地震における安平町の対応検証  
～町民、地域、企業、行政が総力を結集した、  
震災前より元気で魅力的な安平町の復興に向けて～

安平町における北海道胆振東部地震検証本部会では、北海道胆振東部地震の発生から3年目に応急対応ならびに復旧・復興の取り組みの検証を行った。検証本部会では、①行政職員アンケート、②関連組織調査、③中学生調査、④生活復興調査等の調査を実施し、調査結果から、被災地における残された課題や安平町における今後の災害に備えるための課題等を検討・とりまとめ、安平町に提言するものである。

町民、自治会・町内会等の地域、商工会や建設協会などの団体や企業、安平町をはじめとする関係機関等の行政等の、災害対応や復旧・復興に関わった人や組織において、今後の災害へのそなえ、今後の震災からの復興を推進する際の指針として本提言を活用し、災害に強い安全安心な安平町づくりに向けて、関連施策の充実と促進を図られるよう期待するものである。

#### 1 被災者の生活再建に係る課題

(1) 復興程度には未だバラつきがあるため、「一人の取り残しのない復興」に引き続き取り組む。

(ポイント) 住まいの問題は一定解決しており、被災者でないと感じている人も多い。一方で、地区・被災程度によっては家計や地域経済の復興が十分でないと感じている人が多い(生活復興調査より)。

(解説) 北海道胆振東部地震から3年、「住まいの問題は解決」「家計への震災の影響はなくなった」「自分は被災者ではない」については多数の人が感じており、復興は順調に進んでいる。一方で、4割以上が「地域経済は災害前の水準に戻っていない」と回答し、また、その回答傾向は地区でバラつきが多かった。被災程度が大きい世帯や地域への対応は引き続き必要である。

また、世帯の家計においても、被災程度が甚大であるほど収入は減り、支出は増え、預貯金は減った、と回答しており、コロナ禍もあいまって、外食費・レジャー費の切り詰めにとどまらず、文化・教育費や衣服費までも減らしている人が多い結果となった。被災程度の大きい世帯に対する取り組みを継続する必要がある。

(2) 「自宅の被害程度が高い」「若い世代」「高齢世代」で、ストレスが比較的高いことに配慮し、被災者のこころとからだのストレスの軽減に継続的に取り組む。

(ポイント) 災害後、こころとからだのストレスは高くなったり低くなったりしながら復興へと向かっていく。被災者のストレス度合いを見守りながら軽減策に取り組む(生活復興調査より)。

(解説) 被災者のこころとからだにおいては、「自宅の被害程度が高い」「若い世代」「高齢世代」

で、ストレスが高い傾向が見られた。女性の方が男性より、こころとからだのストレスは高かった。また、18-30 歳代、60 歳以上のストレスは、40-50 歳台よりストレス度合いが高かった。これらの傾向をふまえ、若い世代や高齢者、特に若年層のストレスに配慮し、町民に対するこころのケアに留意することが必要となる。

また、行政をはじめ対応に関わった対応者においては、過去の被災地の事例をみても復旧が一段落つくころから、こころやからだに変化の現れることも少なくなく、特に、ストレス度合いの計測、ストレスの解消プログラム、今後のやりがい維持のためのストレス軽減対策を考える。

## 2 今後の地域作りに向けた課題

(3) 地区によって復興のスピードの感じ方にはバラつきがあるため、被災者の意見を踏まえながら復興スピードの加速に継続的に取り組む。

(ポイント) 早来地区、追分地区、安平地区の順で、まちの復興スピードを「遅い」と感じている人が多い。これは、被災程度にも大きく影響されるが、復興を実感できない状況になっていることが課題である(生活復興調査より)。

(解説) まちの復興スピードは、被害の大きかった地区で「遅い」と感じている人の割合が高かった。具体的には「かなり遅い」「やや遅い」と回答した人で地域差が見られ、早来地区、追分地区、安平地区の順で多かった。地震災害の発生から3年しか経っておらず、被害の影響が顕著に表れたと考えられる。

1年後のあなたの将来に対して、被害の大きかった地域では、肯定的なイメージを持っていない人の割合が高かった。コロナ禍も相まって、将来に肯定的なイメージを持っていない人も多く、復興を実感できない状況となっている。

(4) 復興まちづくり計画については、これまで進めてきたこと、これから進めようとすることに、より一層町民の関心を高める。

(ポイント) 復興まちづくり計画については、安平町が実施している施策に対し、町民の理解が十分に得られていないことが課題である(生活復興調査より)。

(解説) 基本方針1「住まいと暮らしの再建」は5割以上が「達成している/がんばっている」と評価、基本方針2「災害に強いまち・ひとづくり」は4割前後が「達成している/がんばっている」と評価、と一定の評価を得た。基本方針3「産業と経済の復興」における「観光の振興」に6割弱が「達成している/がんばっている」と高評価を得た。基本方針4「未来へつなげる復興」では「がんばっている」と「道半ばである」と評価した人が共に3割前後おり、評価が分かれた。取り組みによって、住民の認知度にもバラつきが見られ、復興施策への町民の理解醸成を推進することで、震災前よりも一層元気で魅力的な安平町の復興が実現すると期待される。

(5) 災害対策としての農業・畜産業に対するリスク管理について、安平町とJA等の関係機関で

**積極的に検討する。**

(ポイント) 安平町の基幹産業である農業・畜産業の被害を軽減し、災害時の事業継続が円滑に進むように平時から安平町と JA 等の関係機関で協議し、体制・対策を整える(団体ヒアリングより)。

(解説) 町内で災害が発生した場合、施設や農場・牧場に被害が発生し、農作物や生産物に係る事業継続が途絶するだけでなく、一部作物の市場価値が減少する。また、復旧・復興が遅れば、種付けや生育、搾乳や肉の生産に多大な影響がでる。これらを農業・畜産業が潜在的に保有するリスクとして認知し、予め対策を検討しておくことが大切である。

北海道胆振東部地震においては、水や電気の確保、壊れた施設への解体等の対応、家畜の一時避難等の対応が行われた。これらの対応を検証し、調整機関としてのJA等が安平町と連携して、今後のそなえや対応体制について検討しておく必要がある。

**(6) 道路・施設、建物の復旧・復興における町民の充足度を把握し、今後の整備につなげる。**

(ポイント) 復旧としての道路・施設整備は完了しているが、町民の充足度は必ずしも戻っていない。注意深く充足度を把握しながら、今後の道路・施設整備の推進を図る(生活復興調査より)。

(解説) 道路・施設、住宅を含む建物の復旧における取り組みは完了しており、生活の支障は解消していると評価できる。ただ、災害復旧においては現状復旧が原則となっており、必ずしも使用者の満足や今後の継続性については、十分なものでない場合もある。今後の復興過程の中で発生が予測される追加対応の必要な箇所の洗い出しについて検討することが望ましい。また、災害査定において対応がなされていない部分においても、今後の追加対応が見込まれる箇所については、同様に検討し、今後の対応に努める。

### **3 今後の災害に備えるための課題**

**(7) 職員の災害対応の経験や知見を組織の知恵とする取り組みを継続的に実施する。**

(ポイント) 北海道胆振東部地震の貴重な経験を、町の教訓とし、組織として継続的に生かしていくための取り組みを実施する(職員アンケート・ヒアリングより)。

(解説) 安平町職員による北海道胆振東部地震の対応の教訓と知見が風化したり、異動や退職等により失われることのないよう直接災害対応を行った職員の経験や知見が、組織の知恵としていくための継続的な取組が必要である。特に、指揮命令系統の一元化、現場への権限委譲、災害時の業務に係る役割・業務分担、応援のあり方(長期/短期、庁内/庁外、事務職/専門職)を考える。これらを組織で継続的に進めるためには、平時よりプロジェクトチームとして対応できる体制を確立する。また訓練へのニーズも高まっているため、各課で継続的に取り組む。

**(8) 避難所運営の主体・手順の検討を関係者間で実施する。**

(ポイント) 北海道胆振東部地震においては、住民が主体的に運営した避難所、行政が運営に

携わった避難所の2種類に大別された。それぞれの長所・短所をふまえ、今後の避難所運営について地域・避難所担当職員・施設管理者等で協議する(職員アンケート・ヒアリング、団体ヒアリングより)。

(解説) 避難所は被災者支援の拠点であるが、安平町では、その運営主体として、行政が中心となった避難所、町内会が中心となった避難所が稼働した。それぞれの避難所において、安平町職員、応援職員、被災者、ボランティア、等が運営に参画している。それらの良かった点、改善が期待される点を振り返ることで、今後の地域のレジリエンス向上が期待される。

(9) 人的支援が必要な事態となった時に、ボランティアセンターを核として安平町が関係機関と調整できるような体制を平時から構築する。

(ポイント) 社協によるボランティアは支援の力になったが、他団体等について支援が必要な事態へ陥った時、安平町がボランティアセンターへ調整する機能が必要であった(団体ヒアリングより)。

(解説) 社協によるボランティアセンターが立ち上がり、ニーズの把握や自宅の片付け等、必要な作業にボランティアを割り振ることで、支援の力となった。一方で今後に向けた改善点として、ボランティアをあっせんするだけではなく、JA等の他組織と連携して、支援を実施する取り組みがあれば、農家や畜産業、ガソリンや灯油の提供の分野において、さらなる支援展開に対する可能性が指摘されている。ぜひとも、連携協力の可能性があるのか、そのためには平時からどのような体制を構築すればよいのか、検討を行ってほしい。

(10) 北海道胆振東部地震で醸成された自助・共助・公助の役割分担意識を忘れず、今後の安平町の一層の防災力向上を目指すための防災教育・防災訓練が必要である。

(ポイント) 災害時には公助に頼るところは頼り、自助・共助で頑張れるところは頑張る。総合力で災害に立ち向かえる町を目指す(生活復興調査、団体ヒアリングより)。

(解説) 災害時には被災者に対して様々な支援が必要となる。被災者にとって精神面、物質面、情報面において頼りにできるのは役場など公助に求められる傾向にある。防災対策は、自助・共助・公助の役割が異なることから、3者の協力関係の構築と役割の理解および役割に応じた対策について検討しておくことが必要である。また、地域の防災力は、行政や団体だけでなく地域に住まう住民の防災に関する意識や知識も必要である。自助、共助の意識醸成や自主防災組織の強化、平素からの訓練等による経験も必要であり、防災教育や防災訓練の継続的な取り組みにより、地域としての防災力を向上させることが必要である。

(11) 北海道胆振東部地震の教訓をもとに、防災会議により実効性をもたせ、災害時の事業継続について各関係機関・団体と協議する。

(ポイント) 北海道胆振東部地震では、連携しながら事業継続を図ることができない場面も見られた。平時からの災害時におけるお互いの支援ニーズの把握や、支援・連携の具体策を話しあっ

ておく必要がある(団体ヒアリングより)。

(解説) 災害発生時には多様な対応が求められ、町に関係する機関や団体等から多くの支援や協力が入る状況となる。北海道胆振東部地震においては、農業・畜産業に対する支援において町と関係機関・団体等と深い情報共有や連携が求められる事例があった。貴重な支援や協力を円滑に活かすためには、平時からの災害時におけるお互いの支援ニーズの把握など、訓練や意見交換等の実施により関係性の構築と連携や協働について位置づけを検討しておくことが望ましい。そのためには、防災教育や訓練への取り組み等も含め、今まで以上に町と関係機関・団体等との連携や協働により地域における防災力の強化について、検討を行ってほしい。

#### **4 未来にむけた安平町の課題**

(12) 北海道胆振東部地震を経験した児童・生徒の想いを反映し、安平町への支援の感謝と復興の現状を町内外に発信する。

(ポイント) 当時小学生であった生徒へのヒアリングによれば、自分たちが受けた支援への感謝の気持ちや、安平町の復興への努力を町内外に発信したいとの想いが強かった。生徒においては安平町の将来に対して明るい展望を抱いている(中学生調査)。

(解説) 中学生調査では、震災により「日常のありがたみ」を感じながらも「非日常」に好奇心をもち、ライフラインの途絶を経験し、友だちが無事だったことに大いに安堵し、家の片付け等の手伝いを実施した被災生活が浮き彫りになった。安平町の復興に向けた思いの中で最も多かったのは「にぎやかなまち」「明るいまち」「自然があふれるまち」「災害に安全なまち」であった。「教育など特色がある」「事故がない」まちになってほしいとの要望も高かった。

いま、中学生においては「震災直後の写真」「支援者への感謝を伝えるメッセージ」「復興の様子を伝える写真」等をつかって、学校や駅、まちの色々な場所にポスター・看板や絵で、町の内外に発信したいと考えている。中学生らしく「ゆるキャラ」「Tシャツなどのグッズ」への思いもあった。

「授業中に地震が来るんじゃないかと不安になることがある」「1人である時に地震が来るとすごく怖い」との回答もあり、地震災害は子どもたちに大きな影響を与えている。人間は、大変で辛い経験を「肯定的に捉える」ことで乗り越えられることが知られており、児童・生徒が主体となって発信の機会をもってもらうことで、安平町の復興の発信と児童・生徒の癒しを同時に実現できると期待される。



## 1.2 検証体制

検証体制を下表に示す。検証は、安平町役場職員から構成される胆振東部地震検証庁内部会で検討を行い、その結果を踏まえ胆振東部地震検証本部会が提言を行う。

表 北海道胆振東部地震検証業務 検討体制

名称	胆振東部地震検証本部会	胆振東部地震検証庁内部会
概要	安平町長が「安平町防災会議条例」に基づき設置し、委員を指名 北海道胆振東部地震の災害検証を実施し、町へ提言を行う 住民目線による検証を主とする	別途制定する要綱に基づき設置する。 行政目線による検証を主とする。
位置づけ	「安平町防災会議条例」第5条(部会)に位置づけ ※条例に基づき、別途設置要綱を作成 ※本検証に際し、専門委員を置く	別途制定する要綱に基づく位置づけ
構成	安平町防災会議委員と専門委員で構成する。計20名程度 専門委員：北海道立総合研究機構より1名、新潟大学田村教授、富山大学井ノ口准教授 復興アドバイザー：兵庫県立大学木村教授	安平町各課課長・参事で構成する計25名程度
座長	(地独)北海道総合研機構北方建築総合研究所副所長 安平町防災会議条例第5条に基づき、安平町防災会議会長が指名	安平町理事
検討内容	○検証内容・項目の検討 ○アンケート・ヒアリング内容・項目の検討 ○提言を踏まえた対応等の検討	○検証内容・項目の検討 ○アンケート・ヒアリング内容・項目の検討 ○提言を踏まえた対応等の検討
事務局・役割分担	安平町総務課：委員委嘱 日程調整、開催通知 (地独)北海道立総合研究機構 ：資料作成 開催結果とりまとめ	安平町総務課：委員委嘱 日程調整、開催通知 (地独)北海道立総合研究機構 ：資料作成 開催結果とりまとめ

### 1.3 検証経過

検証部会での検証経過は、下表のとおりである。

表 検討部会開催経過

月日	会議名	議事
5月20日	第1回安平町胆振東部地震検証庁内部会	報告連絡事項 ①北海道胆振東部地震の検証に係る協定について ②検証に際しての進め方について ③関連資料等の収集・整理について 協議事項 ①アンケート(素案)について ②期間の定義について ③分野の定義について ④比較対象とする自治体の設定および調査の説明
6月29日	第2回安平町胆振東部地震検証庁内部会	報告・連絡事項 ①想定スケジュールの変更について ②住民調査案に関する考え方の変更と学識経験者からの助言等について 協議事項 ①住民を対象とした調査(案)について ②職員を対象とした調査(案)について
7月7日	第1回安平町胆振東部地震検証本部会	報告 ①北海道胆振東部地震の検証作業について 議事 ①北海道胆振東部地震安平町生活復興調査(案)について
8月5日	第3回安平町胆振東部地震検証庁内部会	報告 ①事務局体制の変更について ②検証本部会開催結果報告 ③生活復興調査について 協議事項 職員アンケート(案)について
12月8日	第4回安平町胆振東部地震検証庁内部会	報告・連絡事項 ①「北海道胆振東部地震安平町生活復興調査」について 協議事項 ①職員アンケート(案)について ②生徒向けアンケート(案)について
1月28日	第5回安平町胆振東部地震検証庁内部会	報告 ①これまでの安平町胆振東部地震検証業務の経過について ②「北海道胆振東部地震生活復興調査」の分析結果について ③「胆振東部地震の災害対応検証に向けた職員アンケート調査」、中学生を対象とした「北海道胆振東部地震からの復興と今後の防災対策のための調査」および町職員、町内各団体へのヒアリングの分析結果について 議事 ①安平町胆振東部地震検証の提言書の方向性について

2月4日	第2回安平町胆振東部地震検証本部会	報告 ①経過報告 ②安平町生活復興調査および分析結果について ③震災対応に係る職員実態調査および分析結果について ④震災に伴う町内中学生を対象とした実態調査および分析結果について ⑤震災対応に係る町内各団体間取り調査および分析結果について ⑥震災対応に伴う人口動態調査について 議事 ①各種調査結果等に基づく提言の方向性について
2月9日	第2回北海道安平町胆振東部地震検証本部会議事の修正案の書面審議	議事 ①安平町北海道胆振東部地震検証本部会 提言の方向性について(案)
2月22日	第3回安平町胆振東部地震検証本部会	報告 ①書面会議開催結果について ②提案事項について 議事 ①本日の進め方について ②調査結果資料について ③調査結果別ワークショップ ④提言の方向性作成
3月4日	第6回安平町胆振東部地震検証庁内部会	報告・連絡事項 ①経過報告 ②各種調査結果について ③安平町胆振東部地震検証 提言(案)について
3月24日	第7回安平町胆振東部地震検証庁内部会	報告・連絡事項 ①経過報告 ②検証結果報告書(素案)について 協議事項 ①安平町胆振東部地震検証 提言(案)について
3月31日	第4回安平町胆振東部地震検証本部会	報告 ①現在までの経過について ②検証結果報告書(案)について 議事 ③提言書(案)について ④今後の予定について

## 2. 検証方法と検証結果概要

### 2.1. 検証方法

各調査において抽出した各主体の意見に基づき討議し、提言を導出した。

以下、①～④について掲載する。

- ① 生活復興調査
- ② 行政職員ヒアリング
- ③ 関連組織ヒアリング
- ④ 中学生ヒアリング

### 2.2. 検証結果の概要

#### ① 生活復興調査

1995年阪神・淡路大震災、2004年新潟県中越地震、2011年東日本大震災の被災地において、被災者の生活復興を測るために継続的に実施されてきたアンケート調査を参考に調査設計を行った。18才以上の安平町民(当時の住民含む)に全数調査を実施し、その分析結果を検証した。北海道胆振東部地震における安平町の「被災者が思う復興の進捗」を知るための指標として、復興カレンダー、家計、からだところのストレス、まちの復興スピード、次の災害へのそなえ、支援者、自助・共助・公助の役割分担、復興まちづくり計画等の調査項目についての調査結果をとりまとめた。

#### ② 行政職員ヒアリング

安平町が実施した行政職員ヒアリングを元に検証した。職員の災害対応における問題意識や応援受援の実際、自らも被災者でありながら対応を行わなければいけない葛藤、この災害を契機に意識・考え方が変わった様子、次の災害へのそなえの決意等が明確になった。

#### ③ 関連組織ヒアリング

災害対応において、安平町のパートナーとして、共助力を発揮した組織に対して行ったヒアリングを元に検証した。

- 1) 町内会・自治会：地域の力で、避難所を自主運営した
- 2) JA：農業・畜産業への対応、特に停電・断水による対応に組織的に取り組んだ
- 3) 建設業協会：復旧事業に対して力をつくし貢献した
- 4) 社会福祉協議会：高齢者の安否確認について地域・社協・行政と共に実施した
- 5) 商工会：災害の影響が出る中で、消費が冷え込み対応に苦慮している

#### ④ 中学生ヒアリング

北海道胆振東部地震時に小学生であった対象者に対し、災害後の様子、まちの将来像への期待、復興への取り組みについて自由記述調査を行い、その結果を基に検証を行った。災害直後は不安をかかえながらも、自衛隊等の支援者に感謝し、日常のありがたみを知った様子が明らかとなった。明るく、安全な町になってほしいとの期待や、復興の様子や支援への感謝を形にして町内外に発信したいという強い思いがあることがわかった。

## 2.3. 検証結果の詳細

### 2.3.1. ①生活復興調査

#### 「震災から3年が経過するなかでの北海道胆振東部地震 生活復興調査」

##### ● 調査目的

平成30年9月6日発災「平成30年北海道胆振東部地震」。この地震は北海道で初めて震度7を観測を観測し、当町においても震度6強を観測した。発災直後の未明より、町内全域の停電や断水が生じるなど、住民の生活に大きな影響を与えた。震災から3年経過したいま、過去の災害との比較を通して、震災から3年間の生活復興の様子について科学的記述を試みる。

##### ● 調査方法・結果

調査名：震災から3年が経過するなかでの北海道胆振東部地震 生活復興調査

調査主体：安平町生活復興調査 調査チーム

安平町胆振東部地震検証本部会、新潟大学・富山大学・兵庫県立大学（順不同）

調査手法：質問紙による郵送自記入・郵送返却

調査地域：安平町及び安平町外

調査対象：1) 令和3年4月1日現在 満18歳以上の全町民

2) 建物り災証明「半壊」以上、かつ令和3年4月1日現在 満18歳以上かつ

平成30年9月6日～令和2年12月31日までの町外転出者

抽出方法：1) 全数調査（住民基本台帳より抽出）6573票

2) 全数調査（り災証明発行管理システムより抽出）115票

調査時期：2021年7月～8月

有効回答数：1992票（有効回収率29.8%）

##### ● 参考：調査内容

被災者の生活再建実感は、生活再建課題7要素（「すまい」「人とひとのつながり」「まち」「こことからだ」「次の災害へのそなえ」「くらしむき」「行政とかかわり」）の充足度によって測れることが過去の調査実績から確認されている。本調査は、この考え方による調査フレーム（下記）を参考とし質問紙が作成されている。また、本調査は復興計画への評価についても併せて調査している



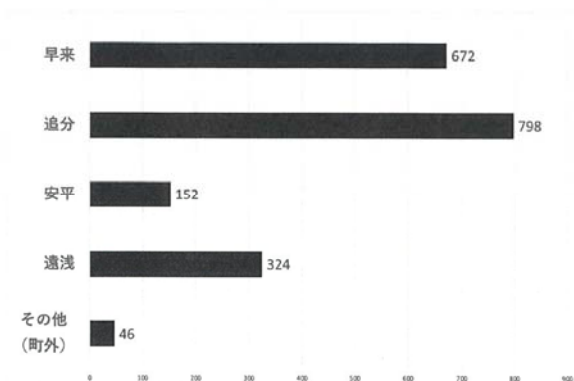
## 属性 回答者の居住地、性別、年代

調査回答者の居住地、性別、年代について、居住地に着目して、整理した

### ●回答者の居住地

回答者全体のうち、居住地について回答いただいた方においては、早来地区からは33.7%、追分地区からは40.1%、安平地区からは7.6%、遠浅地区からは16.3%、その他、震災時には町内にいたが、現在は町外に暮らしている方からは2.3%の回答を得た。

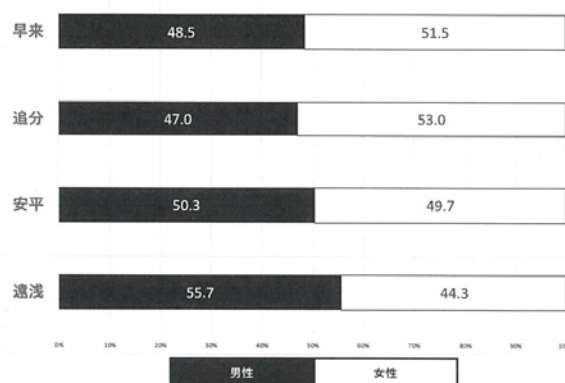
居住地



### ●回答者の性別

回答者全体のうち、性別について回答いただいた方においては、男性は933人、女性は963人、回答が無かった方は96人であった。

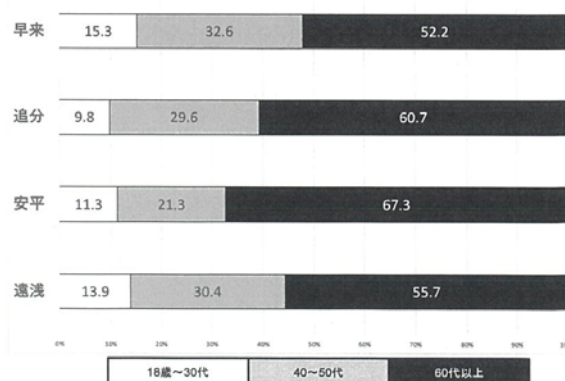
性別



### ●回答者の年代

回答者全体のうち、年代に回答いただいた方においては、18歳～30代は251人、40～50代は585人、60代以上が1,099人、回答が無かった方は57人であった。

年代

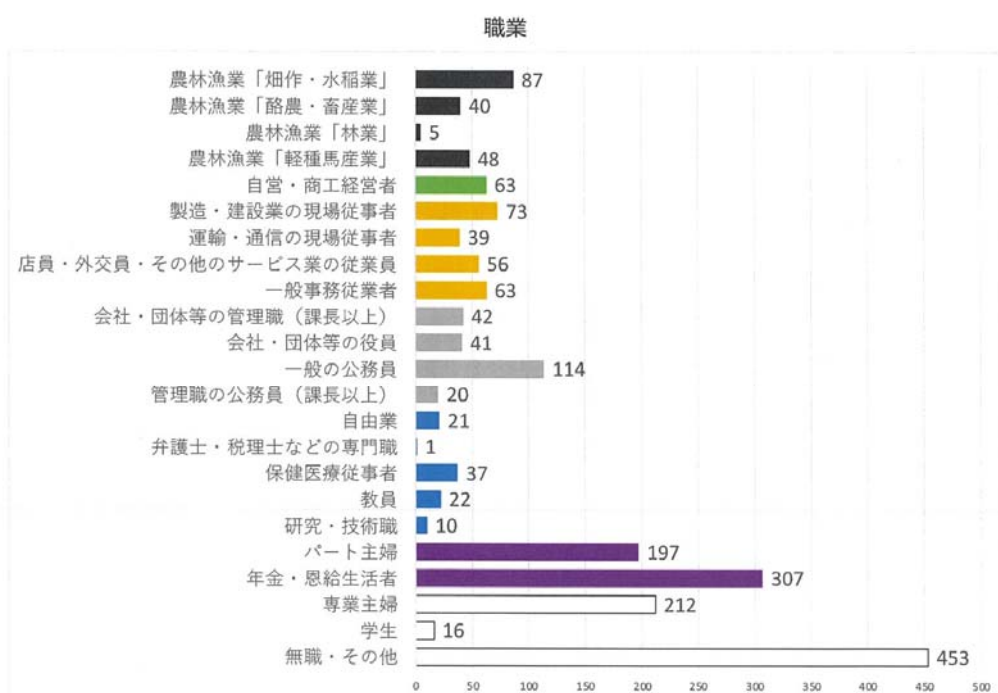


## 職業 回答者の職業

調査回答者の職業について、整理した

### ●回答者の職業

回答者の職業の内訳は、農林漁業関係者が180人、自営・商工経営者が63人、現場従事者並びに 従業員は231人、会社・団体並びに公務員は217人、自由業、専門職等は217人、パート従業員197人、年金・恩給等の生活者は504人、専業主婦、学生、無職・その他等は681人であった。

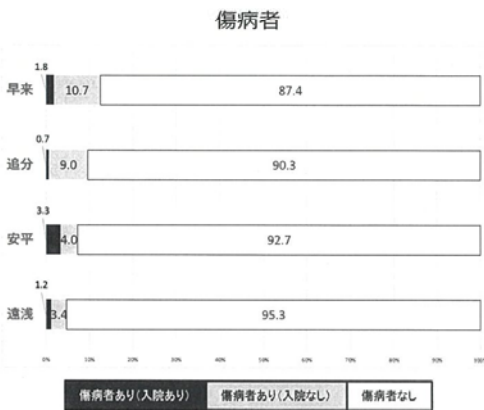




**被害 傷病者の発生には地区において統計的に意味のある差はなかった  
住宅・家財・年収における被害割合においては早来・追分・安平  
地区の被害発生がより顕著であった**

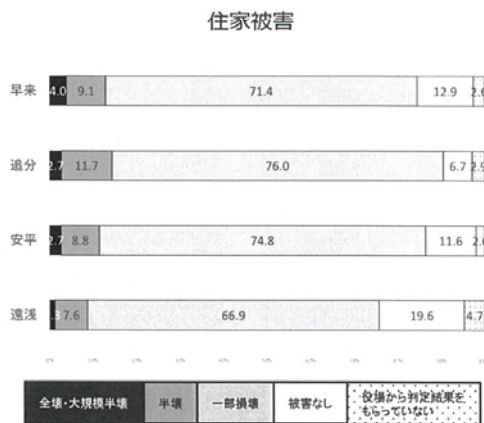
●傷病者

地震災害による傷病者がいたと回答した人は、全体で189人、そのうち入院あり27人、入院なし162人であった。傷病者なしと答えたのは1,755人であった。



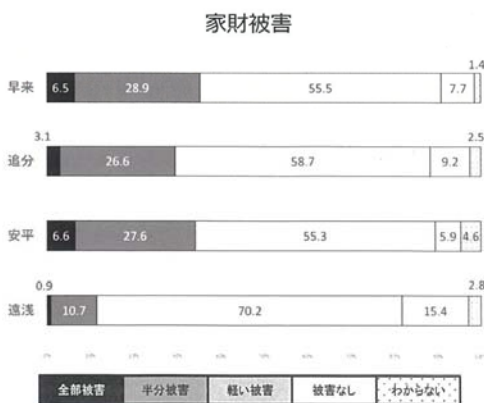
●住家被害

地震災害による住家被害があったと回答した人のうち、全体で全壊・大規模半壊世帯が64人、半壊世帯が196人、一部損壊1,385人、被害なしが221人、役場から判定をもらっていないが59人であった。



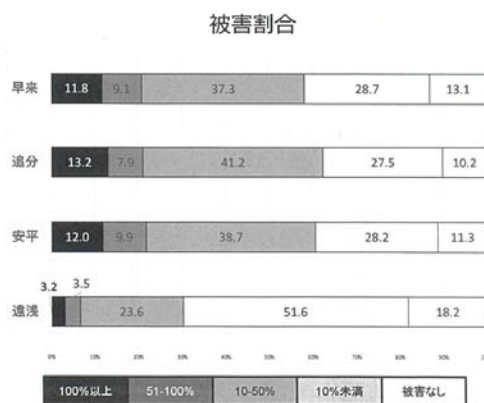
●家財被害

地震災害による家財被害について、「全部被害を受けた」と回答した方が全体で85人、「半分被害」は489人、「軽い被害」は1147人、「被害なし」は187人、「わからない」は44人であった。



●年収における被害割合

地震災害による被害の年収における割合について、「100%以上であった」と回答した方が全体で216人、「51~100%」は150人、「10~50%」は693人、「10%未満」は605人、「被害なし」は245人であった。





## ポイント1 北海道胆振東部地震から3年、復興は順調に進む一方で、4割以上が「地域経済は災害前の水準に戻っていない」と回答

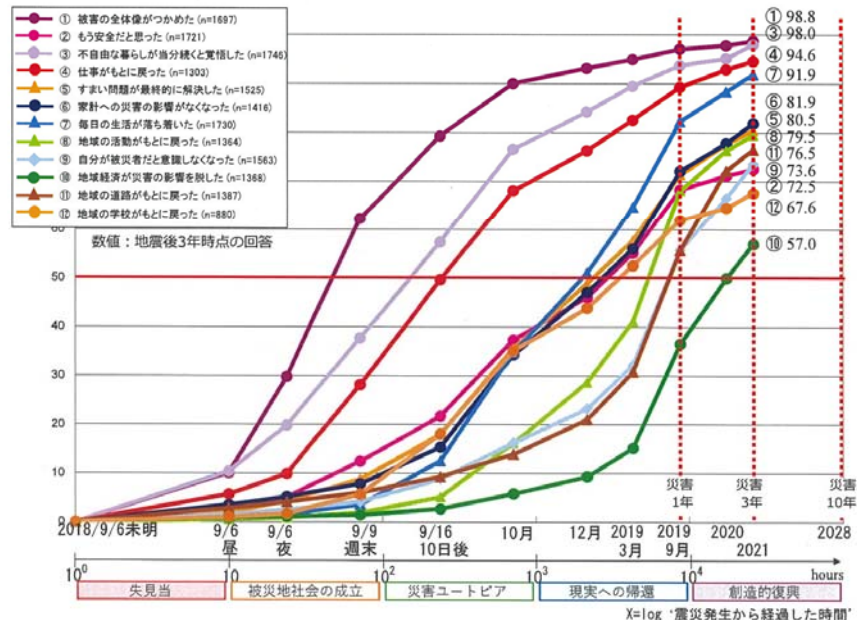
復興は、あるタイミングで一斉に成し遂げられるような「点」ではなく、時間経過によって少しずつ変化していく「線」のようなものである。そこで、「復興カレンダー」という分析手法で、「時間が経過していくとともに生活が復興していくようす」を明らかにした。

図の横軸は時間経過、縦軸は「各時点まででそう感じた/そう思った」と回答した被災者の累積の割合を表す。被災者インタビューで「生活復興の転換点となった」と多くの被災者が挙げている12項目で測定をした。

### ● 北海道胆振東部地震の復興カレンダー

図の右端の数字(%)が、震災から3年時点で、各項目(①～⑫)で「そう感じた/そう思った」と回答した人の割合である。特徴的な項目を見てみると、9割以上の被災者が「⑦毎日の生活は落ち着いて」「④仕事が元に戻っている」と回答し、約8割の被災者が「⑤すまいの問題が最終的に解決して」「⑥家計への災害の影響がなくなった」、地域についても「⑪地域の道路」「⑧地域の活動」は元に戻ったと回答していた。

一方で「⑨自分が被災者だと意識しなくなった」人は73.6%であり、約4分の1は自分を被災者である意識しながら生活しており、「⑩地域経済が震災の影響を脱した」と回答した人は57.0%で、4割以上が地域経済が戻っていないと考えていた。復興は順調に進んでいるものの、完了には道半ばであることが考えられる。



各項目(①～⑫)で「そう感じた/そう思った」と回答した人が50%を超えた時期を「その項目が達成された時期」と定義をして、「時間が経過していくとともにどのような順番で生活が復興していくか」を明らかにした。

まずは震災発生から数日が経過して「①被害の全体像がつかめた」「③不自由な暮らしが当分続くと感じた」と回答する人が過半数となった。そして震災から10日が過ぎると「④仕事がもとに戻る」ようになった。

震災から半年が過ぎるころになると「⑦毎日の生活が落ち着いた」「⑤すまいの問題が最終的に解決した」「⑥家計への災害の影響がなくなった」「②もう安全だ」「⑫地域の学校が元に戻った」という項目が過半数となり、衣食住・家計の問題が解決したり日常生活に落ち着きが見られるようになった。

震災から1年を迎えるころになると「⑪地域の道路がもとに戻った」「⑧地域の活動がもとに戻った」など地域のようなすも日常に戻るようになり、「⑨自分が被災者だと意識しなくなる」人が過半数となった。

震災から2年が経過した時点で「⑩地域経済が震災の影響を脱した」と感じる人は半数に届いているが、震災から3年時点でも57.0%であり、地域経済の問題は依然として被災地に強く残っていることがわかった。

## ポイント2 被災地全体を比較すると 北海道胆振東部地震の復興は、阪神・淡路大震災よりも早い

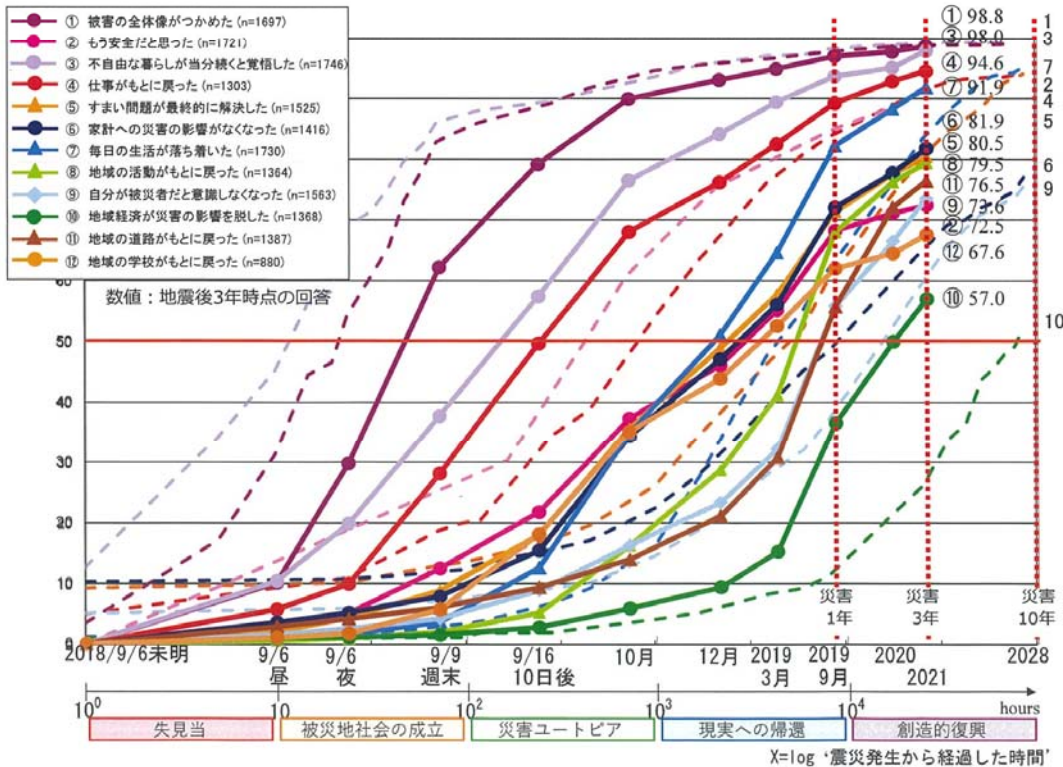
北海道胆振東部地震と同じ内陸型地震災害である1995年阪神・淡路大震災の生活復興を比べることで、北海道胆振東部地震での生活復興の進み具合を検討した。

図の点線が阪神・淡路大震災、実線が北海道胆振東部地震である。

### ●北海道胆振東部地震と阪神・淡路大震災の復旧・復興カレンダーの比較

震災3年時点で比較をすると、ほとんどの項目で阪神・淡路大震災よりも早い速度で復興が進んでいることがわかった。特に「⑥家計への災害の影響がなくなった」（胆振東部81.9%、阪神・淡路69.2%、阪神・淡路の復興スピードを100とすると胆振東部118）、「⑨自分が被災者だと意識しなくなった」（胆振東部73.6%、阪神・淡路65.7%、阪神・淡路の復興スピードを100とすると112）など、阪神・淡路大震災よりも1.1～1.2倍の速さで復興が進んでいた。また12項目の中で最も復興の進捗が遅かった「⑩地域経済が災害の影響を脱した」についても、胆振東部57.0%、阪神・淡路33.8%であり、阪神・淡路の復興スピードを100とすると胆振東部は169であり、経済復興という難しい問題においても阪神・淡路大震災の1.7倍の速度で復興が進んでいることがわかった。

一方で、「②もう安全だと思った」について、胆振東部72.5%、阪神・淡路93.2%であり、阪神・淡路の復興のスピードを100とすると胆振東部は78であり、被災者は地域で暮らし続けるなかでの「安全性」について疑問を持っていることがわかった。胆振東部地震では、阪神・淡路大震災と異なり、大規模な土砂災害などの被害があり、今後、地域の安全性についての復興を進めていく必要があることが考えられる。





**ポイント3 遠浅は他地域よりも復興スピードが速い。  
追分、安平、早来の地域経済の復興が課題である。**

●地域別の復興カレンダーの比較（4地域の復興カレンダー）

復興カレンダーについて、地域別（追分・安平・早来・遠浅）の復興カレンダーを作成した。

また、復興カレンダーの12項目別についても、各地域での復興スピードが容易に比較できるように復興カレンダーを作成した。

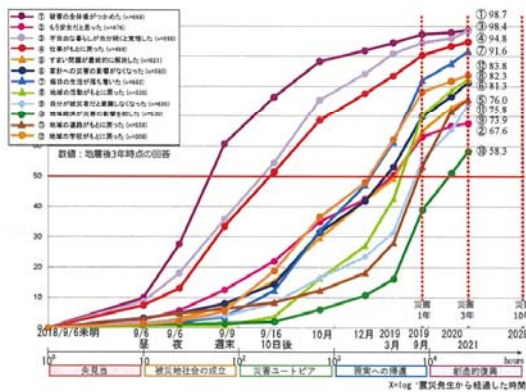
遠浅では、すべての項目について7割を超えており、他地域よりも復興のスピードが速いことがわかった。

追分では、7割を切っていた項目として「②もう安全だと思った」が67.6%（安平78.3%、早来72.8%、遠浅80.4%）、「⑩地域経済が災害の影響を脱した」が58.3%（安平52.9%、早来51.3%、遠浅72.8%）の2項目であった。

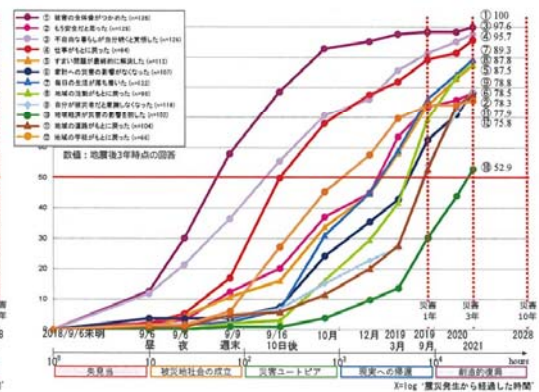
安平では、7割を切っていた項目として「⑩地域経済が災害の影響を脱した」が52.9%（追分58.3%、早来51.3%、遠浅72.8%）の1項目であった。

早来では、7割を切っていた項目として「⑫地域の学校が元に戻った」が50.1%（追分83.8%、安平75.8%、遠浅77.0%）、「⑩地域経済が災害の影響を脱した」が51.3%（追分58.3%、安平52.9%、遠浅72.8%）の2項目であった。

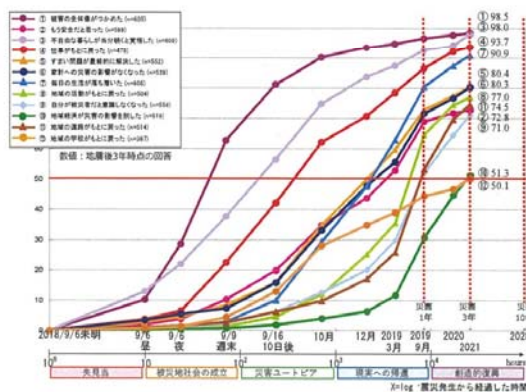
●追分



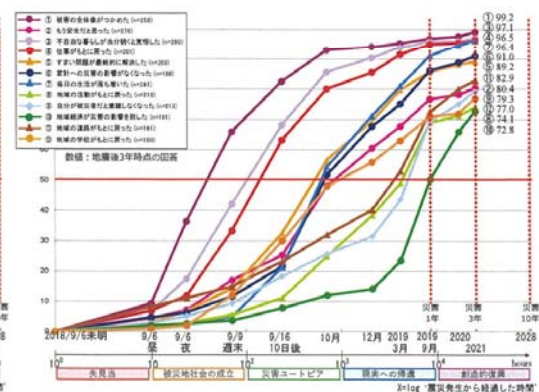
●安平



●早来

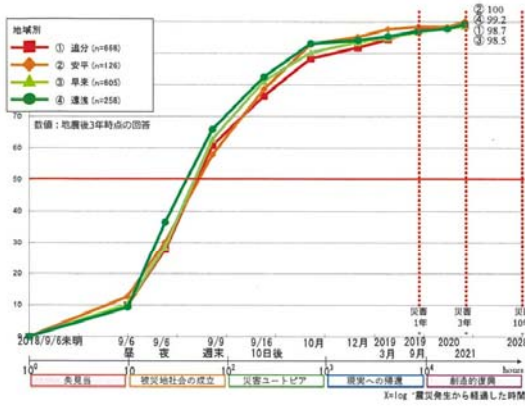


●遠浅

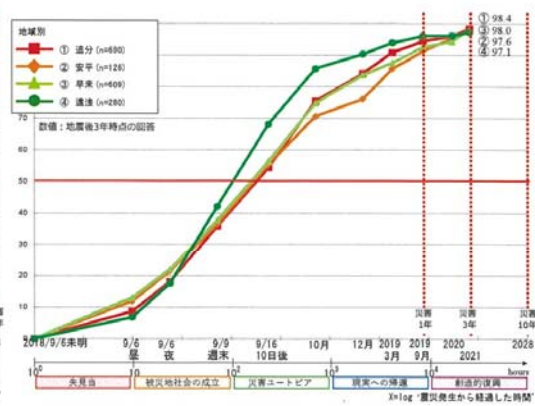


● 12項目別の復興カレンダー（1）（全体%の大きい順に掲載）

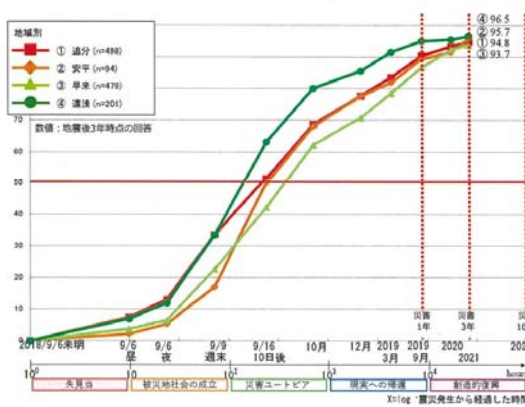
①被害の全体像がつかめた 98.8%



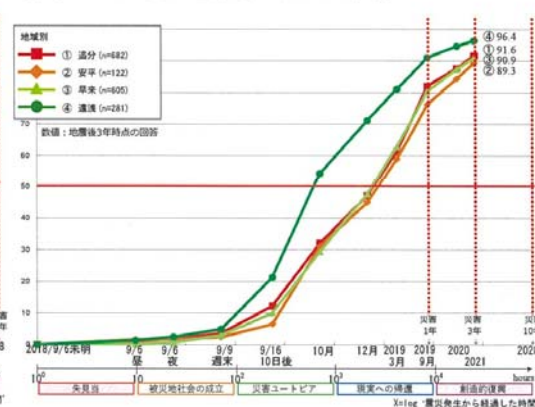
③不自由な暮らしが当分続くと覚悟した 98.0%



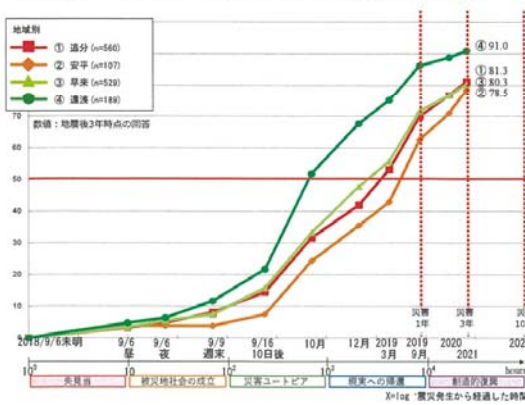
④仕事ももどに戻った 94.6%



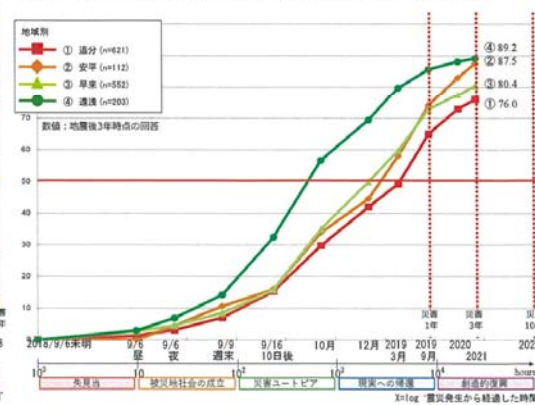
⑦毎日の生活が落ち着いた 91.9%



⑥家計への震災の影響がなくなった 81.9%

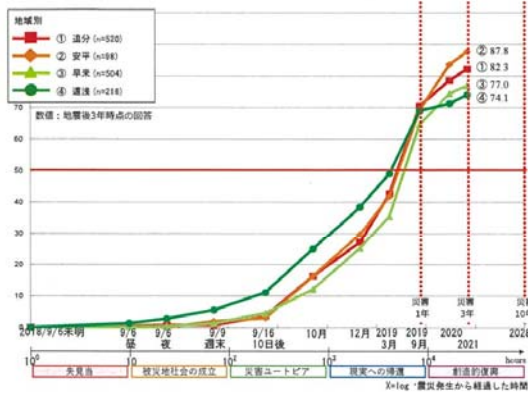


⑤すまいの問題が最終的に解決した 80.5%

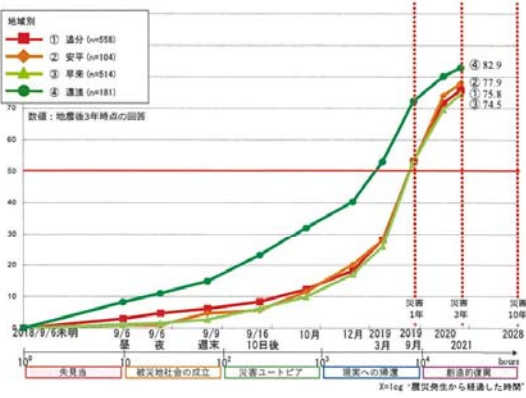


● 12項目別の復興カレンダー（2）（全体%の大きい順に掲載）

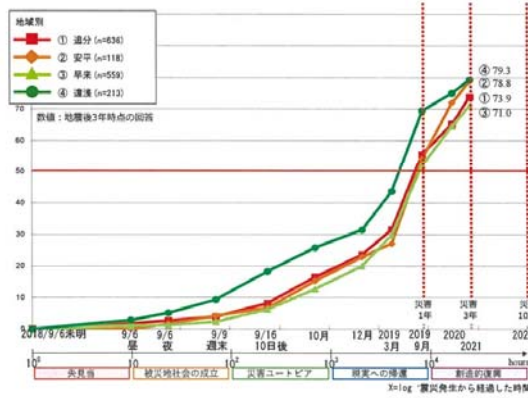
⑧地域の活動がもとに戻った 79.5%



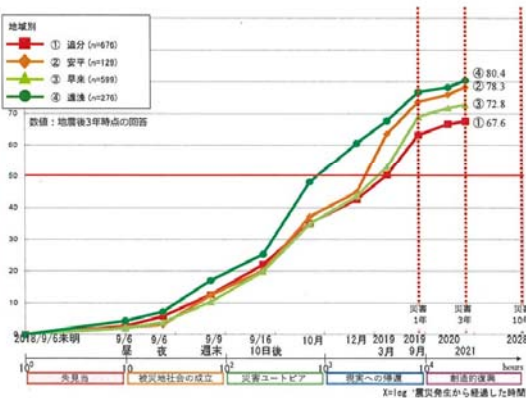
⑩地域の道路がもとに戻った 76.5%



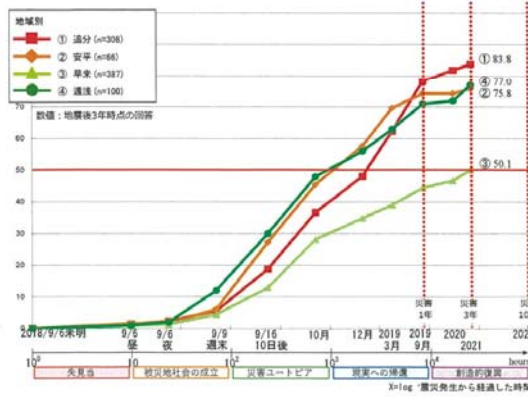
⑨自分が被災者だと意識しなくなった 73.6%



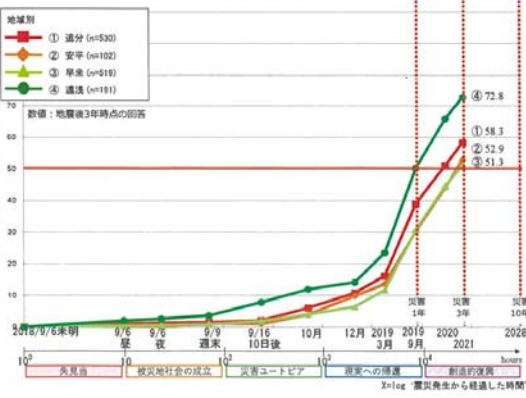
⑫もう安全だと思った 72.5%



⑫地域の学校がもとに戻った 67.6%



⑩地域経済が震災の影響を脱した 67.0%





復興カレンダー 「住まいの問題は解決」「家計への震災の影響はなくなった」「自分は被災者ではない」とほとんどの大字で多数の人が感じていた。一方で「地域経済は震災の影響を脱した」については、地域でバラツキが多かった

●地区別の復興カレンダー作成作業：

復興カレンダーの質問項目のうち、「住まいの問題は最終的に解決した」「家計への震災の影響はなくなった」「自分は被災者であると感じていない」「地域経済は震災の影響を脱した」の4問について、地域における差を見るために、次のように作業をして、地図に表した。

現在までに「完了している」と回答した人が多い場合は緑系、「未だ完了していない」と回答した人が多い場合は赤系、「わからない・覚えていない」と回答した人が多い場合はグレー系、回答数が拮抗している場合は黄系、で地区を色塗りした。

特にそれぞれの回答が顕著であった場合は、より濃い色で表現している。

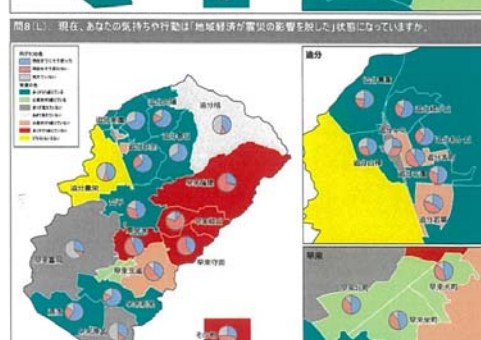
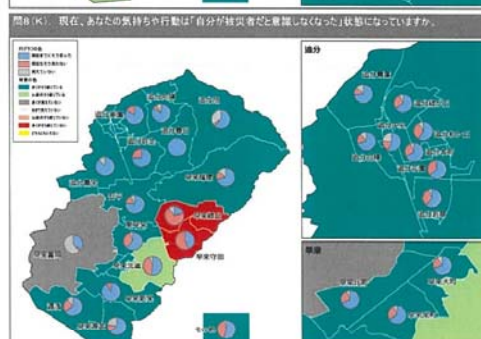
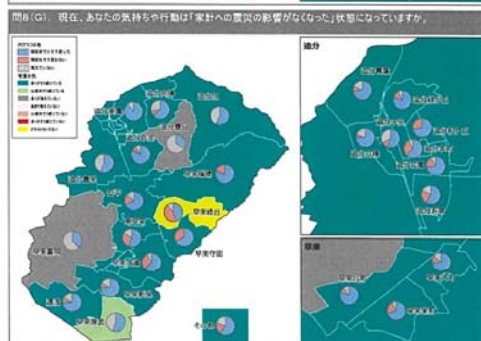
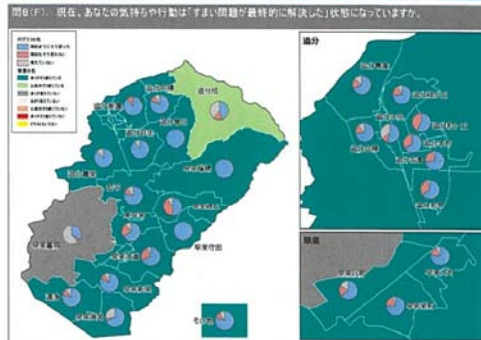
●地区別の復興カレンダーの結果：

「住まいの問題は最終的に解決した」は、ほとんどの大字が「解決した（緑）」とした人が大勢を占めた。1大字が「やや解決した（薄緑）」、1大字が「わからない・覚えていない（灰）」とした人が多かった。

「家計への震災の影響はなくなった」は、ほとんどの大字が「影響がなくなった（緑）」とした人が大勢を占めた。1大字が「やや影響がなくなった（薄緑）」、1大字が「わからない・覚えていない（灰）」とした人が多かった。1大字においては「影響がなくなった」「影響はある」の回答数が拮抗していた（黄）。

「自分は被災者であると感じていない」はほとんどの大字が「意識していない（緑）」とした人が大勢を占めた。1大字が「やや意識している（薄緑）」、1大字が「まだ意識している（赤）」とした人が多かった。

「地域経済は震災の影響を脱した」は、地域によってバラツキが多かった。「影響を脱した（緑）」とした大字は12、「影響をやや脱した（薄緑）」とした大字は3、「影響を脱していない（赤）」とした大字は町外を含め5、「影響をやや脱していない（ピンク）」とした大字は3であった。さらに1大字においては「影響を脱した」「影響を脱していない」の回答数が拮抗していた（黄）。また4大字においては「わからない・覚えていない（灰）」「ややわからない・覚えていない（薄灰）」とした人が多かった。



くらしむき1 北海道胆振東部地震から3年、被害程度が甚大であるほど収入は減り、支出は増え、預貯金は減った、と回答

「くらしむき」に関しての質問項目では、市井に多く出回っている家計簿の形式を採用し、図-3 に示すように収入・支出・預貯金に関して、震災後家計に生じた変化を「増えた・変わらない・減った」の3選択肢で回答させた。

さらに支出に関しては細かく「食費、外食費、住居・家具費、光熱費、日用雑貨費、衣服費、文化・教育費、交際費、レジャー費、交通費、医療費、保険料、自動車費」の13費目に細分し、同じく3選択肢で回答を求めた。

質問項目

震災前と比べて、お宅の家計簿では…	
1) 収入	(増えた・変わらない・減った)
2) 支出	(増えた・変わらない・減った)
3) 食費	(増えた・変わらない・減った)
4) 外食費	(増えた・変わらない・減った)
5) 住居・家具費	(増えた・変わらない・減った)
6) 光熱費	(増えた・変わらない・減った)
7) 日用雑貨	(増えた・変わらない・減った)
8) 衣服費	(増えた・変わらない・減った)
9) 文化・教育費	(増えた・変わらない・減った)
10) 交際費(招待費を除く)	(増えた・変わらない・減った)
11) レジャー費	(増えた・変わらない・減った)
12) 交通費	(増えた・変わらない・減った)
13) 医療費	(増えた・変わらない・減った)
14) 保険料	(増えた・変わらない・減った)
15) 自動車費(ある方のみ)	(増えた・変わらない・減った)
16) 預貯金	(増えた・変わらない・減った)

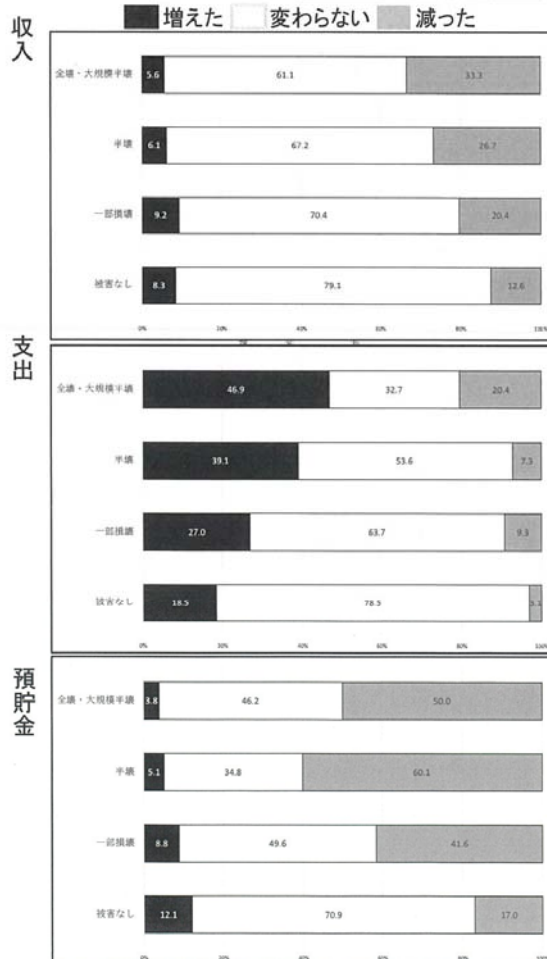


●被災者の収入、支出、預貯金

年齢・性別など個人属性による系統的な差異は見られなかったが、建物被害程度、「全壊・全焼、半壊・半焼、一部損壊、被害なし」の4カテゴリーによって回答傾向に大きな差が見られた。家屋の被害が、大きければ大きいほど、「収入は減り」「支出は増え」「預貯金は減った」と答えた人の割合が多かった。

この結果は被害程度が大きいほど、収入が減り、同時に支出が増え、その差額を預貯金で穴埋めし、家計のバランスをとっていることを示唆している。住宅被害の程度が高い人ほど、くらしは今も苦しい事が明らかにされた。

なお、分析対象者の住宅被害程度は、全壊・大規模半壊64(3.4%)、半壊196(10.5%)、一部損壊1,385(74.2%)、被害なし221(11.8%)、回答なし126(6.3%)であった。なお、家計の各項目において、不明と回答したものは、項目ごとに分析対象から除外した。





くらしむき2 支出細目については、文化・教育、衣服、外食、レジャーをあきらめてのやりくり生活を行っていた

●増える一方型 “出るものは出る”  
 —住居・家具費、医療費、自動車費—  
 このタイプは、家屋の被害程度が大きいほど、支出が増えるタイプであり、たとえ収入が減って生活が苦しくなっても、個人の裁量ではやりくりで減らす事のできる費目ではなかったことが特徴である。

具体的には、住宅の損失に伴って修理・改築の必要性が高まる「住居・家具費」をはじめ、減らすことのできない「医療費」、生活に必須の「自動車費」については、かつ個人の裁量では支出を減らしたい経費であった。

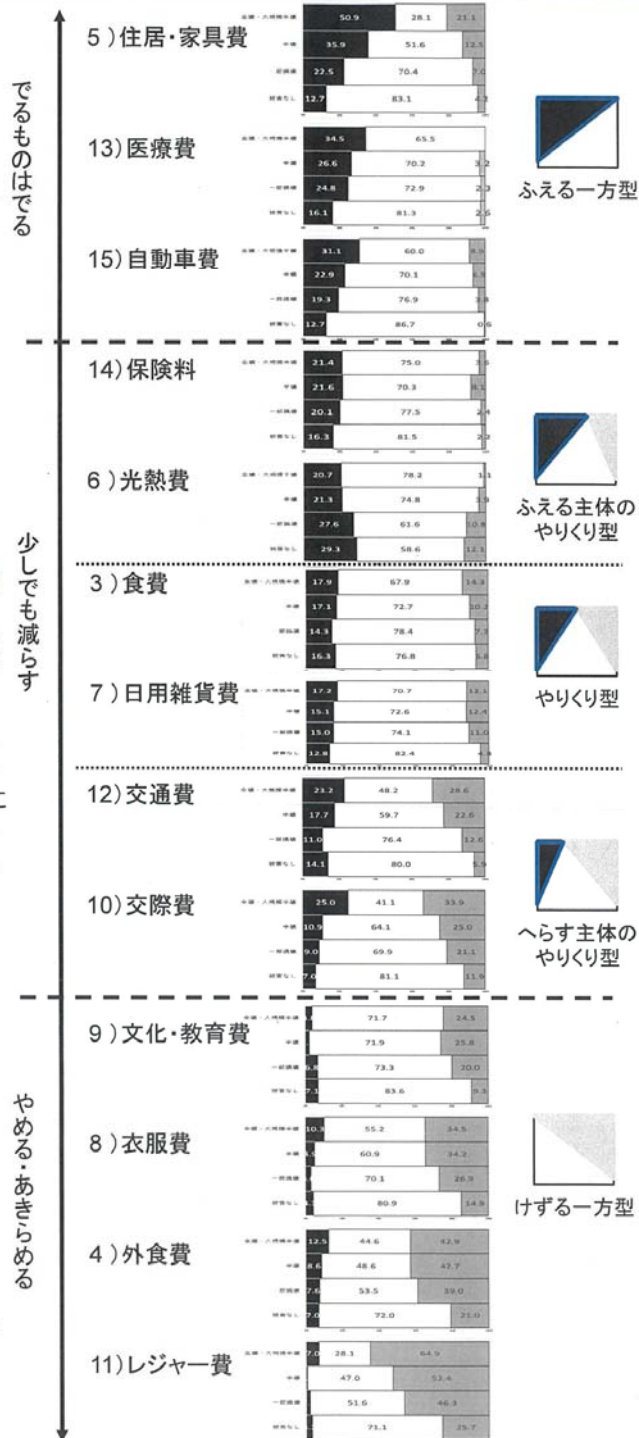
●やりくり型 “少しでも減らす”  
 —保険料、光熱費、食費、日用雑貨費、交通費、交際費—

これらの7 細目は、生活が苦しくなったとき、個人個人の裁量で少しでも減らす事が可能な費目である事が特徴である

やりくり型には、やりくりをしても増えた人が多い、反対に減らした人が多い、そして両者がほぼ拮抗しているの3 パターンにさらに分けることができた。・やりくりをしても増えた人が多いパターンには、「保健料」「光熱費」が該当した。

- ・反対に減らした人が多いパターンには「交通費」「交際費」が該当した。
- ・両者がほぼ拮抗しているパターンには「食費」「日用雑貨」が該当した。

●けずる一方型 “やめる・あきらめる”  
 —外食費、レジャー費—  
 最後のパターンは、被害程度が高い人ほどその支出を減らしている。これらの細目に関しては、収入が減ったとき、これらの活動を「やめる・あきらめる」人が多かった。外食費・レジャー費の切り詰めに留まらず、文化・教育費や衣服費までも減らしている人が多い結果となった。





「くらしむき」参考：  
 阪神・淡路大震災から  
 の復興調査：  
 2001年調査  
 (発災から6年目)

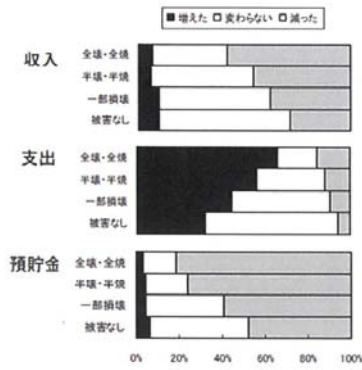


図-4 家屋被害別 収入・支出・預貯金

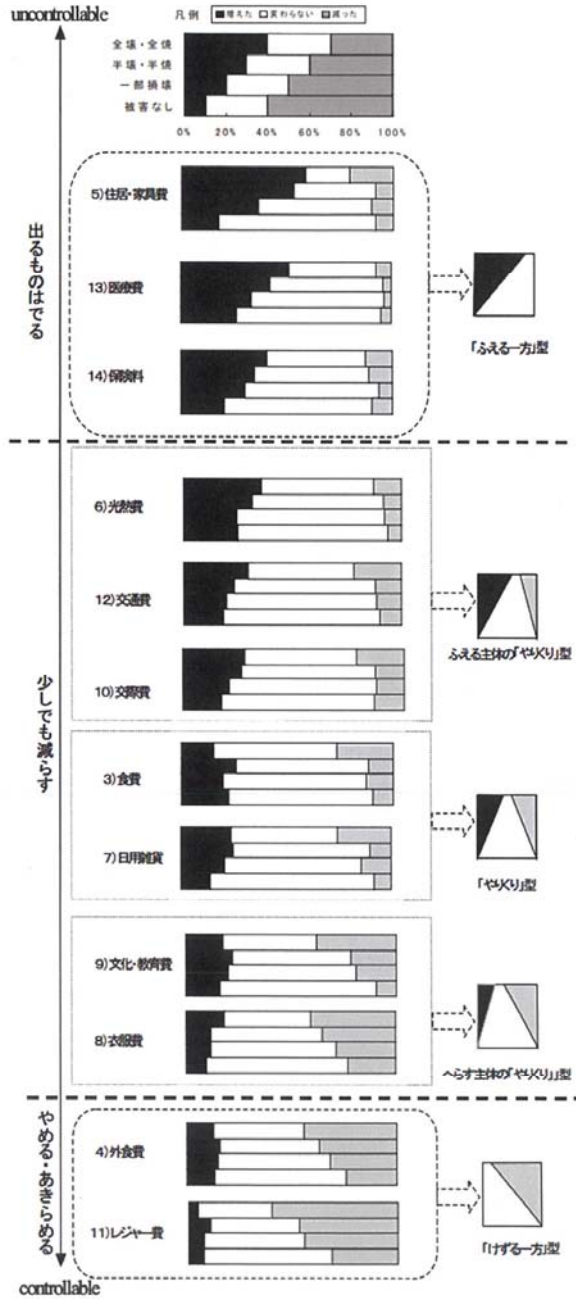
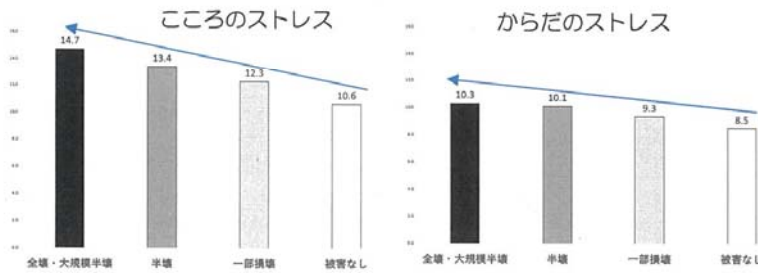


図-5 被害程度別支出細目

## ストレス 被災者のこころとからだにおいては、「自宅の被害程度が高い」「若い世代」「高齢世代」で、ストレスが高い傾向が見られた。

こころとからだについては、その健康度を測るために、最近1ヶ月にどのようなストレス反応を経験していたのかをたずねた。具体的には、「あなたは最近1ヶ月の間（令和3年（2021年）7月～8月）に、次にあげた『こころやからだの状態』をどのくらい体験しましたか」として12項目をあげ、「まったくない～いつもあった」の5段階評定で回答を求めた。調査結果を因子分析にかけたところ「こころのストレス」「からだのストレス」を図る指標として、安定的な結果が得られた。

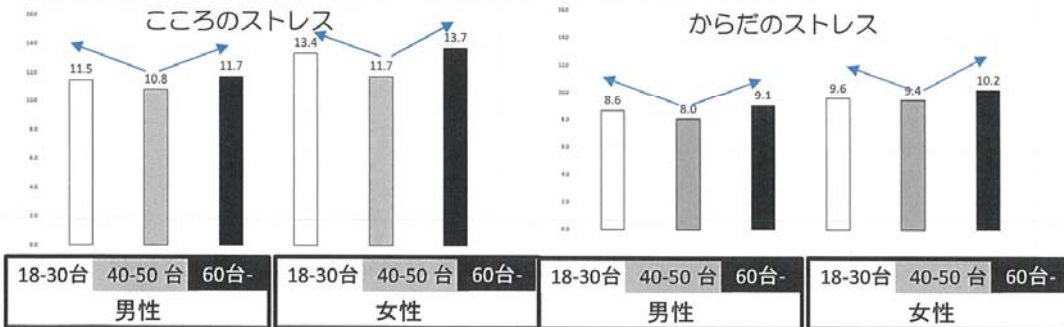
- 家屋被害程度が大きい人ほど、こころとからだのストレスは高かった。



災害時の自宅の被害程度が大きい程、現在もストレス度合いが高いことがわかった。その差は「こころ」の方が「からだ」より顕著であり、どちらも統計的に意味のある差がみられた。

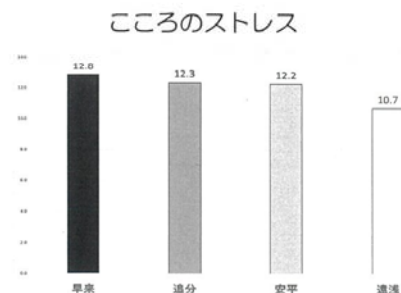
グラフは平均値を用いてそのストレスの高さを表現している。

- 女性の方が男性より、こころとからだのストレスは高かった。
- 18-30歳代、60歳以上のストレスは、40-50歳代よりストレス度合いが高かった



性別と年代についてはいずれも統計的に意味のある差が見られた

- 早来は遠浅より、こころのストレス度合いが高く、地域においてバラツキが見られた



からだのストレスにおいては、地域によって統計的な差はみられなかった。こころのストレスにおいては、地域によって、差がみられた。地震による被害が大きかった早来地区ではストレス得点の平均値は12.8と最も高く、次いで遠分地区12.3、安平地区12.2となった。遠浅地区は最も低く10.7であった。

- まとめ：「自宅の被害程度が大きかった」「若い世代」「高齢世代」においてこころとからだのストレスが高い傾向が見られた。また、被害程度が大きかった地区ほど、こころのストレスが高くなっており、今後の施策を展開する中で、配慮をしていく必要が認められる結果となった。

まちの復興状況 1年度のあなた  
 まちの復興スピードは、被害の大きかった地域で「遅い」と感じている人の割合が高かった  
 将来に対して、被害の大きかった地域では、肯定的なイメージを持っていない人の割合が高かった

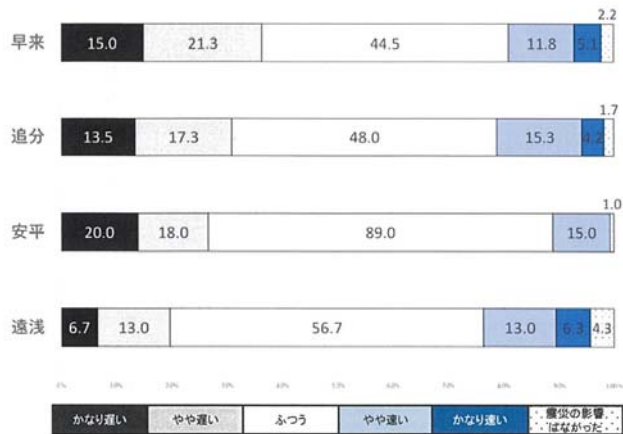
まちの復旧・復興状況

●まちの復興スピード：

まちの復興状況に対して、町民一人ひとりがどのようなイメージを持っているかを調べるために、「まちの復旧・復興状況」について、「あなたの現在住んでいるまちでの震災後の状況についてお聞きします。

それぞれの質問で、あなたの印象にあてはまるもの1つに○をつけてください」という質問をして、「まちの復旧・復興状況」に関しては「かなり速いーかなり遅い」までの5段階の選択肢を与えた。

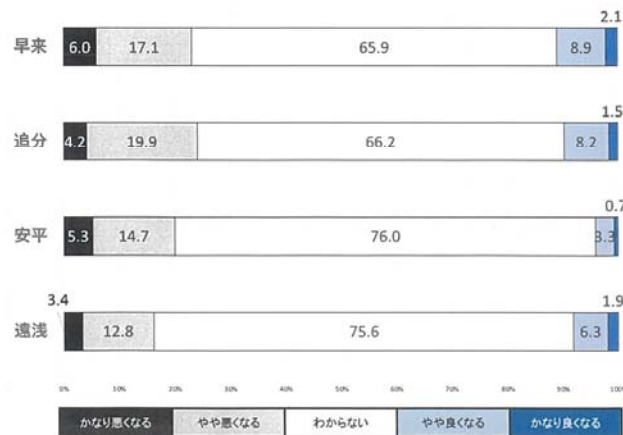
全体的には、「かなり早い」「やや早い」より「かなり遅い」「やや遅い」と回答した人の割合が多かった。また「かなり遅い」「やや遅い」と回答した人で地域差が見られ、早来地区、追分地区、安平地区の順が多かった。地震災害の発生から3年しか経っておらず、被害の影響が顕著に表れたと考えられる。



1年後のあなた

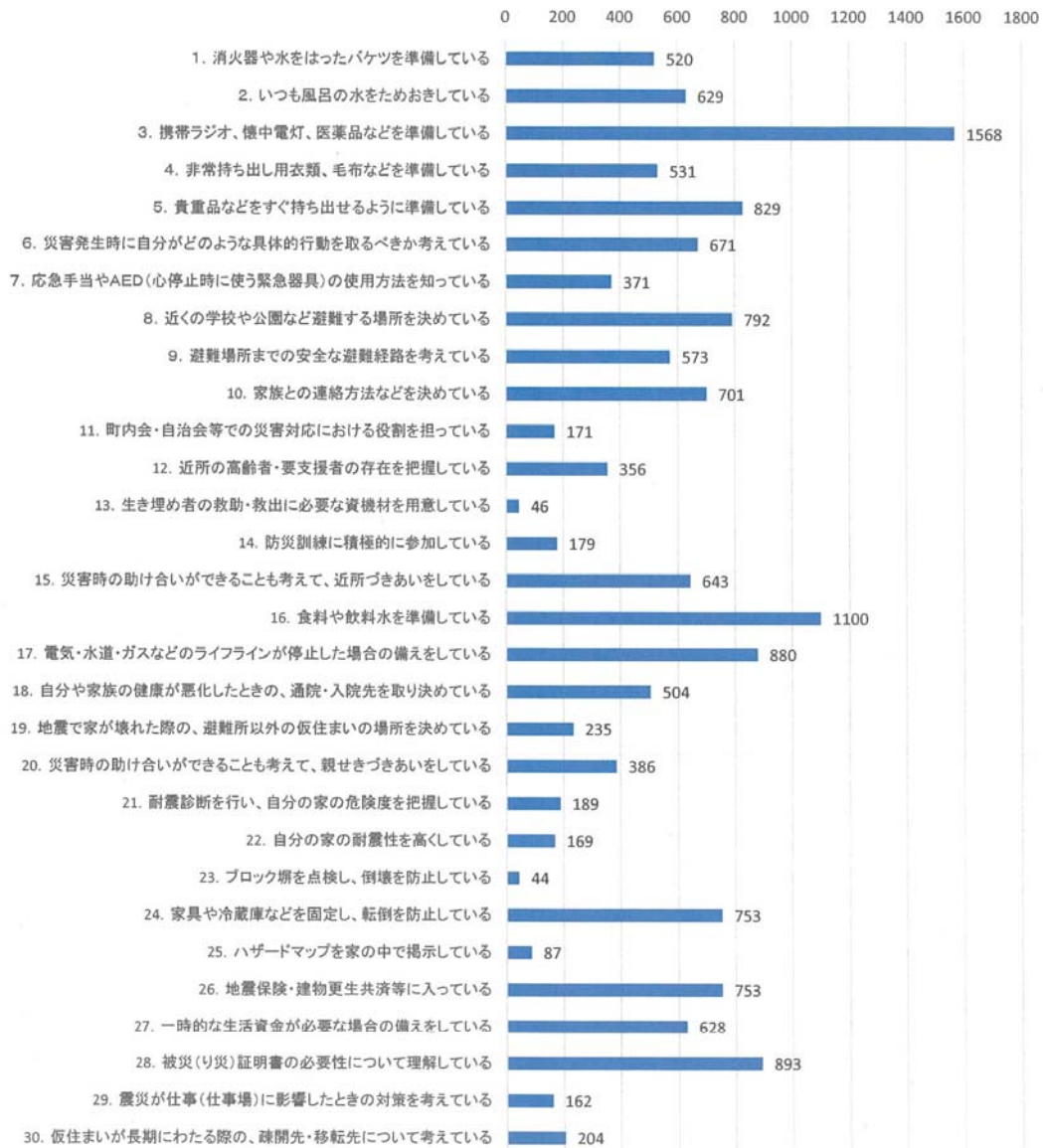
●1年後のあなたの姿：

1年後の生活の見通しについては、「1年後のあなたを想像してください。あなたは今よりも生活が良くなっていると思いますか、どうですか。」として、「かなり良くなるーかなり悪くなる」まで5選択肢を与えた。全体的には「かなりよくなる」「ややよくなる」と回答した人より「かなり悪くなる」「やや悪くなる」と回答した人の割合が多かった。また、早来地区、追分地区といった被害程度が比較的神代で会った地域において、その傾向が顕著であった。



## 備えについて

調査回答者の現在実行している「備え」について、集計、整理した





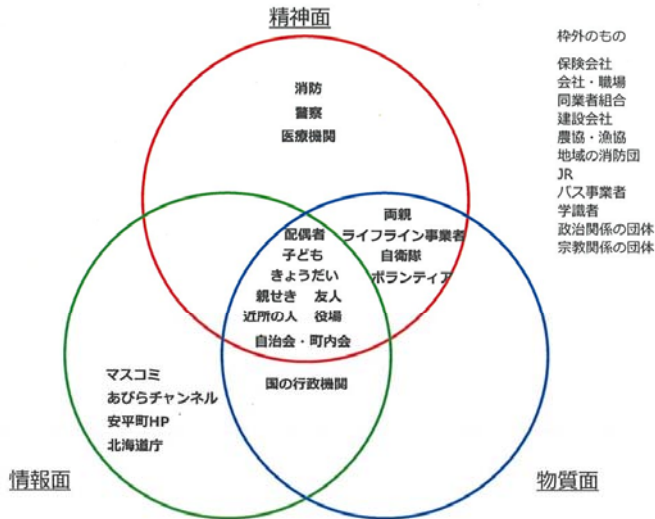
精神面・物質面・情報面の支援者について「血縁、地域の人・組織、役場」を、すべての側面で頼りにしていた

「被災者がどのような人・組織（支援者）を頼りにしたのか」について、精神面・物質面・情報面の3つの側面から明らかにした。

●次の災害で頼りにしたい支援者（複数回答）

被災者の支援の実態を明らかにするために、「もし次に災害が起こったとして、あなたが頼りにできるのは以下のどの支援者だと思いますか」という質問をすることで、精神面、物質面、情報面でそれぞれ頼りにできると思う支援者（全31支援者・支援組織）を被災者に選択してもらった（複数回答）。

精神面・物質面・情報面の円の内側に書いてある支援者が、それぞれの側面で平均値（平均支持率）以上の支持を集めた支援者を意味している。この図から、人々がどのような側面で誰を支援者として評価・期待しているのかという「被災者の全人的な支援の実態」を知ることができる。

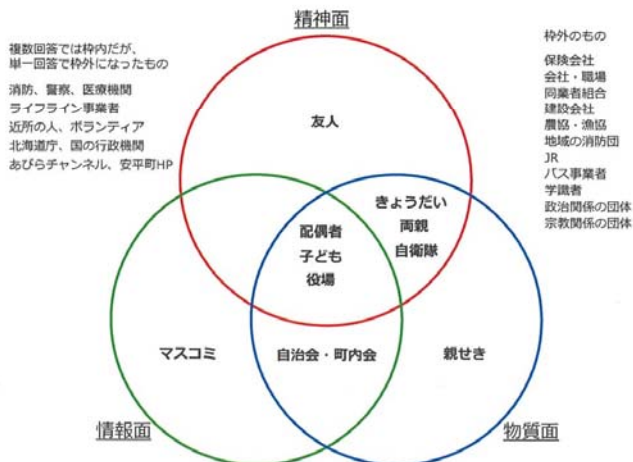


図を見ると、血縁（配偶者、子ども、きょうだい、親せき）、友人、地域の人・組織、役場などを精神面・物質面・情報面のすべての側面で頼りにしていることがわかった。

また、両親、ライフライン事業者、自衛隊、ボランティアは精神面と物質面で、国の行政機関は物質面と情報面で頼りにしていた。

さらに、消防、警察、医療機関は精神面で、マスコミ、あびらチャンネル、安平町HP、北海道庁は情報面での支援を期待していることがわかった。

●次の災害で最も頼りにしたい支援者（単数回答）



上記の質問の後に「上記の中で一番頼りにする人・組織はどれですか」という質問をして、最重要かつ不可欠な支援者を明らかにした。

その結果「配偶者、子ども、役場」がすべての側面で最重要の支援者として認識されていた。また精神面・物質面では「きょうだい、両親、自衛隊」、物質面・情報面では「自治会・町内会」、精神面では「友人」、物質面では「親せき」、情報面では「マスコミ」を最重要かつ不可欠の支援者として評価していることがわかった。

60代以上になると支援のあてが少なくなり、身近な血縁や地域が同時被災をすると、公的機関が唯一の支援者になる

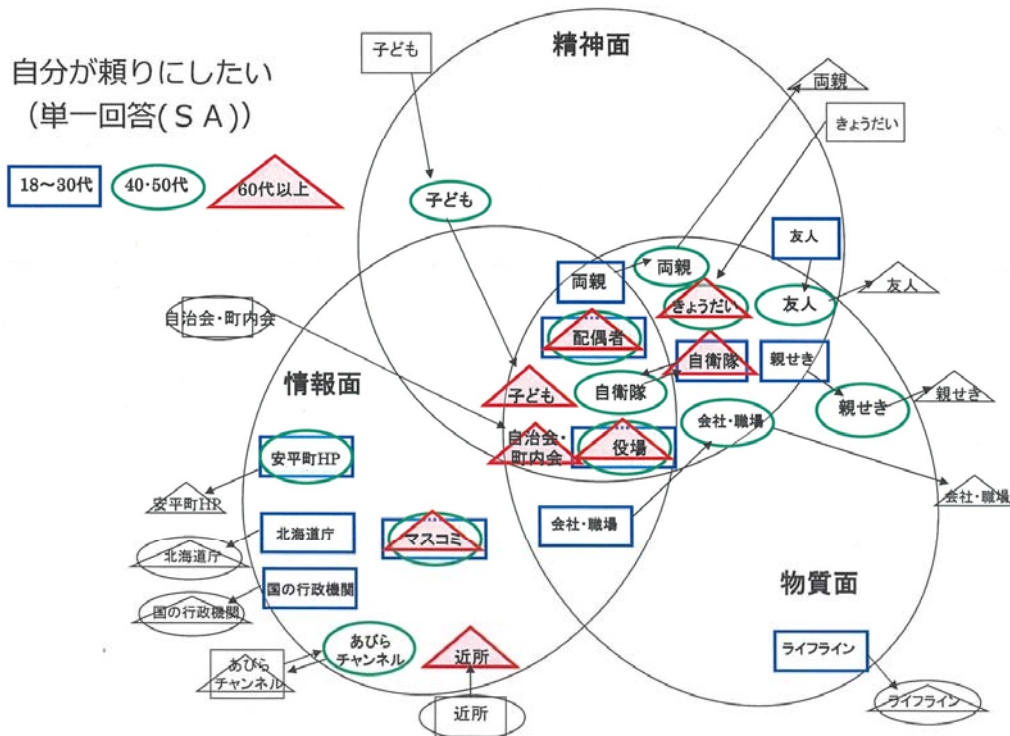
●世代別による次の災害で頼りにしたい支援者（単数回答）

次の災害で頼りにしたい人・組織について世代別（20・30代、40・50代、60代以上）に、それぞれのライフ・ステージによって支援者にどのような違いがあるのかを分析した。

世代に関係なく同じ側面で頼りにされている支援者は、精神・物質・情報面での「配偶者」と、同じく精神・物質・情報面での「役所」・情報面での「マスコミ」といった公的支援の3支援者だけであった。それ以外の支援者については、世代によって違いが見られ、ライフ・ステージによって頼りにできる人・組織に違いがあることがわかった。

特徴的なのは、60代以上において支援を期待できる支援者が8支援者と最も少なく、かつ、配偶者・子ども・きょうだいという身近な家族と、自治会・近所という地域の力、役場・自衛隊・マスコミといった公的な組織が支援者となっていたことである。

もし災害時に配偶者・子ども・きょうだいと同時に被災すると、地域における自治会・ご近所に頼らざるを得なくなり、さらに地域自体も大きく被災をして地域の機能も失われてしまった場合、公的機関以外に実際に頼りにできるあてがほとんどないことがわかる。これは豊かな人的・組織的資源をもっているそれ以外の世代とは対照的である。災害対応従事者からみると、特に60代以上の被災者に対する公的機関の支援は、被災者の生活再建の成否にも大きな意味を持っていることが考えられる。



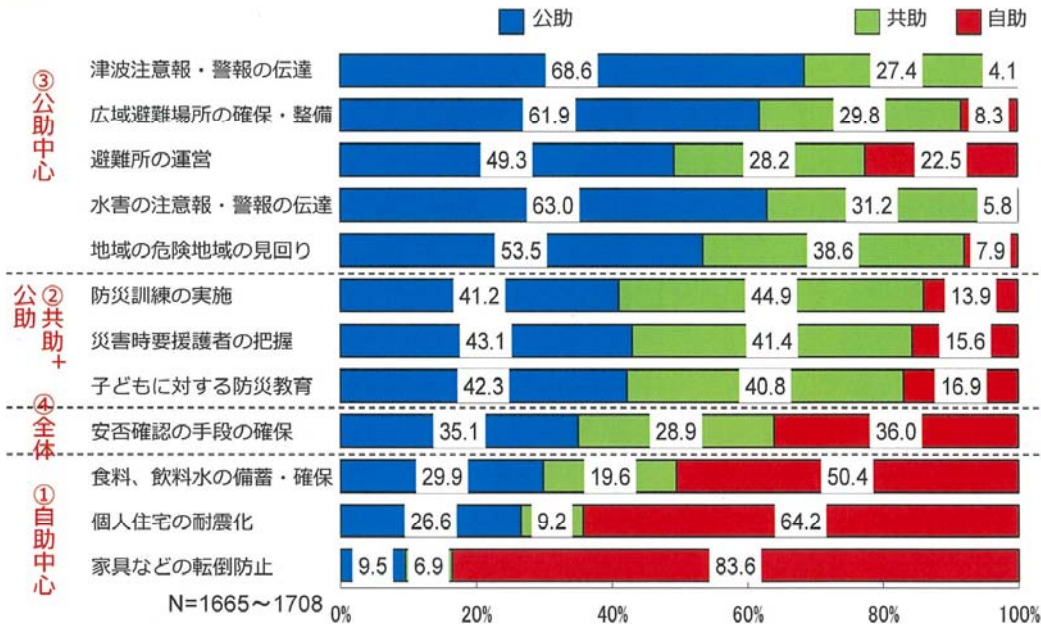


ポイント6

様々な防災対策は、自助・共助・公助の役割分担の考え方から、4種類にわけることができる

「各防災対策を行う上での自助・共助・公助の役割分担はどうあるべきか」について、被災者の実体験をもとに明らかにした。

●防災対策における自助・共助・公助の役割分担



防災対策における自助・共助・公助の役割分担のあり方について、被災者の実体験をもとに尋ねたところ、4つのグループにわけられることがわかった。

1つめは「自助中心ですべき」という対策（①）で、「家具などの転倒防止」「個人住宅の耐震化」「食料、飲料水の備蓄・確保」が該当する。これらは、自助の役割分担が5割を超えており、住民1人1人が災害に対する「わがこと意識」をしっかり持った上で自主的に進めるべき対策である。

2つめは「共助と公助が協力しなからすべき」という対策（②）で、「防災訓練の実施」「災害時要援護者の把握」「子どもに対する防災教育」が該当する。これらは共助と公助を足すと8割を超えるグループで、共助が公助のどちらか一方に任せず、例えば、公助が制度的・経済的なバックアップをしなが、共助が積極的に活動を実践していくなど、共助と公助が協力しながら推進していく必要がある。

3つめは「公助中心ですべき」という対策（③）で、「津波注意報・警報の伝達」「広域避難場所の確保・整備」「避難所の運営」「水害の注意報・警報の伝達」「地域の危険箇所の見回り」が該当する。これらは、公助の役割分担が5割（1の位を四捨五入して5割になるものを含む）を超えており、公助が責任をもって情報伝達体制を整備したり、災害時の行政サービスの質の保証する必要がある。

4つめは「自助・共助・公助が協力すべき」という対策（④）で、「安否確認の手段の確保」が該当する。これらは自助・共助・公助のどれもが25~40%であり、自助・共助・公助がそれぞれの役割分担をしながら協力して推し進めていくことが効果的である。例えば、道や町が安否確認のための制度づくり・システムづくりを行い、地域では町と協力して災害時要援護者などの安否確認リストを作成・保管・更新し、地域は各家庭の協力のもとに安否確認を行わなければ、安否確認の手段の確保は完成されないことが考えられる。これらの結果から、災害を経験した被災者の知見・教訓として「それぞれの防災対策において自助・共助・公助の役割分担の割合は異なり、対策ごとに3者が協力関係を構築しながら対策を実施していくことが必要である」ことが明らかになった。

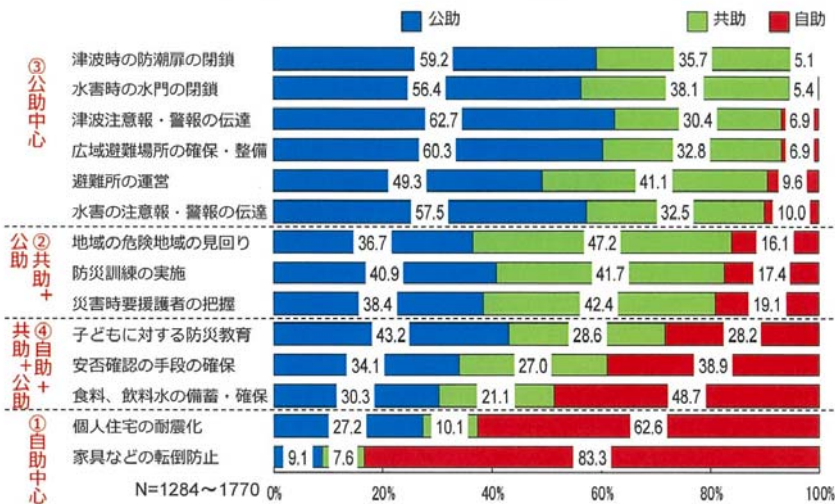
## 自助・共助・公助の役割分担の考え方は、2011年東日本大震災、1995年阪神・淡路大震災の結果と共通している

「各防災対策を行う上での自助・共助・公助の役割分担」の結果について、2011年東日本大震災、1995年阪神・淡路大震災の結果とほぼ同じであり、被災者が考える防災対策の役割分担には共通性があることがわかった。

### ●東日本大震災における自助・共助・公助の役割分担（2016年3月（震災から5年））

北海道胆振東部地震と同じく、①自助中心、②共助・公助協力、③公助中心、④自助・共助・公助協力の4グループにわかれた。

④は「安否確認の手段の確保」の他に、「子どもに対する防災教育」「食料・飲料水の備蓄・確保」が含まれた。

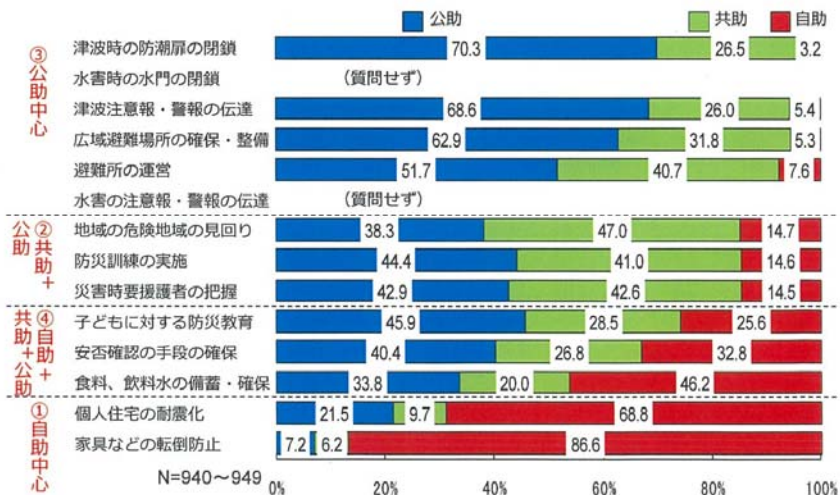


東日本大震災生活復興調査チーム「震災から5年が経過するなかでの東日本大震災生活復興調査 平成28年調査結果報告書」, 2018

### ●阪神・淡路大震災における自助・共助・公助の役割分担（2005年3月（震災から10年））

北海道胆振東部地震と同じく、①自助中心、②共助・公助協力、③公助中心、④自助・共助・公助協力の4グループにわかれた。

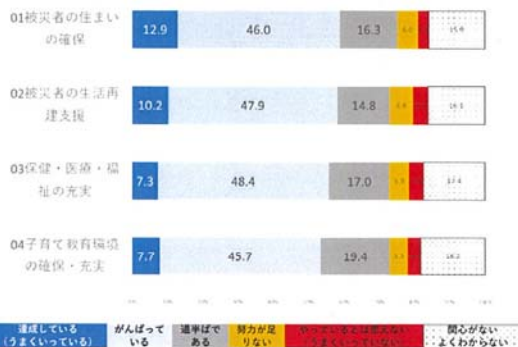
④は、東日本大震災と同じ結果で、「安否確認の手段の確保」の他に、「子どもに対する防災教育」「食料・飲料水の備蓄・確保」が含まれた。



木村玲欧他「災害からの被災者行動・生活再建過程の一般化の試み—阪神・淡路大震災、中越地震、中越沖地震復興調査結果討究—」 地域安全学会論文集, No.13, 175-185, 2010



# 復興計画 1 復興まちづくり計画 基本方針1 「住まいと暮らしの再建」 は5割以上が「達成している」「がんばっている」と評価



## 基本方針1. 住まいと暮らしの再建

被災者が安心して快適に暮らせる住環境を一日も早く実現するために、住宅再建への支援や公的住宅等の整備を進めるとともに、生活再建と安全・安心な生活環境づくりを進めるため、被災者の暮らしに必要な生活機能や教育環境、保健・医療・福祉の横断的な連携による体制の確保・充実に向けた取り組みを進めます。

### ●住まいと暮らしの再建：5割以上が「達成している」「がんばっている」と評価

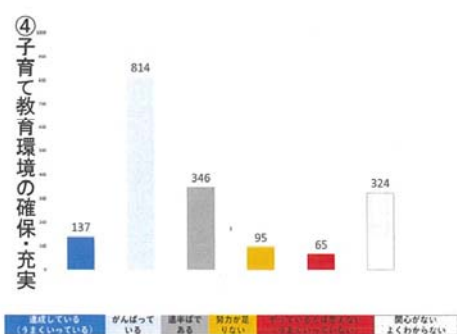
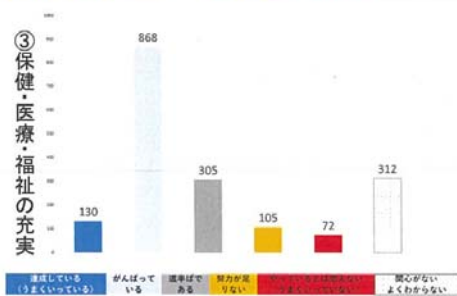
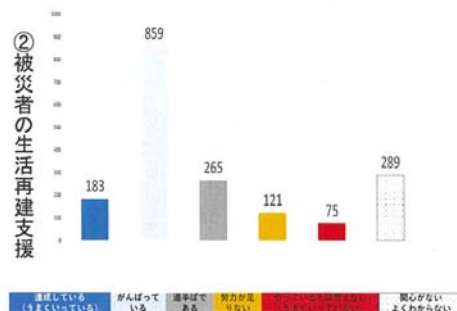
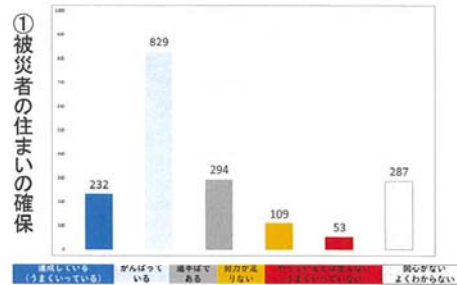
本方針については、①被災者の住まいの確保については57.9%、②被災者の生活再建支援については、58.1%、③保健・医療・福祉の充実については55.7%、④子育て環境の確保・充実については53.4%が、「達成している（うまくいっている）」「がんばっている」と肯定的に評価した。

### ●住まいと暮らしの再建：2割弱が「関心がない・よくわからない」と評価

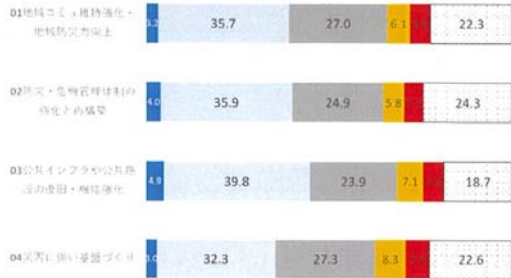
本方針については「道半ばである」と評価した人が、①被災者の住まいの確保については16.3%、②被災者の生活再建支援については、14.8%、③保健・医療・福祉の充実については17.0%、④子育て環境の確保・充実については19.4%、いた。

また本方針については「関心がない・わからない」とした人が、①被災者の住まいの確保については15.9%、②被災者の生活再建支援については、16.1%、③保健・医療・福祉の充実については17.4%、④子育て環境の確保・充実については18.2%、いた。

●まとめ：「基本方針1. 住まいと暮らしの再建」においての4つ取り組みは、半数強の人から「達成」「達成途中」であるとの評価を得た。一方で、2割弱の「関心がない・よくわからない」と感じている人たちへ対して理解を醸成するための取り組みが必要である。



## 復興計画2 復興まちづくり計画 基本方針2 「災害に強いまち・ひとづくり」 は4割前後が「達成している」「がんばっている」と評価



達成している (うまくいっている)    がんばっている    進捗はである    努力が足りない    関心がない・よくわからない

### 基本方針2. 災害に強いまち・ひとづくり

今回の震災を踏まえ、住民の命を守る災害に強いまちづくりや、防災を担うひとづくりに向け、想定外を想定内とする防災意識の向上に向けたソフト面の充実と、防災上必要なインフラ整備等を進めます。

#### ●災害に強いまち・ひとづくり：4割前後の人が「達成している」「がんばっている」と評価

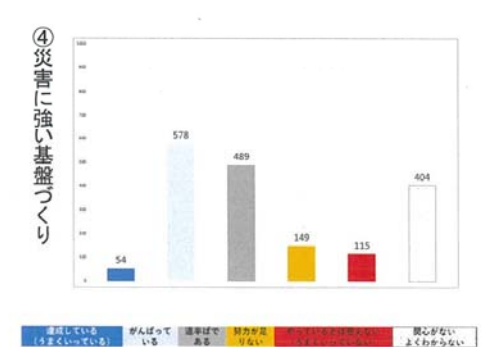
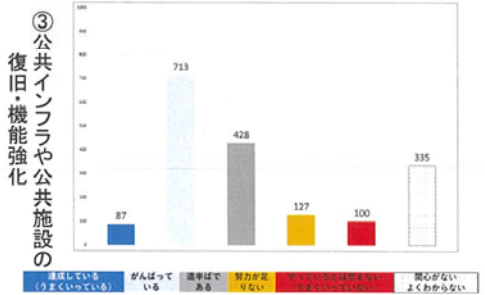
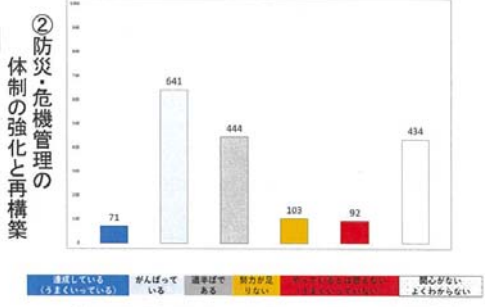
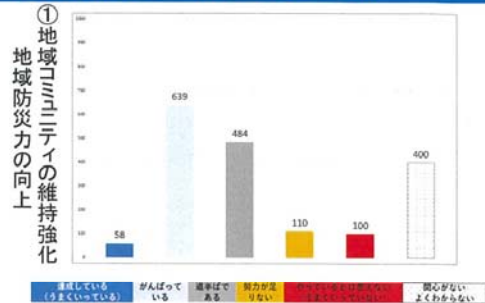
本方針については、①地域コミュニティの維持強化・地域防災力の向上については38.9%、②防災・危機管理体制の強化と再構築については、39.9%、③公共インフラや公共施設の復旧・機能強化については44.7%、④災害に強い基盤づくりについては35.2%が、「達成している (うまくいっている)」「がんばっている」と肯定的に評価した。

#### ●住まいと暮らしの再建：3つの取り組みにおいて、2割強の人が「関心がない・よくわからない」と評価

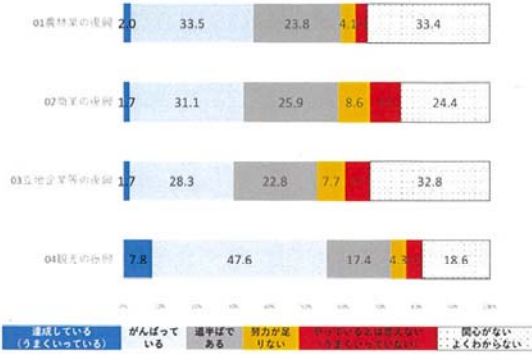
本方針については「道半ばである」と評価した人が、①地域コミュニティの維持強化・地域防災力の向上については27.0%、②防災・危機管理体制の強化と再構築については、24.9%、③公共インフラや公共施設の復旧・機能強化については23.9%、④災害に強い基盤づくりについては27.3%いた。

また本方針については「関心がない・わからない」とした人が、①地域コミュニティの維持強化・地域防災力の向上については22.3%、②防災・危機管理体制の強化と再構築については、24.3%、③公共インフラや公共施設の復旧・機能強化については18.7%、④災害に強い基盤づくりについては22.6%、いた。

●まとめ：基本方針2. 災害に強いまち・ひとづくりにおける4つ取り組みは、4割前後の人から「達成」「達成途中」とあると一定の評価を得た。引き続き取り組みを実施すると共に、「関心がない・よくわからない」と感じている人たちへ対して理解を醸成するための取り組みが必要である。



復興計画3 復興まちづくり計画 基本方針3 「産業と経済の復興」における「観光の振興」に6割弱が「達成している」「がんばっている」と高評価



基本方針2. 産業と経済の復興

今回の地震で甚大な被害を受けた農業、商業、工業等の各産業が早期に復旧し雇用を維持するとともに、地域の活力を取り戻すための取組みを進めます。

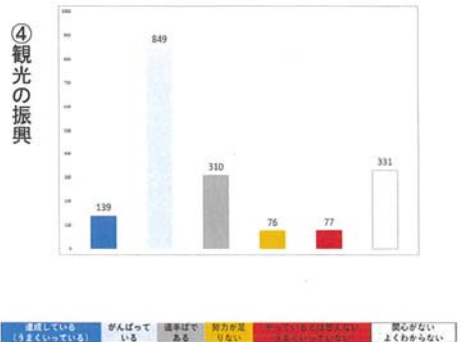
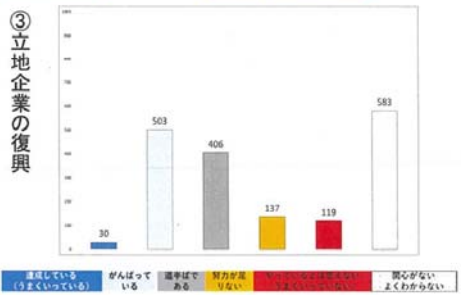
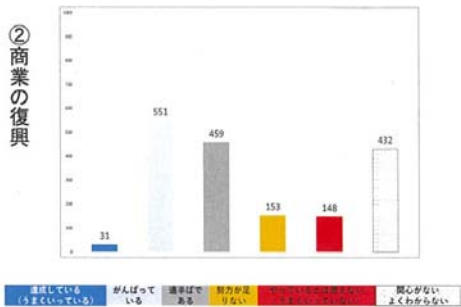
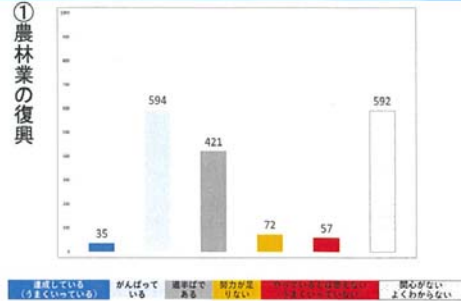
●産業と経済の復興：観光の復興は6割弱の人が「達成している」「がんばっている」と高評価である一方、他の3つの取り組みについては、3割の人が「達成している」「がんばっている」と評価しており、取り組みの評価に差が見られる

本方針については、①農林業の復興については33.5%、②商業の復興については32.9%、③立地企業等の復興については30.0%、④観光の振興については55.4%が、「達成している（うまくいっている）」「がんばっている」と肯定的に評価した。

●産業と経済の復興：農林業の復興、立地企業の復興については、3割の人が「関心がない・よくわからない」と評価

本方針については「道半ばである」と評価した人が、①農林業の復興については23.8%、②商業の復興については25.9%、③立地企業等の復興については22.8%、④観光の振興については17.4%いた。

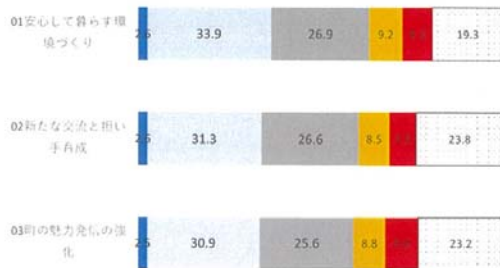
また本方針については「関心がない・わからない」とした人が、①農林業の復興については33.4%、②商業の復興については24.4%、③立地企業等の復興については32.8%、④観光の振興については18.6%、いた。



●まとめ：基本方針3. 産業と経済の復興において、観光の振興においては6割弱の人が「達成」「達成途中」と高く評価を得た。一方で、農林業の復興、立地企業の復興については「未達成」2割、「関心がない・わからない」が3割おり、引き続き取り組みを継続すると共に、「関心がない・よくわからない」と感じている人たちへ対して理解を醸成するための取り組みが必要である。



復興計画4 復興まちづくり計画 基本方針4「未来へつながる復興」では「がんばっている」と「道半ばである」と評価した人が共に3割前後おり、評価が分かれた



達成している (うまくいっている)    がんばっている    道半ばである    努力が足りない    関心がない・わからない

基本方針4. 未来へつながる復興

復興は、単に安平町を元の姿に戻すだけでなく、町民が夢をもって暮らし続けることができ、誰もが住んでみたいと思える未来へつながる復興とともに、地域資源を最大限に活かした新しい安平町を創造していきます。

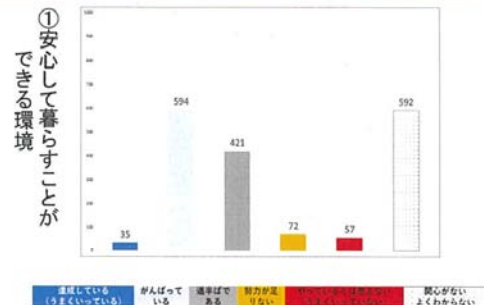
●未来へつながる復興：「達成している」とした人は少なかった。3割前後の人が「がんばっている」と評価  
本方針については、①安心して暮らすことができる環境については36.5%、②未来へつながる新たな交流と担い手育成については33.9%、③町の魅力の発信の強化については33.4%が、「達成している (うまくいっている)」「がんばっている」と肯定的に評価した。

●未来へつながる復興：「努力が足りない」とした人は2.5割前後、「関心がない・わからない」とした人が2割前後

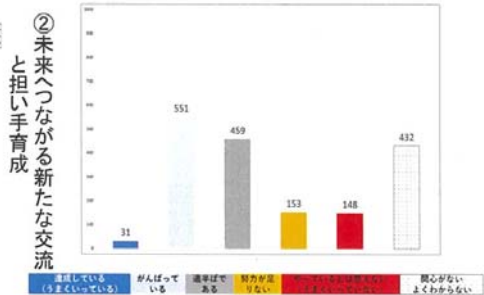
本方針については「道半ばである」と評価した人が、①安心して暮らすことができる環境については26.9%、②未来へつながる新たな交流と担い手育成については26.6%、③町の魅力の発信の強化については25.6%いた。

また本方針については「関心がない・わからない」とした人が、①安心して暮らすことができる環境については19.3%、②未来へつながる新たな交流と担い手育成については23.8%、③町の魅力の発信の強化については23.2%、いた。

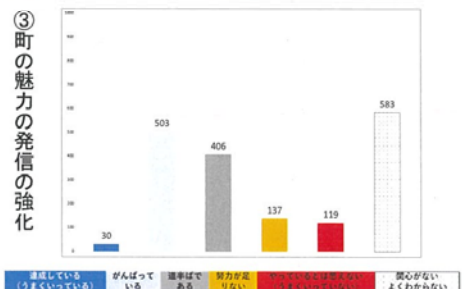
●まとめ：基本方針4. 未来へつながる復興において、「達成している」としている人は少なかったが、「頑張っている」とした人が3割前後となるが、「努力が足りない」とした人が2.5割おり、今後への期待感をもって見守っている人が5.5割となった。一方で「関心がない・わからない」とした人が2割前後おり、これらの人々を巻き込むことが重要であることがわかった



達成している (うまくいっている)    がんばっている    道半ばである    努力が足りない    関心がない・わからない



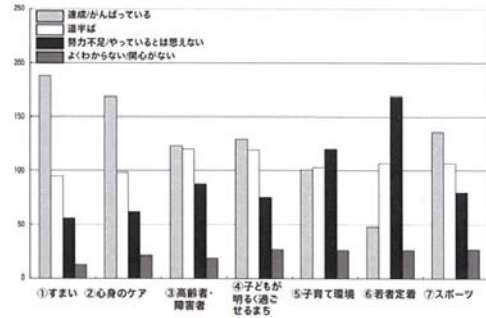
達成している (うまくいっている)    がんばっている    道半ばである    努力が足りない    関心がない・わからない



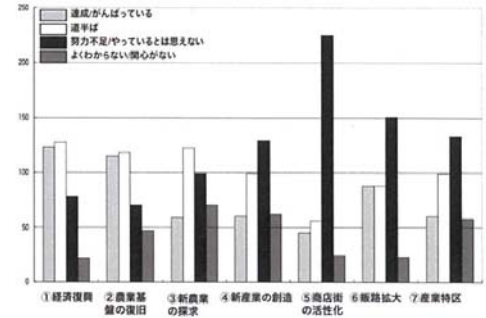
達成している (うまくいっている)    がんばっている    道半ばである    努力が足りない    関心がない・わからない

# 「復興計画」参考： 新潟県中越地震から の小千谷市復興検証： 2008年調査 (発災から4年目)

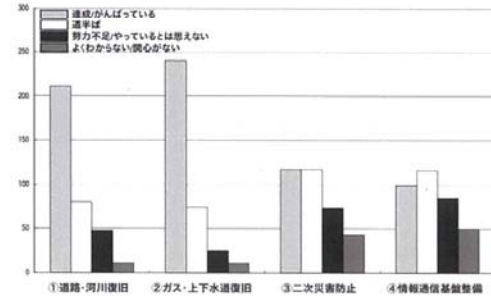
復興目標①生活を再建し、安心して生活できるまちにします



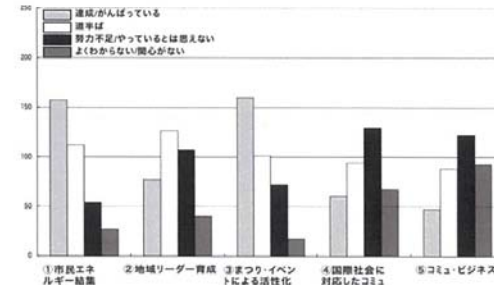
復興目標②豊かな自然の恵みを活かし、経済、産業を活性化します



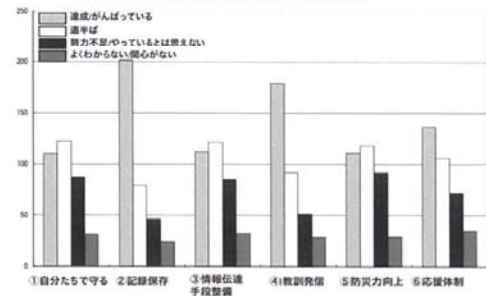
復興目標③災害に強いまちになるよう、社会・都市基盤の整備を行います



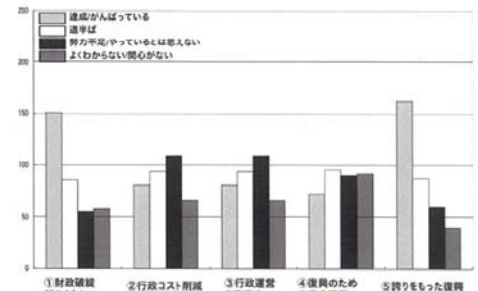
復興目標④震災直後の人の輪、助け合いを財産として活かし、伝統文化や郷土愛にあふれる充実した地域コミュニティを創造します



復興目標⑤あらゆる災害に対応できる、事前・事後・復興までを見据えた、生命と財産を守る防災体制を協働で構築します



復興目標⑥財産破綻をしない復興、市民全員の復興、全国に対する誇りをもった復興をします



## (参考) 阪神・淡路大震災～熊本地震まで継続的に生活復興を調査

### ● これまでの主な調査実績（生活復興）

- 1995年阪神・淡路大震災で長期的な生活復興過程を明らかにした（兵庫県と共同）  
 2004年新潟県中越地震、2007年新潟県中越沖地震で中山間地災害・地方都市災害で実証（新潟県と共同）  
 1995年阪神・淡路大震災：1999年3月「震災後の居住地の変化とくらしの実情に関する調査」  
     2001年1月「生活復興調査」(第1回)  
     2003年1月「生活復興調査」(第2回)  
     2005年1月「生活復興調査」(第3回)  
     2011年5月「阪神・淡路大震災の被災地における16年間をふりかえるための基礎調査」  
 2004年新潟県中越地震：2005年3月「避難と生活再建に関する実態調査」  
     2006年3月「総合的な復興支援のための調査」(第1回)  
     2006年10月「総合的な復興支援のための調査」(第2回)  
     2009年3月「新潟県における地震災害からの総合的な復興支援のための調査」(第3回)  
 2007年新潟県中越沖地震：2009年3月「新潟県における地震災害からの総合的な復興支援のための調査」  
 2011年東日本大震災：2016年3月「震災から5年が経過するなかでの東日本大震災生活復興調査」  
 2011年紀伊半島大水害：2012年1月「紀伊半島大水害からの復旧・復興に関するアンケート調査」  
 2016年熊本地震：2016年11月「熊本地震における余震情報と避難行動等に関するアンケート」

### ● これまでの主な調査実績（復興計画）

- 2004年新潟県中越地震：2008年5月「小千谷市復興検証」  
 2014年10月「小千谷市復興計画の長期検証」

### ● 調査メンバー（所属は現在のもの）



田村 圭子  
新潟大学  
危機管理室  
教授



木村 玲欧  
兵庫県立大学  
環境人間学部  
教授



井ノ口 宗成  
富山大学  
都市デザイン学部  
准教授

### ゲストメンバー（所属は当時のもの）

- 阪神・淡路大震災：岩崎信彦（神戸大）、野田隆（奈良女子大）、矢守克也（京都市大）  
 紀伊半島大水害：大友章司（甲南女子大）  
 東日本大震災：加藤尚之（東京大）  
 熊本地震：平田直（東京大）、大友章司（甲南女子大）

### 各調査における協力行政機関

- 阪神・淡路大震災：  
 神戸市、阪神・淡路大震災記念協会  
 新潟県中越地震：  
 新潟県、長岡市、小千谷市、川口町、  
 消防庁（応急調査）  
 新潟県中越沖地震：  
 新潟県、柏崎市  
 東日本大震災：  
 岩手県・宮城県・福島県・復興庁（協力）、  
 防災科学技術研究所  
 紀伊半島大水害：  
 奈良県  
 熊本地震：  
 文部科学省

### ● 復興の教科書 <https://oss.sus.u-toyama.ac.jp/fukko/>

1995年1月17日に発生した阪神・淡路大震災の復興プロセスについて実施された「兵庫県生活復興調査」がベースとなっています。

「何をすることが復興につながるのか？」「何をもちて復興したといえるのか？」を共有しないまま時間だけが過ぎていく現状があります。そのような状況を踏まえ、本サイトでは自治体職員やNPO団体、ボランティアなどの災害対応従事者が支援活動を行う上で参考になるような被災者視点の知見や行政施策を掲載しました。

復興の教科書

検索



## 2.3.2. ②行政職員ヒアリング

下記の表のようにヒアリングを実施した。

調査対象	発災後、総合庁舎に参集し災害対応にあたった職員 発災後、総合支所に参集し災害対応にあたった職員 災害対応にあたった各課の職員
調査期間	2021年6月、7月

ヒアリング結果は以下の通りである。

### ■業務の実際

#### 生活用水の確保

- 避難所運営では水が無かったが、公民館の前に井戸がある住宅があり延長ホースをつなぎ公民館まで送り大きいゴミ箱に水を貯めてトイレや食器洗いを行った。

#### 電源車の活用

- 公用車電気自動車からの給電による事務所内電源の復旧。

#### 通常業務（BCP）

- 地震対応が最優先の状況であったため、通常業務の省力化・効率化に努めた。
- 通常業務を回すことだけを考えていたので、工夫と言えるものは思いつかない。

#### 個人としての役割

- 行政としての立場と個人ボランティアとしての立場を使い分ける。
- 被害を受けた自宅の対応と職場業務との両立（どちらも支障がないよう健康管理を含めた日々の計画）。

#### 専門的知識

- 習得した建築、設備の知識で各種業務に対応。

#### 心構え

- 住民に不安感を与えないため、できる限り落ち着いて対応するように努めた。
- 人に不安を与えないよう、元気にふるまい続けたこと。
- 落ち着いて着実に行動すること。
- 被災された方々への対応には、普段の窓口業務よりもより丁寧に行った。

#### 効率よく立ち回ること

- 少しでもリフレッシュできるような時間を設け、業務外では業務のことを一切考えないようにした。
- 自分で休息(リフレッシュ)時間を確保した。
- 普段から工夫して効率よく仕事をこなしていくことが重要と感じた。
- 無駄が生まれないように考えたこと。

#### 権限委譲

- 避難所運営において、本部に聞いても「わからない」を連発されたため、すべて自分

で判断するようにした。

- 自分で判断を下せるものは対処し指示を出すこと。

#### ゴミの回収

- 上司とともに自主的にトラックを確保し、避難所に溜まるゴミの回収に当たった。

#### 情報共有

- 避難所運営の際に会館地域の町内会役員との打ち合わせ会議を行い、情報共有を行っていたこと。避難者への声掛け。
- 新潟県・岩手県など応援に来ていただいた自治体からわからない情報を聞き取り、できるだけ担当する業務に必要な情報を集めた。
- 地震後、ブラックアウトになり電話や無線が使用できなくなったため、被害状況の把握が困難であったが、パトロールの班編成を行い、1時間おきに戻って報告することを義務付けた。
- 混乱を生じさせないように報連相を確実に行うこと。
- 分からない事だらけなので、情報は自分から収集するように本部との連携を密にしました。
- 初動期（本部の指示以前）において、避難所独自の食料の在庫管理表や献立表を、大型ホワイトボードに記入し、関係者による共有化を行った。このほか、避難所運営職員で知恵を出し合い、共有できる情報は、共有できるように工夫した。
- 情報が錯綜してしまう状況の中で、担当である避難所の情報共有は正確に行うことに務めた。
- 避難所を毎日出勤前に巡回して情報の共有や本部情報を伝えるなど対応をしてきた。

#### 仕事の分担

- 自分だけでは業務が回らなかったため、グループ内で色々な業務を割り振った。
- 所属課職員の災害対応・通常業務も時期的に多忙となるタイミングであったことから、仕事の分配を行い、特定の職員に負担がかからないように調整したことがよかった。
- 数名でしっかりと役割分担（指示役、作業役、データ確認役など）を行ったうえで対応した。

#### 物資の配送

- 支援物資の調達及び供給を行うにあたり、最初は、エクセルで支援物資在庫状況一覧表や支援物資受付簿、支援物資提供一覧表を作成のうえ在庫管理を行った。
- なお、その後はシステムの活用により円滑な支援物資の調達や供給を行うことができた。

#### 引き継ぎ

- 青葉会館で避難所が交代業務になったため引き継ぎが必要になり、自分の担当のときに避難所で起きたことや対応変更点などの引き継ぎ事項を記録しておくノートを置いたこと。



- 初動期（本部の指示以前）において、避難所独自のシフト体制の構築、シフト用引継ぎノートの整備等を行い、業務の共有化を行った。

#### 避難所マネジメント

- 避難所で寝泊まりして日中仕事をしている人もいたため、避難者が多く集まる夕食時に町の対策本部で発表されたことの概要をお知らせする時間を設けたり、朝は避難者の体調管理や気分転換のため避難所でラジオ体操を実施したこと。
- 東日本大震災の避難所運営マニュアルを理解していたことから、震災後の具体的な行政機関の役割について考え、避難所運営で活用した。
- 避難所で高齢者が動かなくなっていたので、自分で物事を行うように声掛けした。
- 当時の早来中学校教頭先生と頻繁に情報共有をし、授業に支障が出ないようスピーディーでミスがないよう対応した。

#### 二次災害の防止

- 避難所ということで、緊急的対応がほとんどだったので、まずは上司に口頭にて伺い、災害に伴う修繕依頼を早急に実施し2次災害の防止に務めた。

#### 仮設住宅

- トレーラーハウスを農村地区（各戸敷地内）へ仮設住宅として使用。

#### 水道の復旧

- 水道課と連携して、通水可能となった地区から、住戸内の給水設備の確認を行い復旧した。

#### 災害時要配慮者

- 高齢者、要配慮者対応では普段からのデータの蓄積や他機関連携が活動のベースになり、災害時等に備えて印刷しておいたものが役立った。

#### 通信機器

- 連絡調整するため、通信障害が起きていないキャリアを持つ人を探して対応。

#### 業務の進捗管理

- 業務量が膨大であったため、細かく業務の進捗状況を押さえた。

#### 外部支援者の対応

- 多くの支援者が来られたが、後半になると「集まったがやることがない」事態が生じた。役割を持たせ人を回すことを職員間で共有をし工夫した。

#### 外注

- 調査・設計・積算などをコンサルへ発注することにより、業務の負担を減らすことができた。
- 災害復旧工事の本数および工事期間を考慮した発注とした。

#### 電灯の確保

- 発電機を使用し電球があるところは限られていたが自治会長等にお祭り用の電球を公民館内に付けるようお願いして作業を行ってもらった。

## 子どもへの対応

- あそびの広場にて「実施できない」ではなく、「実施するとした場合に必要になること」を考え、極力保護者や子どもの目線に立った対応を実施したこと。

## 体制

- 直接、担当者との打ち合わせを行った。(担当課長や課長補佐を通すと進まないため。)
- 本部には頼れなくても、現場が回るよう、横の連絡を強めた。
- 連絡・指示系統がしっかりしてないこともあり、断水の復旧作業については現地で対応する。

## ■災害対応業務における課題

### 避難所関連業務

- 避難所と本部との連絡調整や避難所配置職員の割り振り、避難所の閉鎖や集約にあたっての各種調整など。
- 避難所では地域の方からの役場が主になり動くことが当然という雰囲気が感じられ、辛かった。自分も家が気になるが避難所から帰宅できなかったため。
- 避難所の運営を総合支所の職員だけで行うのは難しいので、役場全体でローテーションを作るようにしたらよいのでは(職員も減ってきているので早めに体制を整えておいた方がよい)。

### 技術職員の不足

- 技術系職員の不足。

### 役割分担

- り災証明を発行する為の家屋被害調査は、税務知識に関係ない調査方法だったので各課からの協力があっても良かったのではと思う。

### 指示命令系統

- 地震当日は総合庁舎と総合支所との連携があまり良くなかったと思う。震災時はその都度、上司の判断を聞き動いていた。
- 問合せや要望には応じてくれなくても、命令だけは、しっかり上から来る。余計な仕事を増やされるのが、実に不満であった。
- 1日の復旧予定を前日夜(または当日朝)に連絡を取り、方針を決定および許可をもらっていたにもかかわらず作業途中で計画変更が度々あったことは計画性のなさとして反省するとともに当時は不満に思った。
- 避難所では現場で判断しなければならないことも多く、本部との意思の疎通も多忙のため困難だった。

### 業務の抱え込み

- 上司が部下をフォローする余裕がなく、一人で抱え込んでしまうことも多かった。

### 残業が常態化

●災害復旧時期において、残業が常態化し、グループ内に早く帰ろうとする空気感が乏しく大変苦痛だった。たまには早く帰って体調を整えようとする工夫があってもよかった。

●震災発生から2日目くらいまでは、合計の睡眠時間が4時間程度であった(1日目1時間、2日目3時間)。

●町民センターへの町内外者からの問い合わせが一旦事務室経由となることから、朝早くから夜遅くまで2人のみで対応するしかなく事務室に宿泊したり、車中泊して朝5時すぎから夜中12時すぎまで出勤する等の対応が続き体調を崩した(当初役場自体も不通となっており全ての電話が集中して大変だった。)

●災害復旧に向けた査定業務に向け毎日休みもなく遅くまで働き続けた。(毎日定時は23時過ぎ。時には2時を過ぎることもあり。土日祝日はなし。年末年始も2日のみ(1日の人もいました))。

#### 要配慮者等への対応

●避難所運営で、しょうがいのある方の受入の是非で住民間でひと悶着があり(居住スペースや障害の程度が主な要因だったと記憶している)、結果として避難所での受け入れをせずに、近隣町のショートステイを利用することで決着した場面があった。町外の家族が対応できたから受け入れせずとも路頭に迷わなかったが、福祉的配慮が必要な方の対応に疑問が残った(最初から受け入れない一択ではなく、受け入れ方法についての議論ができる場を作りたかった)。

●子どもたちを受け入れる際の移動手段。

●介護施設の利用者の受け入れ方法等。

#### 体制の不備

●被災前から生じていた欠員の補充もないまま被災対応をしなければならなかったので、物理的に時間が不足した状態が最後まで続いた。

●担当部署は平成30年度より大きく人員が削減され、通常業務でも支障がある状況であった。その状況に加えた震災対応であった。

●災害復旧工事の最中に職員が1人退職し、戦力ダウンした。

#### 行政の限界

●行政として動けない部分があった。

#### 職員も被災者

●家を片付けに行ける時間が1週間なかったこと、毎日苦情対応と通常業務で業務量が増え、で自分も被災者なのでメンタルを保つのが難しかった。

●自治体職員としてやらなくては行けないこと(割り切っている)だとわかってはいるながらも、家のことは何もできず、また、余震等もあり家族のことは心配であり、葛藤しながら業務を行っていた。

●自分たちも被災者であることに変わりはないのに、「公務員なんだからいろいろやっ

て当たり前でしょ？」という感覚で町民から話をされるが多かった。

- 自分の家族のことを二の次にしなければならず、悲しかった。
- 自宅が地震数日後より避難指示地域になったため、支援に来てくれた町外家族を帰らせて自身が避難者となったこと。子どもを町外に避難させたが不安定になったので、結局自宅に行けない中で育児と仕事を抱える事になった。避難所業務をしながら避難所に入る気持ちになれず、知人宅を転々と宿泊して大変だった。
- 初期は日中避難所勤務で夜に帰宅していたが、停電で暗闇だったため、割れた食器等の処理が出来ず、車中泊していた。

#### **本来業務ができない**

- 社会教育事業がほぼ中止となってしまう、そのほかの復旧・復興に関する業務をこなす時期が長く、社会教育らしいことができていなかった。その中でもできることを模索するべきだった。
- 担当部署が担当の業務をこなせなかったこと。
- 夜間の避難所を割り当てられたとき、明朝交代後の通常勤務を通りこなさなければならず、体力的にきつかった。

#### **不平不満をぶつけられた**

- 避難所の不平不満が物資輸送担当にぶつけられていると感じた。避難所担当部署の調整がまったくなかったと感じた。

#### **復旧目処**

- 水道復旧の問い合わせは、漏水箇所を特定して修繕しないと復旧できないので、具体的に「いつ」という回答はできない内容のものであったが、住民は常に「いつ」を求めてきたので説明に納得していただけない状態が多かった。

#### **住民対応**

- 高圧的で上から目線でくる住民や自分の担当と関係のない分野まで飛躍する話題、言葉遣いが汚いことがしばしばあり電話に出るのが本当にイヤだった。
- 避難者の不満（特に物資の配給）への対応。
- 避難所勤務と交代してくれ！と多くの方から非難的意見をいただいた。
- 避難所開設期間中に数日間隔をおいて（数回）所内の勤務を担ったが、常駐していたわけではなく、通常のはほとんどは役場勤務をしながらのいわゆる部分的、当番的な役割であったにもかかわらず、周囲（それをわかっているはずの役場職員もいた）からのこれまでの避難所全体の状況を把握しているかのような言動や扱いに憤りと強いストレスや恐怖を感じた。避難所運営に際し、特定の人に依頼されたこと。（終盤になり、各課ローテーションになったのは大変助かった）
- 避難所にいる町民の方々から、被災状況や避難指示等の詳しい説明を求められるも、避難所職員には未だ情報が届いておらず、対応できない状況と、役場全体としてもどうしようもない現実の中での住民対応は、試練というか解決困難でやむを得ないと割り



切りつつ、修羅場的な現場ではあった。

●本部がある総合庁舎からの情報が遅く、窓口対応していてもその場で答えられないこともあり、お客様からの苦情の対応に苦慮した。

●発生当初は避難所への情報伝達がうまくいってなかったため、住民の方への説明などに苦労した。

●また復旧作業中に、住民より心無い言葉を投げかけられることも多々あり、気持ちの維持が大変であった。

#### 応急仮設住宅

●応急仮設住宅の入居者支援で、各企業や個人から様々な物資が、直接応急仮設住宅の運営担当に送られて来たが、対応に苦慮した（優先しなければならない業務がほかにあった。直接訪問してくれた企業もあった。）。

●応急仮設住宅建設戸数の決定について。

●トレーラーハウスの仮設住宅（第3期建設）の追加について、北海道保健福祉部との協議。

#### 衛生管理

●避難所開設時の衛生管理。

#### 災对本部運営

●本部の運営（仕切る人間がいなかった）。

●発災時当初は混乱しており、状況の掌握が難しかった。

●本部側がしっかりと自分の業務として任務遂行しておらず頻繁に混乱が起きていた。

●「本部」の解釈が他課と違っていたこと。

#### 住家被害認定調査

●被災家屋の2次調査では、一部の方々があちこちの家に訪問し、町に対して2次調査を申請するよう言って回っていたこと。申請した者の大半は1次判定で「一部損壊」であったが、実際に2次調査を実施してみると判定が覆ることは殆ど無く、通常業務に支障が出るほどに時間を取られてしまった。

●また、2次調査に訪問した際に、脅迫めいたことを言われ、精神的にも疲弊してしまった。

●いつまで続くかわからない2次調査に苦情もあり疲弊した。

#### 物資配布の調整

●物資配布におけるタイミングや数の調整。

#### 災害時に特有な業務の習得

●通常状況では知り得ない業務が多かったため、混乱した中で新たな業務を習得しなければならなかった。

●応急仮設住宅選考を担当する課が決定されず経過し、健康福祉課福祉グループが担

うこととなった際は、短期間で準備を進めなければならない状況であった。応急仮設住宅、民間借り上げ型仮設住宅、公営住宅一時使用の3種別の住宅情報を集約しながらの対応となったため、調整が非常に困難であった。

- 大きな地震の災害対応経験者が少ない中、初めの対応が後々に響き苦労したことがあった。
- 通常業務と災害業務の打合せ等の調整がつけづらかったこと。
- 引き継いだ復旧業務が適切に進められておらず、本来済んでいるはずの業務が山積みであったこと。

#### 災害時に業務量が増える業務

- 災害を経験した他の自治体職員から人員を専門で5人は確保しなければならないと進言されたが、通常業務と兼任されたため、発災後1年以上に渡り多忙を極めた。
- 公費解体事業（国庫補助採択）についての積算等について。

#### 特定の業務を行える職員が少ない

- 災害査定から復旧工事まで担当できる職員が少ない。
- また、通常の工事であれば技術職の方が行いますが、当時は技術職も自分の業務で手が回らない状況。誰かがやらなくては行けず、一般事務の私が工事監督員として右も左もわからず行いましたが、他課にも技術職や経験したことのある職員がいますが、ほんとうにそれで良いのか？と今でも思っています。
- 災害復旧の経験者が居ないため、災害査定等の申請に係る図書作成に苦慮した。
- PCセキュリティー対策の無害化の作業に多大な時間を要すると共にストレスを感じた。（メール添付データ格納に時間を要した）

#### 全町に戦略的に取り組む体制

- 震災直後は本部も大混乱の状況にあり追分庁舎との連絡調整は困難だったことは十分理解するが、翌日以降、徐々に落ち着きを取り戻してきた時点においても、追分は追分でというような雰囲気があり、全町を見渡せる様な配慮（体制）が必要と感じた。

#### 各課の業務量のバラツキ

- それでも業務量にはバラツキがあったと思う。
- そんな中、毎日定時で帰る職員。普通に考えても不満は募ります。せめて他課にいる技術職を回すなどして欲しかった。そうでないと職員は潰れます。各課によって業務量のバラツキが酷すぎます。
- 仕事する職員と仕事しない職員の二分化。

#### 業務の押し付け合い

- また、他の課に仕事を押し付けて自分たちは早く帰ってしまうとは…理解できません。

#### 関係者との軋轢

- 炊き出し応援のケースで、事前調整した内容とは違う品物や数量、提供方法、応援人

数等を、当日に突然ぶつけてきて、その対応に職員が手こずると不満をぶつけてくる団体関係者には、怒りを覚えた。(善意を押付け、善意を与えられる町職員はそれに応えるのが当然だ的な高圧的な態度)

- 避難所運営の際に一部の方々の自分アピール。
- 一部の方々の言動、行動には閉口。

#### 関係機関との対応

- 様々な団体が押し寄せ、そちらと話をするだけでも時間が取られ消耗した。

#### 災害救助費への理解

- 国からの支援物資は全て国費と思っていたが、後から請求が来たこと。
- 特に防衛施設庁の入浴支援については、当初必要のないものと判断していたが、「是非使用してほしい」とのことだったので了承した。後から請求が来るのであれば、最初から断りを入れていた。余計な経費を支払ったと考えている。

#### 情報共有

- 本部決定事項の伝達が悪かったことや、末端まで情報が本当に全て伝えられているのか分からなかった。
- 決定事項・検討事項の情報共有が不十分。
- 一番状況がわかる部署のはずだが、それでも決定事項や今後の対応が見えてこないことがあった。

#### 通勤が負担となった

- 居住地が早来、勤務地が追分で、勤務地が避難所となり避難所運営になる。
- 災害発生当初は、通勤時間も負担であった。

#### 応援職員

- 応援職員によっては、お願いしたいことを範囲外と対応してもらえず、負担軽減につながらなかった。
- また、自治体により避難所の運営主体や運営方法への考えに相違がありどう関わって良いのか迷ってしまった。
- 北海道からの派遣などもあり、何とかこなした。
- 避難所の水を地下水で行うが数日後には地下水も尽きてしまった。無くなるタイミングで自衛隊が給水活動に来てくれた。

#### 工事事業者の確保

- 公営住宅の給水設備の復旧にあたり、町内の町指定給水業者(1社)に断られたため、対応可能業者を探すのに苦慮した。

#### 報道対応のあり方

- マスコミへの報道規制が甘すぎ。完全に避難者達は「見世物」であった。取材を許している職員の良識を疑う。

## 参集

- 震災日の朝に家にいる人にイラついた。

### 夜間業務が負担であった

- 避難所の交代が2日間なく公民館で寝泊まりする。
- 早来と追分で災害時の勤務時間（シフト）が違い変わった時に支障があった。
- 早来と追分で避難所の運営方法が違い職員が多く配置されている場所はシフトも多く回ってくる。応援の他地域の職員が入ってくれているが人数は変わらなかった。

### 災害対応に係る労務への対応が異なる

- 避難所の夜勤は通常勤務の間に入ってくるが夜勤前、夜勤後の勤務の仕方（休みの取り方）。消防や病院などでは夜勤後には休みはあるが避難所勤務は夜勤後は有給だったり、夜勤前後に通常業務をしてから夜勤する人がいた。

### 業務実施に当たって職員間で温度差が生じた

- 同一グループ内でも処理している業務が違うのでグループ内に温度差が生じたこと。
- 困難が生じたり、不満があっても言えないこと。

### その他

- 毎日困難続きだった印象は残っていますが、具体的なことは忘れてしまいました。
- 初めての事ですから「困難だらけ」が当たり前だと思います。
- 不満は色々あったが、今はいい思い出としておく。
- 思い出せない。
- 記憶がない。
- もう1度同じ規模の災害があった場合は間違いなく無理と感じます（同じ業務だった場合は体調を崩すと思います。辞めることも考えると思います。）。

## ■外部からの支援

### 物資配給

- 避難所への物資配給。
- 発災当初は物資が届かず不安であったが、いろいろな方からの支援もあり、避難している方へ物資を届けることができた。
- 飲料水（特に被災直後の断水時）、食料品（アルファ米やパンなど、調理をせずに食べられるもの）。
- 当時の派遣先である「おいわけ子ども園」が避難所となっていたこともあり、各地から様々な支援物資が届き、物資面（飲料、食料等）で助けられた。
- 支援物資に関して、最初は道や一般の方から大量に送られてくるものの、それらの整理が追いつかず、全国からの派遣職員や大学生などの支援により、円滑な在庫管理が出来るようになり、非常に助かった。
- 物資の受入れ業務には、ボランティアや行政機関の手助けがあり、非常に助かった。

- 想像以上の救援物資や温かい言葉をもらって、心から感謝した。
- 色々な方々（特に安平町出身の方々から）の支援で食料・衛生用品などの物資が届き避難所の方々が喜んでいました。
- 物資の確保。
- 初日以外は食事には困らなかった。

#### トイレの復活

- 町内にある牧場による追分公民館貯水タンクへの給水により水洗トイレが復活したこと。

#### 災害査定

- 技術系職員の派遣により災害査定をなんとか終わることができた。

#### 家屋調査

- 家屋被害調査では、他県からの応援部隊にその大半を担ってもらったことで全棟全戸調査を完了できた。
- 特に住家被害認定調査における対応等では、大学教授をはじめとして多くの方から支援をいただいた。
- 被災家屋の2次調査については担当課だけでは人手不足であったが、他課からの支援は皆無だった。
- 罹災証明にかかる全戸調査の実施。

#### 資機材

- カラーコーンや復旧資材等の物資を各方面から寄附してくださり大変役立ちました。

#### 国

- 国や道の支援・指導により助けられた。

#### 道の応援

- 北海道から令和2年度末まで応援職員を派遣していただき大変助かりました。
- 行政として動けない部分に切り込んで引っ張ってくれた。
- 北海道を通じて派遣職員の依頼をし、全道の市町村職員が応援に来てくれたことは非常に助かりました。
- 震災後北海道から数名の職員を長期で派遣してくれた。
- 北海道より派遣された職員の方には、各課の調整役として大変にお世話になった。
- 北海道からの派遣職員。

#### 他県、他市町村の職員

- 北海道や他市町村の職員派遣には、ほんと助けられました。
- 岩手県や新潟県の震災を経験した職員のプッシュ型支援には、避難所運営に関する仕組みづくりや運用面、何より精神面においても、とても救われました。
- 右も左もわからない中、やるべきことを示してくれた。
- 派遣で来てくれていた職員のおかげで、業務を分担したり、職員の仕事量が軽減した



部分もあった。

- 派遣で来ていただいた道職員、道内市町村職員、対口支援で来ていただいた岩手・新潟の職員には本当に良くして頂いたことに改めて感謝申し上げます。
- 10月19日に福岡県朝倉市職員3名が来庁され、九州北部豪雨の廃棄物処理のノウハウを伝えてくれた。
- 各種申請や電話対応などほかの町の職員が応援に来てくれて負担が軽減され、浄水場の管理も出てきたがボランティアの方の支援により負担が軽減された。
- 他市町村の職員や道職員の方々が数日間滞在して頂く形での支援のおかげで、避難所内での町民対応及びイベント等の対応など非常に有難かった。
- 同じ役場職員という立場の方が居てくれただけでも心強いと感じた。
- 他自治体の応援により避難所対応で煩雑な業務が軽減され非常に助かりました。
- 災害対応のため、通常業務を行う人員が限られたが、支援に来ていただいた方の協力もあり、通常業務の支障が少なかった。
- 災害経験者がいないため、災害復旧査定等の提出書類の作成に苦慮していたが、近隣市町村との連携・情報共有が図れたことにより対応できた。
- 北海道、他市からの職員応援派遣による支援により対応できた。
- 派遣がなければ終えてないと思います。

#### 生活用水

- 最初はトイレの排水用にバケツの水をいくつもストックして対応していたが、消防の方が来て、施設の貯水槽にパイプを繋ぎ、大量の水を入れてくれた。

#### 企業の応援

- 被災地以外の行政及び企業からの応援により踏ん張ることができた。
- 物資が不足した際に、委託先が不足しているもの一式を軽トラに乗せて会社幹部が駆けつけてくれた。

#### 給水

- 給水車の派遣も多く各市町村や開発局などからも支援をいただいた。
- 自衛隊における給水作業。

#### 自衛隊

- 自衛隊の支援により身体的・精神的に楽になった。
- 自衛隊の炊き出し、入浴・給水支援、物資の輸送には本当に助けられた。
- 自衛隊による災害支援活動には、本当に頭の下がる思いだった。
- 自衛隊の物資提供。

#### 水道復旧

- 札幌市などに漏水箇所特定に協力をいただいていた。
- 日本水道協会北海道支部の応急給水及び漏水調査、復旧活動は、プロ集団であり、的確な作業で大変助かった（作業範囲と図面、注意点のみの打合せ）。

●水道担当の職員が少なく、追分地区は当町職員を中心に復旧作業が行えていたが、早来地区については外部からの派遣職員にて復旧作業をしていただかなければ、両地区同時の復旧は不可能であった。

#### 炊き出し

- 炊き出しを行うことで、物的な面だけでなく精神面でも救われた人が多いように思う。
- 避難所での食事の提供など。
- 外部団体がすべて対応（人手・食料）してくれる炊き出しは、ボランティアの手配及び献立的にも非常に有難かった。

#### 避難所運営

- 避難所運営において北海道や一般の方々等、応援にきてくれた方々にはかなり助けられた。
- 避難所に避難する一部の方々が運営の手伝いをしてくれた（特に小学生）。
- 近隣自治体の避難所運営支援。
- 避難所業務全般は、他県や道（または道内他市町村）の職員に相当助けられました。
- 避難所運営の支援等が入り、負担が軽減された。
- 避難所から避難所への引っ越しは、凄い大勢の人達が集まり、実に助けられた。

#### 施設等の被害状況

- 施設等の被害状況調査、復旧事業に対する指導等について各関係機関の協力があった。

#### 情報提供や助言

- 過去に被災された団体からの情報提供やアドバイスが大変参考になった。
- 平日はなかなか避難所に行けなかったのがこちらがたくさん教わった。

#### 応援の課題

- 外部の機関は被災地行政機関が何を困るかわかっていないままに来ることが多く、何を支援してもらおうか調整することが多くあった。結果として業務量が増加する事態に至ったことも少なくは無い。

#### 災害過程

- 災害査定が完了するまでの間、北海道から被災3町に応援職員が割り振られ道内各事業所から2～3名ずつ配置され心強かった。帯広市からも1名公園災害査定準備のため3か月間応援職員を派遣していただいた。平成元年度及び2年度の2か年にわたって北海道から1名の職員を派遣していただき災害復旧工事を担当していただいた。

#### 心の支え

- 北海道や全国の自治体、自衛隊や福祉団体、ボランティアの支援は、「動」だけでなく「心」の大きな支えとなった。

#### 施設復旧

- 災害ボランティアの方々の協力により、施設の復旧（特に郷土資料館や、図書室）がスピーディーとなった。

#### 被災者

- 避難所にいる方の中には、率先してお手伝いを申し出てくれる方もいた。

#### 食事提供

- 外部ボランティアの食事提供により、避難所等の被災者の食事にバリエーションができ、そのこと自体が明るい話題や機会になったこと。

#### 自治会・町内会

- 自治会・町内会役員や民生委員などの情報により町民の安否確認をすることが出来ました。
- 避難所では、我々職員の負担を少しでも減らしてくれるよう動いてくれた。
- 避難所に対する、近隣住民の支援の大きさにただ感謝。特に被災後の数日は食料がたくさん届き地区の住民が安堵しているのが伺えた。地域住民（とりわけ女性）の対応力に助けられました。
- 自治会長や役員さん地域住民の自主的な支援。
- 地域住民のお手伝いに助けられた。途中から町内会で避難所の運営を担っていただいた。

#### 保健師

- 他市町の保健師の支援が得られ助かった。

#### 警察

- 発災時に総合庁舎に刑事が3名いたので、3班体制で早来地区の公営住宅入居者の安否確認（マスターキーで開錠）に同行してもらった。

#### 支援者支援

- 職員も被災者なのだが住民と一緒に支援は受けづらかったので、食事や支援物資の配布など配慮して渡してもらえてありがたかった。自宅に入れず片付けも全くできない中で下着すらなかった（割れたガラスにまみれたため）ので助かった。
- また日赤など医療チームが心身を気にかけて声をかけてくれ、外部機関のため相談しやすく助けられた。
- 職員や消防などの支援者支援体制も、より早期の介入からの視点として必要と思う。

#### 支援者への対応

- 支援に来て下さるのは有難いのですが、来て下さる方の対応に追われることも多々あった。

#### 給油所

- 燃料の調達に委託先と某給油所が全面協力してくれた。それが無かったら間違いなく安平町の復旧活動は停止し、町内・町外問わず非難の的だったろう。全道的に燃料、特に軽油の争奪戦が繰り広げられた中での対応に、もっと彼らに感謝すべきだったと

思う。

#### ボランティア

- ボランティアのメンバーには今も場面によっては助けられている。
- ボランティアによる保育者（資格所有者）の支援、食事（炊き出し）の提供、遊び（音楽等）の提供。
- ボランティアによる子どもたちへの支援（一部）。
- 10日間程経過後に、電話対応でボランティアが1人来てくれたので負担が軽減された。（しかし、その頃は避難所の電話番号の周知もされて、件数は少なくなっていたが…）。
- 公務により自宅の整理が何もできない時に、ボランティアが手伝ってくれて大変助かった。

#### 仮設住宅・トレーラーハウス・公費解体

- 仮設住宅建設戸数決定時に、北海道保健福祉部担当職員および新潟大学田村教授のアドバイス。
- トレーラーハウス使用に向け、一般社団法人日本RV輸入協会および代理店にアドバイス。
- 公費解体実施に向け、一般社団法人日本補償コンサルタント復興支援協会によるアドバイス。

#### その他施設

- 公民館館長の支援。
- 介護事業所による物資や職員の支援。

#### その他業務

- 広報紙のポスティング。
- がれきの撤去。

### ■災害対応に関して感じたこと

#### 人的資源の不足

- 技術系職員の不足。
- 緊急時には何をすることも人手が不足している。

#### 参集

- 地震発生直後、すぐに出勤しなければと思ったが、冷静さを欠き本来向かうはずの居住地区庁舎ではなく通常勤務庁舎へ行ってしまった。
- たまたま家族が怪我等なかったので、直ぐ職場に行けましたが、家や家族に何かあった時には対応が難しいと感じます。
- 今回の地震ではほぼ全員が登庁することが出来たと思っておりますが、上職が登庁出来ないケースにどのように対応するかが課題だと感じております。

## 職員数の確保

●各分野に精通した職員でなければ対応できないことも多々あるため、職員数が今後減ってしまうと特にインフラ関係（土木・水道等）の復旧が大幅に遅延し町民の安全確保がままならなくなる恐れがある。幸いにも体調不良等による長期休業者は出なかったが、万一のことを考えると平時より最低限の職員数を確保していくことは重要と考える。

●とにかく、正職員の人手が足りなかった。

## 業務のバラツキ

●インフラ復旧を行う課では、復旧・復興期（H31年1月～R2年3月）は特に、他課と比べて業務負担割合が多すぎる。定時で帰れる人もいる中で、深夜まで帰れないなど、体を壊しかねない。

●忙しそうに動いている職員が多い中、部署によってはただ事務所に詰めているだけになっていて、自分から仕事を探す必要があった。

●課によって業務量のバラツキがかなりあった。

## 職員の態度

●緊急時にこそ、その人の考え方というか人間性がモロに出ると感じた。

●イライラするもの判るが受け手の立場も考えて発言すべき。

●安否の確認がとれず電話も不通になり不安な思いもあったが、まずは自分の置かれた立場を考え行動をとるようにした。

## 物資の配分

●物資が不足する中で避難所へ避難する方以外への物資の配給について判断に迷うことがあった。※その際は数量を決めて配給した。

## 業務優先

●職員として登庁を優先しなければならない点。

●家族の安全確保と自治体職員職務の天秤。

●家族の安否も心配になる。

## 指揮命令系統

●指揮命令系統は基本的に存在しなかったというのが個人的感覚である。

●避難所における裁量の範囲。

●初動期の指示系統を統一してほしい。色々な人から色々な指示を一気に言われた。

●指示、連絡方法の確立。

●指示系統がなっていない。

●指示系統の上に立つ人は静かに淡々とやるべきかなと。

●船頭は絞った方がよい。

●緊急時は指示系統など、対応もバラバラなので、多少間違っているけど、ある程度は自らの判断も必要だと感じた。



- 組織全体で人員が圧倒的に不足しており、指示体制が脆弱と感じた。
- 本部がきちんと機能しないと周りが混乱する。
- 追分地区の各種調整が本部の仕切りなのかが不明確ではあったが、迅速に対応する必要があったため、その場の状況に応じて対応した印象がある。

#### 復旧状況の把握

- 公共インフラ等の復旧状況が職員間でも把握しづらかった。

#### 電話対応

- 災害直後は電話対応等で忙しかったが、電話の相手により担当者（役職者・防災担当者等）に代わるべきなのか、自分で対応するものなのか迷った。また、仕事は通常業務がメインだったので初動期は仕事がほとんどなかった。

#### 口座登録

- 復旧・復興期は義援金や災害関連の支出が多く、かなり口座登録に時間をとられ繁忙だった。

#### 災害対応に「わがこと」意識を

- 職員全体的に常に他人事のイメージを持っている。

#### 防災訓練

- 日常から備えておくことの大切さ。
- 震災直後における経験を踏まえた中で、当然のことではあるが、定期的かつ、より実践に近い防災訓練を繰り返すことが重要であることを実感した。
- 日頃から避難訓練を行い、避難経路や物品などを備えておくことが必要だと思った。
- 日頃より訓練等しなければならなかったと感じた（委託業者含めて）。

#### 子どもの預け先

- 子どもの預け先に苦慮した。1か月こども園・学童保育も時短になっていたため通常業務に戻れず困った。

#### 夜間の災害

- 夜間の災害だったことから、夜間の初動体制は平時の避難訓練にはない想定外対応となることを感じました。
- 初期は停電により職員の行動が大幅に制限されたように感じます。

#### 職員への連絡

- 各職員への指示経路が明確にならず、情報も十分に伝達されておらず、住民対応する職員は対応に苦慮していた。連絡方法も個人の携帯電話を使用しており、復旧時期に導入したようなiPadでのLINE活用が災害発生当初よりできていることが望ましい。
- 通信網の確保は必須である。**災害発生を想定した職員の配置**
  - 避難所運営に関しても、具体的な指示がないまま、避難所に配置された職員の判断で物事を進めなければならなかった。配置される職員の数も地区によって異なり、通常業

務に戻れるようになるまでの期間も異なっていた。

#### 地区対応

- 追分と早来が分かれていて、良い面と悪い面があること。

#### 避難所対応と防災担当の連携

- 避難所のため、非常電源を設置してくれたが、その燃料補給をお願いしたら、それは避難所対応の方でやってほしいと言われた。しかし、トラックがなく運べない事や人も少ない状況では無理なことだった。他にも避難所夜勤者が庁舎へ連絡し相談するとそちらで対応してくれと断られ困っていた。

#### 職員の特性

- 避難所開設後、各所に、積極的に状況確認を（自主的？）継続的に行っていた職員がいた。心意気は良いが、本部とは異なる私見的で非公式な情報もそこで発信しており、これは現場にとっては非常に迷惑な行為であって、関係する多くの方からも混乱を招いたと批判があった。また、そこで尽力している同僚の職員に対しても非常識な発言もあったようだ。
- 追分公民館避難所をはじめとして、私の従事していた追分地区は、当然手探りながらもリーダーシップをとってくれた先輩職員がいたおかげで初動時からかなり統制がとれていたと感じた。
- 緊急時は結局個人の迅速な判断が必要であると再認識。
- こういう時に人間の本性がでると感じた。

#### 関係者とのあつれき

- 業務とは関係ないが、昔の役場の関係者で高圧的に要求する方が数名いた。

#### 規定により復旧が進まないことがある

- 緊急時にも関わらず、給水設備工事は、町指定給水装置工事事業者でなければ工事できない等の規定があり、復旧が思うように進まなかった。

#### 業務分担

- 震災当時、災害対策本部事務分掌で定められている業務とは異なる業務を行っており、災害時において災害対策本部事務分掌で決められた事務分掌どおりに行えるのか再検討すべきではないかと感じた。
- 財政班の事務分掌の中に「義援金品の受付、管理に関すること」とあるが、災害時において予算の取りまとめや災害に係る交付税算定や起債申請等短時間で報告しなければならないものが数多く発生したことから、現行の事務分掌の災害対応であれば、受付事務等を会計課が行うのか財政担当が行うのか細かい部分についても決めておいたほうが良いと思う。また、震災時は総務課にて義援金等の受付を行っており、業務的にそこで受け持った方がスムーズなのかを含め検討が必要かと思われる。
- 避難所開設までの具体的な行動がわからない。また、避難所運営に関しても自治体や本部との連携が難しい。

- 担当の業務理解（補助申請含む）や進め方で業務進捗や補助対象事業が大きく異なってくるため、業務遂行のガイドライン等によって統一を図るなどが必要と思う。
- 皆、余裕がない中であったが、一度対応してしまうとその後もなし崩し的にその人（部署）の担当となってしまうことがあった。
- 災害発生時の対応マニュアルはあったものの、水道復旧に下水道Gの人員も対応することで設定されていたため、実際には人員不足になったうえ、そのマニュアル通りに対応することはできていなかった。
- 今何をしなければならないかがわかりづらかった。

#### 確認用の地図や図面が必要

- 災害時の道路パトロールや施設の確認など必ず出てくるので、その確認用の地図や図面があれば良い。地震の度にコピーを取っている気がする。

#### 応援要請

- 災害による施設の確認作業は、各種協定等を活用し遠慮せず職員等の応援要請をする。

### ■災害対応に係る提案・改善案

#### 緊急初動体制

- 休日及び夜間の緊急時初動体制（班編成や居住地に応じた職員配置）の具体的プランが必要ではないかと思います。
- また、初期段階では電気がない行動計画を想定したほうが良いと感じました。
- 招集およびその後の業務について、どの地区に従事するのかを明確にすべき。勤務地や居住地によらず、本来業務と関連性のある災害業務の種別によって、従事する地区を職員ごとに設定していくような細やかなルールを決めておく必要があると考える。
- 職員安否確認後、自己勤務先に移動して班として統制をとる。
- 今後災害の際には託児出来るように改善になったと聞いたので安心している。
- 災害発生を想定した職員の配置。

#### 資源配分

- 有事の際、それぞれの課やグループはどんな業務があるかだけでなく、どれくらいの人数が必要なのかを把握し、通常業務の枠を超えて過不足ないよう割り当てる。
- 柔軟な人事配置をお願いしたい。緊急時だからこそ緊急的な配置をしていただきたかった。

#### 役割の明確化

- 総合支所の避難所運営などの各種調整の中心的な役割は支所長の職にある者と明確に位置づけるべき。
- 電話対応において、この場合は担当者、この場合は自分で対応するなどざっくりでいいので目安があればいいと思った。

●招集およびその後の業務について、どの地区に従事するのかを明確にすべき。勤務地や居住地によらず、本来業務と関連性のある災害業務の種別によって、従事する地区を職員ごとに設定していくような細やかなルールを決めておく必要があると考える。

●平時からのしっかりとした体制の構築と共有。

●災害時において、各部署でどのような事務が生じるか、またその部署の人員で対応できるのかを踏まえ事務分掌の見直しをしたほうが良いのではと思う。

#### 職員の特性

●対策本部と避難所との連絡や情報提供体制は、災害時においては特に正確なものではない。一生懸命さだけでの行動は厳に慎まなければならないし、あつてはならない。差はあつても職員それぞれが頑張つて被災業務にあたっているのだから、自己中心的で理不尽な発言や行動も許されるものではない。

●感情のコントロールを身につける（日ごろから意識する）。

#### 権限の委譲

●避難所の夜勤者だけでは判断できない事由が発生して庁舎に問合せしても断られ丸投げされてしまったケースがあつたので、もっとこちらの状況も理解して協力してほしい。避難所の増員も今後の課題だと考える。また、避難所に派遣された職員も結局、所管施設担当者に丸投げするだけで、自分から何とかする考えがない職員もいて困つた。ある程度判断ができる中堅の職員も付ける等の配慮が必要。

#### 平時の業務のそなえ

●平時より最低限の職員数の確保と、地震直後から復興期までの活動・業務内容を伝承していくことが大事。

●日頃からの有事の際への心持次第。

●日ごろから、自分で判断して出来ることを認識する。

●職員定員の増。

●職員の適正配置とは何なのか、このような災害時でのことも見据えて、今一度考え直すべきだと思う。

●マニュアル作成にあつては今回の対応状況をもとに修正するとともに、人事異動があつた際にも精査して行くことが必要と感じた。

●避難所開設までの具体的なマニュアルが欲しい。また、避難所運営に関しては平時に自治体とのすり合わせを行つておくことが必要かと感じた。

●実際に緊急時が発生した際のワークフローなどを共有すべき（震災から時間が経過し、意識の薄れが見られると感じる）。

#### 町内の連携体制

●通常業務以外は、課をまたいでの協力が必要。特別人員配置を考えるべきだと思う。

●担当部署のみで人員不足となる場合に備えて、他部署との連携（応急給水の対応は依頼する、など）事前協議を重ねておくことが重要だと感じた。

### 平時から指揮命令系統を意識する

- 日頃の業務から、指揮命令を意識した職務の遂行がなければ、いざという時に全く發揮されない点に着目した取り組みが必要と考えられる。
- 初動期は全員が混乱しているので、管理職内で協議して各担当に指示してほしい。
- 指示、連絡方法の確立。

### 権限の集中

- 特定の管理職に重責が集中したことも要因かと。
- 昔の係長など一般職をまとめる一般職が今はいないことが一番の問題。
- 「何でもGLへ」という悪しき風潮が全庁的に今でも漂っている。これら改善すべき。

### 業務の進捗管理

- 各部署ワンペーパーくらいで復旧作業の進捗状況を共有出来たら良かった。

### 在宅避難者への対応

- 避難できない高齢者への物資配布に対し、避難所まで取りに来れない方への配布業務（民生委員や地域の方で自宅訪問の際に渡せる物資の整理）。

### 訓練と研修

- 定期的かつ、より実践に近い防災訓練の実施。
- 個々のスキルアップと共通認識の向上。
- 年に1回は各部署での訓練を実施した方が良いと思う。
- 災害はいつやってくるか分からないため、定期的な避難訓練等を行ったほうがよいと思う。
- 職員個々の能力（自己研鑽や配慮する気遣い）。

### 空間配置

- 指示の混乱は本部の混乱が要因と考える。この要因は報道機関への対応が多かったこともあったと思われるため、本部を配置する場所を保健センターに置くなど、物理的に庁舎と分けることも検討すべきと考える。

### 機材の確保

- 避難所用のPCや印刷機も必要と考える。

### 通信手段の確保

- 携帯電話各社と協定を結び、緊急用の携帯電話を借りられるようにすべき。

### タイムラインの作成

- 住所地による避難所の配置表、災害発生から24時間程度のタイムスケジュール的なものの作成。

### 復旧

- お役所仕事をやっているようでは、スピーディーな復旧は望めないなので、給水工事に関しても緊急的な対応措置をとるべきと考える。

### その他



●後から「ああすれば良かった、こうすれば良かった」と思うことはあるが、その時々で精一杯の対応をしたものと考えている。振り返ってみて、あれ以上の対応が出来るとは到底思えません。

●うちの課はできない発言をすべきではない。

## ■災害対応を経験して考えるようになった点

### 役場職員であることがいやになった

●役場職員でない方が良かった。家族に心配を掛けたことや住居の整理などに対して、集中できない状況で住民からの苦情対応などに嫌気がさした。

### 災害のことを意識するようになった

●震災時の対応について考える機会が増えた。

●災害を想定した平時からの心構え。

●震災前は、寝る前に携帯の電源をオフにしていたが、震災後は24時間電源を切らずにいる。

●有事の際に迅速に的確な判断・指示ができるよう日々の自己研鑽に一層励むようになった。

●震度5と震度6の1度の違いはとても大きく、施設への影響は必ずある。

### 冬の災害を意識するようになった

●冬に災害が起こった場合には、家の中でストーブが使えなくなってしまうことが考えられるため、暖をとる手段や車のガソリンの補給は常に必要だと思った。また非常食も用意する必要があると思った。

### 何が必要なのかを考えることが必要である

●声を聞くのを待つだけでなく、なにが必要なのかを考えることの大切さを強く感じた。

### ものを捨てる日のことを意識するようになった

●物を購入するということは、いずれそれを捨てる時がくるということを意識するようになった（不要になったり壊れたりして捨てる時のことを考えてから物を購入するようになった。）。

### 災害時に業務優先するための家族の安全確保を考えるようになった

●職員として災害対応業務が優先されるが、自分の家族の安全確保（共働きの家庭等）について、事前準備（子供を預かってくれる施設確保等）が必要と感じた。

●家族の安全のために安全性の高い丈夫な自宅を構えようと考えた。

●仕事と家庭のバランスについて、当時を思い起こすと正解は今もわからないが、初動期は子どもをおぶいながらも勤務したが、その後の期間はもう少し家庭に比重をかけたさせていただいてもよかったかもしれない。

### 災害対応においては、長期戦を見越して無理をしない

●災害が発生すると復旧・復興まで長期戦になる。無理して業務をこなすと体や心を壊してしまう。

●長期戦を見越して無理せず業務をした方が、結果的に業務の進捗は早い。今回はけっこう無理をしてしまった。

#### **全体を見通すことの重要性を知った**

●通常であれば無理だと思ふような事態や業務量でも、こなせると感じた。細かいことにこだわることも大切だが、全体を見渡してどのようにすべきかを都度実施し、方向修正をしていくことの大切さを感じた。

#### **自助・共助の重要性を知った**

●自助・共助の重要性を実感しました。

●考え方が変わったという事ではありませんが、地域の住民が常に地域のことを考え、行動していることをあらためて強く感じることができました。特に安否確認作業では地域の力を強力に感じた。

●日頃から最低限の備えはする等、自分で出来ることは自分ですとの意識を持ってもらえるような活動も必要と感じた。

#### **災害対応は個人の資質によるところが大きい**

●協働、連携といいながらも、その課に従事している年数や個々の知識量、職員としての質によって、業務量は大きく偏る。個人の質に依存した業務であるため、周囲は助けないし、助け方もわからない。業務量が多い職員を助けられるよう、業務を配分できればいいが、その指示も曖昧である。

#### **マスコミとの折り合いをつけることは難しい**

●もともと、少々は思っていたが、マスコミと行政の合意点はなかなか見つけられない。

#### **指示を待たないで行動することの重要性を知った**

●指示を受けないと自分で行動できる職員が少ない。

●災害時は、必ず錯綜状態に陥る前提で、指示を待っていたり、人をあてにしても進まないで自ら判断することも必要。

#### **防災担当は忍耐が必要である**

●時間経過と共に皆が苛立ってくる中、防災担当は忍耐が必要だと思っています。

(怒り返しても進まない、困っているのは町民、町民の鋒先は防災担当に来るので…)

#### **平時より備蓄の重要性を知った**

●日頃からの食料の備蓄や防災グッズの準備、車の燃料補給、トイレ用の水の確保等が重要と感じた。

●日頃から災害用品の確認を心がける。

●日頃から物資の備蓄に配慮するようになった。

#### **相手の立場を尊重することの大事さを知った**

●改めて感じたことであるが、人間一人の力は微力であり、たくさんの協力があって困難が克服できる。自分だけが一生懸命頑張っているわけではい。関わる全員に慰労の気持ちを持たせてはならない。そうすれば相手の気持ちを見殺した暴言も出ないはず。人は苦しい時に本来の性格が表れる。あの時の自分はどうか思い出してみると気づくと思う。

#### **災害はこれまで他人事であった**

●このような災害はテレビで見たことしかなく、自分にはどこか関係ないと思っていたと思う。そのため、災害にあった際の対処方法等をそこまで把握できていなかった。今後もこのような災害が起こりうる想定をし最低限の準備をしなければいけないと思った。

#### **利他的に人生を考えるようになった**

●いつ死ぬか分からないので、やりたいこと（好きなこと）は全力で。いつ死んでも良いように。

#### **人間模様を知る機会となった**

●避難所運営に係る人間模様の濃密さ（運営主体をめぐる町内会役員との調整、給食ボランティアのシフトに係る人間関係の調整など）を体感、経験できたことで、人間的に一回り大きくなったような気がします。

●色々な苦情や要望を聞かされたり、内部・外部から罵られた結果、人を信用しなくなったり疑うようになったことから、少し性格が慎重になったような気がする。

●人間の本性的な所が見え隠れした。

#### **行政の機能を再認識した**

●全体の奉仕者であることを再認識した。

#### **アナログ資料の重要性を認識した**

●水道施設台帳は、停電時でも対応できるようにデータと紙ベースの整備が必要であることを再認識した。

#### **つながりは財産であることを知った**

●地域に対する知識、つながりはあって損はない、むしろ大きな財産。

●震災という緊急事態があったからこそできた人の繋がりが多くあり、その人の繋がりを切ってはいけないと感じた。

#### **避難のしやすさを意識するようになった**

●必要以上に物を持たないこと、すぐに避難できるように物品を用意するなど、身軽に行動できるよう常に考えるようになった。何かあった時の準備の大切さ。

#### **支援のありがたさを実感した**

●想像したより遥かに多くの物資を日本全国から頂いたこと、本当に有難く思っています。まだまだ日本も捨てたものではないと感じています。

#### **地震の恐ろしさを知った**

●未だに少しの揺れでも敏感になっており、今後このような災害は二度と経験したくありません。

#### **恩返し、支援を考えるようになった**

●頂いたご支援に対し少しでも恩返しができるよう、災害が起きた場合はすぐさま駆け付ける必要があると思っております。

#### **災害においては、現場が第一である**

●現場が第一です。緊急時こそお役所的な考えを変えては。通水しても住戸から水がなくて困るのは住民です。

#### **情報共有の重要性を再認識した**

●ハウレンソウの重要性と日頃からの実施が以前より身に付いたと考える。

#### **現在の人員では心許ない**

●次に同規模の災害が発生した場合は、現人員では対応できる自信がない。

#### **専門的な知識を身につけようとするようになった**

●この震災を経験した後、専門的な知識を学ぶとともに、周囲からの「なぜ」に対して回答できるように自分の行動に意図・意識を持つように心がけるようになった。

●現在担当している業務だけでは災害復旧時に住民からの問合せ対応に戸惑うこともあったので、様々な部署の知識や経験を積むことも大切だと考えるようになった。

#### **本当に支援が必要な人に支援を届けることが重要である**

●災害時に支援が必要な人と必要のない人との選別が難しい。遠浅では若い住民が多く自立しているにも関わらず。

●避難所に食事を求めに来たり、その対応で避難所にすら出向けない本当の困窮者の対応が出来なかった。

#### **優先順位を考えるようになった**

●優先順位の変化（非常時の意思決定）。

●ものの価値についての変化（命優先）。

#### **その他**

●当時は動揺を抱えながら業務にあたっていましたが、月日の経過とともに平常心理に戻ってきており、特に変わった点はありません。

●誰も助けてはくれない。

●震災時の対応で不十分な対応をしてしまった部分は今後災害が起きてしまったときには活かしていきたい。

### **■災害対応業務の改善点**

#### **情報共有を徹底する**

●災害対策本部で集約した情報が現場対応中の職員や避難所まで情報が伝わってこないため、住民から質問を受けても答えられない事案が多々あった。本部側で集めた情報

はできる限り全職員に拡散してほしい。

- 色々な決定事項をきちんと職員に知らせてほしい。
- 担当の知らないところで色々なことが決まっていたり、逆に誰が指示したのかわからないまま業務を進めたりすることがあった（特に初動期）。
- 総合庁舎と総合支所での連携および職員間での情報共有。
- 適正な人員配置。業務量の分担。誰が何をしているかを一目で把握できる情報共有のシステムなど。

#### **参集先を整理する**

- 基本、震災時まずは住んでいる地区の庁舎に集合しているが、地区ごとのバランスが取れているのか事前に確認しておき、取れていなければ決めごととして配置を決めておくのも必要ではないか。

#### **通信手段を確保する**

- 携帯電話が不通となった場合の情報伝達方法の確保。
- 情報の伝達について、現状防災無線やあびらチャンネルがあると思うが、なかなか伝わりにくいという課題があると思います。これはスマートフォンが普及する以前の旧来型の情報伝達手段と考えておりますが、現在はほぼ全ての方が、スマートフォンや携帯電話を所持している時代ですので、それに対応した手段を構築することが急務だと考えております。

#### **職員の対応環境の整備**

- 早来、追分で職員の環境、待遇等に違いがあったと後に知り、情報共有がされていなかったように思う。

#### **課題を共有する**

- 地震直後から復興期までの活動・業務内容を伝承し得られた反省点を共有していくこと。

#### **災害対応業務を整理する**

- 災害時の時期に合わせて何をすべきかリストがあると異動があったとしてもわかりやすいし、動くことができる。
- 福祉担当は、災害当初より避難所の運営、高齢者及び障害者等の生活支援、弔慰金等の業務があり、その他の業務（応急仮設住宅入居支援・入居後の支援、被災者生活再建支援金、義援金、住替え支援業務）については、整理する必要がある。
- 発災直後に何をしていたかわからなく役場でとどまっている職員が多かったと思うので、役割分担か指揮命令が明確になっているとよいと思う。

#### **人員配置を工夫する**

- 災害発生当初は現場（避難所）での圧倒的な人手不足を感じた。また、災害発生からしばらく経った後は、逆に現場（避難所）での人手過剰を感じた。
- 特別人員配置を考えるべきだと思う。



- 今回の地震で災害対応業務の業務量が把握出来たと思うので、各業務への適切な人員配置が必要と感じた（同じ災害対応業務でもすごく忙しいところとそうでないところに差があると感じたため）。
- 業務量に応じた適正な人員配置。
- 仕方がない部分もあるが、職員間の負担の差が顕著なので、役割分担・人員配置について考える必要があると感じる。
- 地域防災計画に定められている配備態勢がほとんど機能していない印象。
- 有事の際、それぞれの課やグループはどんな業務があるかだけでなく、どれくらいの人数が必要なかを把握し、通常業務の枠を超えて過不足ないよう割り当てる。
- 前述の通常業務を日頃からどのグループ員の業務も処理できる体制となっていることが前提であるが、支援室を兼務発令ではなく、専属で発令すべきと考える。

#### 防災訓練・研修が必要である

- 定期的に具体的な災害対応研修・訓練の実施が必要かと思います。役場職員だけではなく地元を含めたものにすることが重要かと思います。
- 今のままでは災害時にマニュアルに沿った行動は出来ないと思われます。各部署における研修・訓練が必要ではないか。
- 今回を通してかなり進んだが、職員の入れ替わりや新人も入った中であるため、現在のメンバーでの定期的な防災訓練が必要と思う。
- 対応の内容は、被害状況や災害の種類によって変わってくると思いますので、始めの安否確認の方法や集合場所の確認を定期的に行うといいのではないかと思います。

#### 指示命令系統を整備する

- 指示系統の一本化。（追分と早来が全く別の動きをしていた）。
- 指揮命令系統の確立。
- 初動体制や情報共有の方法など、スタンドプレーの集まりになってしまい、総括していた人がおらず問題が多かったため、全て明るみに出して情報共有し、対応を考えるべき。
- 各担当者へ所属課長以外の各課長から指示される場面もみられた。これは混乱しか生じないため、各担当者への指示は所属課長から以外に行わないようにする必要がある。
- 大課制にしたことにより、課長からの指示と参事からの指示が混在するので、災害時のみの体制を整備してほしい。また、課をまたいで災害業務を進める体制づくりも必要だと思う。

#### 平時の対応を見直す

- 災害発生時に特定の職員に業務量が偏るのは現状の安平町役場の職員全体の質からやむを得ないものと思われる。そのため、個人の通常業務をいかにグループとして処理できる状況にあるかどうか、日々の業務体制の見直しが必要であると思われる。

## 避難所の運営体制を整備する

●避難所の運営について、安平や追分の公民館では自治会で運営していたが、早来の町民センターでは町職員や道職員が運営していた。通常業務も抱える職員にとっては大きな負担であったため、町民センターも追分や安平のように、自治会での運営になって欲しいです。

●避難所対応職員の割り当ては、居住地側でお願いしたい（面識のない住民が多い。避難所への移動だけでも負担感が大きく感じた。）。

## 休日の過ごし方について共通認識が必要である

●地震以外の予期できる災害について（例、暴風雨（雪））の際に例えば休日に予想される場合は、自宅で待機しなければならないのか、出かけてもいいのか判断がつかないので、あらかじめ役場としての判断を仰ぎたい（現状は担当レベルでの自主判断となっている。）。

## 災害関連事業

●災害関連事業について、北海道から担当職員を派遣してもらい音頭をとってもらうようにすると無駄なく対応できると思われる。

## 災害時要配慮者の情報共有が必要である

●避難所運営において病気等で配慮が必要な方（認知症や酸素吸入が必要な方等）の情報共有ができればいいと思う。

●災害時に備えた高齢者・障がい者等への支援体制の充実・強化。

## 災害対応業務における役割分担を明確化する

●普段担当している役場職員となかなか会えず、どんな対応をすればよいか困った。

●職員に対する防災教育、個々や課での役割分担の意識づけ。

●復興まちづくり計画における取組みとして掲載されている災害対応業務のマニュアル化について、平時より災害対策本部組織における各班の業務分担を防災訓練等を通じて確認し、必要となるマニュアルを作成しておくことで、職員に人事異動があっても最低限の対応が可能になると思います。

●どうしても特定の係・人物に対して業務が集中するため、一人に対する業務が多いと感じます。難しい課題ではありますが、少しでも負担が軽くなるような工夫が必要だと思います。

●発災直後はやむを得ないとしても、役割は明確にすべきと思う。

## 対応方針を明確化する

●臨機応変という対応を求められる場面が多かったのですが、行動指針や災害対策方針が土台にあるうえでの臨機対応ではなく、何をどう判断するのか指示系統やその段階での災害対策方針が曖昧な中で臨機応変という言葉だけが独り歩きして「臨機応変＝個人の判断に任せる」という図式になっており、災害対応に個人差が大きく出ていたように思うので、今回の経験を基にこういう段階ではこういう方針でというものを

作らなければならないかと感じます。

#### **避難所を平時より整備する**

●今後、町民センターを防災センターとして改修されると思うが、外線電話が事務室経由となる状況を改善できるようにするか、または、電話対応者の補充を考えてくれないと、災害発生時は電話対応で寝る暇もない状況である。また、暖房温度の調整も素人が簡単に操作できるようにしないと、夜勤者で操作できない場合がある。トイレも災害発生時は水道が止まっていたり、詰まって使用できなくて苦慮したので、簡易トイレの増設も必要。

#### **災害対応における業務のバラツキを是正する戦略が必要である**

●大規模震災等の場合は、各課の業務量のバラツキをなんとかしていただきたい。

#### **避難所運営を管理する責任者の明確化が必要である**

●地域性やボランティアのマンパワーの避難所運営を取り巻く背景の違いにより、千差万別なことは当然のことと承知しているが、大前提として、避難所運営に対する指揮系統及び管理主体等の運営の在り方をマネジメントする責任者は、どの課が担っているのか、役割分担を明確しておく必要があると感じています。

#### **災害時に非常用電源を確保する**

●災害時に非常用電源を確保する必要がある。

#### **災害対応時にも定期的な休みがとれるようにする**

●何連勤したか忘れたが、被災した住宅（避難指示区域内）の跡片付けもろくにできなかった。災害業務であっても自身も被災者であることは無視されているようで辛かった。誰かがやらなくてはならないのは解るが、家族の為にも定期的な休みをとれるようにしてほしい。

●対応を各課で任せるではなく、連勤は何日迄、といった明確なルールが必要。

#### **災害対応業務の統一が必要である**

●災害復旧を担当まかせにすると、担当の業務理解（補助申請含む）や進め方で業務進捗や補助対象事業が大きく異なってくるため、業務遂行のガイドライン等によって統一を図るなどが必要と思う。

#### **協定の実働性を確認する**

●各種協定についての現実的に対応可能であるかの確認等の見直し。

#### **よくがんばった**

●改善は確かにあると思うが、当時は未体験のなか、みんなが必死だった。みなさんの合理的な改善意見を尊重したい。

●初めての大地震に対する対応として、経験が全くない中、各課よくやったと思う。

●改善はない。

#### **災害査定のあり方を見直してほしい**

●もう少し、国や北海道の担当者が現地確認をしてほしい。災害査定のあり方を見直し

てほしい。

#### 関係者対応窓口を設ける

- マスコミや視察等要人、議員対応は専用窓口で一本化。

### ■訓練

#### 初動対応

- 初動対応の在り方に係る研修（実際に避難所開設時に対応した際は何の情報もないままに対応）。
- 災害時の初動等確認の意味で研修・訓練を継続していくことが望ましいと思います。
- 役場が被災した場合の対応訓練。
- 災害発生時を仮定したワークフローなどの確認、共有。

#### 避難所の開設

- 避難所の早期開設手順。
- コロナ禍における避難所運営方法。

#### 給水所の開設

- 給水所開設手順。

#### 電源の供給

- 停電時の電源供給の訓練（発電機の定期試験含む）。

#### 住民対応

- 理不尽な要望をする町民に対する対応の仕方。

#### 住民との協働。

- 自治会・町内会との連携。

#### 地域防災計画の役割

- 地域防災計画における各課の対応内容について、各課で研修を実施すべきと考える。管理職だけが対応をわかっている、実際に住民対応する職員にまで地域防災計画における役割が浸透している可能性は低い。
- 全職員役割明確とした訓練（土日のいずれかでもよいと思う）。
- 地域防災計画の配備態勢に沿って、定期的実施することが望ましいと思う。

#### 町内を見渡して戦略的な方針を考える

- 外勤が少ない職員は町内の農村部がわからない人が多かったため、町全体を知ることが必要と思った。

#### フェーズごとの対応

- マニュアル・反省点等の確実な引継。形骸化させず新採用職員・中堅・管理職などステージ毎に必要な作業を身につける。

#### 災害対応ノウハウの発信

- 培ったものを当町以外にも発信できれば良いかと思っています。

## 震災対応をふりかえる

- 月日が経過して薄れてきているため、新人職員も含めて震災時の動きなどを振り返ることを研修の一つとして実施しても良いと思う。
- 地震直後から復興期までの活動・業務内容を伝承し、得られた反省点を共有していくこと。
- もう一度同程度の地震が来て電気が止まり断水になり、避難所の開設も必要になったと想定し職員の割り振りを行い実際に全体の動きを確認しながら訓練を行った方が良いと思っています。

## 指示命令系統

- 上司の指揮系統の確認。
- 早来と追分の情報共有の方法。

## 救急・救助活動

- 防災訓練も必要ですが救急・救助活動の研修（応急処置的）。

## 基礎的な訓練

- 誰がどの部署に在籍していても何をすべきか、どう対応するのかを明確にすること。実際に体験させること。
- 定期的かつ、より実践に近い防災訓練の実施が必要と考えます。
- 震災時のことを、新入職員研修などを通して、しっかりと伝えていく必要があると感じています。
- 全職員が、最低限の「防災体制とは?」、「避難所運営の基礎知識」を習得して欲しい（災害時に自分の意見と合わないと喧嘩になるので、ある程度の統一知識が必要）。
- 訓練では危機感が無い。災害後もさほど変化はないと感じる。
- 人事異動により部署が変更となることから、災害時に各部署がどの業務を担うのか確認し、常に頭に入れておく必要がある。
- マニュアルに沿った、各部署ごとの研修・訓練。
- 何年かに一度は、役場全体での防災訓練をして、初動活動の確認等をしていった方が良いと思います（地震での経験を風化させないためにも）。
- 職員全員に対し、定期的な研修や訓練の実施。
- 役場職員の訓練も十分な参加者の元に行わず、自治会・町内会に自主防災組織の組成を依頼したりするのは正直どうでしょうねと思う。
- 今回の災害での問題点を解消するための研修、訓練が必要だと思います。
- 年1回は訓練が必要と感じた。

## 災害時に必要なシステム

- 各種システムの普段使い（防災無線・MCA・HP更新等各種）

## 若い世代への訓練

- 災害はいつ起こるかわからない。職員全員がそうであるべきだが、特にこれからの若



年層には機会あるごとに参加を促したい。それに対する周囲からの協力や支援も必要。

#### 未経験者への訓練

- 災害を経験していない職員に対して、当時の状況などの理解度を深めた上で研修や訓練を行っていく。

#### 記録・ログ

- 時系列の出来事や被災者からの相談等、対応を簡潔に記録しておく。(あたりまえかもしれませんが、自分が出来ていないため。)

#### 受援

- 応援を受け入れるための準備ができているか確認することが大切であると考えます。

#### 休日

- 本気でやるなら、休日等に災害発生した想定で安否確認や施設見回り、町民からの要請対応などある程度の模擬訓練を行うのも一つ。
- 極端な例を出せば、休日・時間外など職員が揃わない状況において、登庁した人間だけで対応するというようなより災害時に近い形での訓練が必要だと考えてます。

#### 公共施設

- 町の主要施設や場所を知っているのと知らないのでは災害時に大きな差となるので、(たしか) 合併時にあった公共施設ツアー(実際にやるなら避難所や避難場所を中心に)など、新たな職員や外勤がない部署の方とかには必要なと思いました(訓練とはかけ離れますが)。

#### ブラインド型シナリオ

- シナリオに沿った訓練ではなく、事前に告知も一切しないで、抜き打ちでの訓練が必要だと感じております。
- 北海道胆振東部地震後に役場に入った職員に対する研修があればいいと思う(災害対応など)。

#### 管理職

- 研修・訓練は小規模で、かつ若い職員を中心に行っているが、本当に必要なのは現場指揮を執る管理職だと思う。信頼がない管理職が若手職員たちの指揮を執れる訳がないし、そんな管理職が間違いの指摘を簡単に受入れないだろう。
- 防災研修・訓練が全職員に必要とは感じない。今回の震災を通して、人間やるときはやるし、動くときは動くというのがわかった。防災研修・訓練といったタスクを職員にさせ業務+アルファのタスクを増やすのではなく、通常業務により専念させグループ制をより機能させ、必要な時に各グループから人員を引っ張ってこれる体制を作る必要がある。引っ張ってきた人員を適切に指示する管理者の防災研修・訓練は行うべきと考える。

#### 道具の使い方

- 道具の使い方など実技の研修。

## 要配慮者

- しょうがい者・高齢者・支援が必要な方々の予想される行動や支援方法について。

## 訓練参加の意義

- 今年度の防災訓練に参加したところ、想像以上に勉強になった。負担はあるものの短時間であるので、多くの職員が参加しても良いと思った（発災当初の動きに関するグループワーク）。

## その他

- 一度経験したことが貴重な財産になったので、現状で特になし。
- ある程度必要だと思うが、全ての災害を想定することは不可能だと思うので難しいです。

### 2.3.3. ③関連組織ヒアリング

下記の表のようにヒアリングを実施した。

調査対象	花園・若草町内会、J Aとまこまい広域（追分支所、早来支所）、安平建設協会、安平町商工会、安平町社会福祉協議会、安平第一自治会、胆振東部消防組合消防署安平支署
調査手法	道総研担当者が団体を訪問し、半構造化インタビューを実施
調査期間	2022年1月11、12日 2月15日

#### 2.3.3.1 町内会・自治会に対するヒアリング

##### 災害前：防災倉庫をそなえ、対応機材の取り扱い等、訓練を実施していた

地震の3、4年前から、防災倉庫があり、グッズを備えさせていただいた。それで、年1回備蓄していた機器の扱いの確認を含め、防災訓練していた。防災訓練においては、同時に焼肉イベント開いて人を集めるようにしていた。

天気が悪ければ、女性から見た防災ということで、家庭の中で何が役に立つかを検討したり、子供会と合同で、炊き出し、密封型食料保存袋を使ってコメを湯煎で食べる等を実施してきた。

役員の中に消防・役場職員はいるが、消防・役場と合同で訓練をしているわけではない。

##### 災害前：「災害はいつか起こる」と覚悟していた

きっと地震が起きるだろうということで考えてきた。安平町は、海はないし、山も大してないし、川も小さいが、地震が起きたらどうなるだろうかということ自治会でずっと話していた。あちこちの災害をみていて、いつかは来るかもね、という話をしていて。何かあったときに助け合えるようにと、昔から。何かにつけて、水害になったらどうする、アパートの2階に逃げようとね、と。

##### 発災直後：投光器をつけると人が集まってきた

いざ地震発生となったとき、役員もある程度発電機を扱えたので、発災当日も、真っ暗なうちから投光器をつけた。その明かりで近所の人が集まってきた。正規な避難所ではないが、人が集まってきた。発電機、投光器は非常に役に立った。

中学校体育館の中に入れないというのがすぐ情報で入ってきて、花若に入るしかないとなった。発災当時は寄り添うしかないから、と、地震発生後すぐに人が集まってきた。

#### **発災直後：平時の訓練通り、町内会で安否確認を実施した**

会館の中を片付けたりした。普段の訓練通りだね、という話になった。私が、親類の安否確認をして帰ってきたら、地域で対応が始まっていた。安否確認を近所の人で行ったりした。

町内会独自で安否確認をした。自然発生的に対応がはじまった。

#### **応急期：食料は災害後に確保できたものを配った**

食料の管理は難しい。賞味期限がくるようなものは、できるだけ備蓄しない。各自がものを持ち寄って、というようにしている。

地震が起こったあとも、食べられるもの、飲めるもの集めて。お年寄りには、お湯を沸かしてお茶を配ったり。朝6時ごろ。子供にジュースを配ったりした。

#### **応急期：ものを備えるのではなくて、助け合えるようにしておくのが大切と実感した**

感謝しているのは、ラップとトイレトペーパーを募ったところ、みなさんがご飯を食べた後にもってきてくれた。涙が出るほどうれしかった。町で勉強する機会もあってよかった。役場に備蓄してもらいたいな、と思うかもしれないけど。何が必要か、災害によって変わってくる。ものを備えるのではなくて、助け合えるようにしておくのが大切と実感した。

追分は町内会活動が盛んで、けっこうある。普段から飲んだり食べたり。普段から仲がいい。

#### **トイレの水は井戸水を町内会メンバーで汲んで使った**

皆さん毎日手伝ってくれた。一番大変だったのはトイレの水。井戸水を汲んできて。男の人がやってくれた。古い井戸が、まだ使えるものがあると住民の人が教えてくれた。

役員でない人でも助けてくれた。

#### **寝床を工夫して確保した**

花若会館は最大で、100人くらいいたと思う。一人、座布団3枚。足腰悪い人には座布団を引いてあげた。寝るところもなかった。入れない人は車中泊、テント泊していた。ちょっと寒い、長机を床として。

#### **避難所の運営主体は自治会同士で連携して実施した**

88日から、役員で朝晩のミーティングは欠かさずしていた。避難者の入出と行先の管理をしていた。

#### **役場担当者が来た時には運営は始まっていた。**

役場担当者はその運営にスッと入っていた。6日の11時ごろから。それまでは自治会で。地元の役場職員がついた。地域の小さな避難所は、17日暮らして感じたのは、近い人で良かった、地元のことを知っている人で良かった。

#### **地域を知らない役場担当者が避難所の運営に入ったときは大変だった。**

知らない役場職員には頼みづらくて、私にいろいろ相談が来た。

役場職員はよくわからないところにきて大変、私はたくさん相談が来て大変。途中でやりかた変わるとみんな戸惑うので。

#### **避難の終わりが見えず、疲れが蓄積していった**

皆さん疲れていたの。一番ネックなのは、終わりが見えないこと。つらくても、どうにもならないので、日々みんな、なるべく笑顔でいられるように。

#### **自宅の片付けが大変だった**

自宅の被害は、すごいことに。1か月くらい片付けにかかった。避難者も役員の方の家も片付けなきゃ、と言ってくれたが、年内に終わればいいや！と。

#### **避難所で長い間時間を過ごしていたのは高齢者が多かった**

避難者は高齢者が多かった。若い人もいたが学校始まるから、と。あと、ご飯だけ作れないから泊まるだけ、という人もいた。みなさん不安だったと思うので、快く受け入れた。こんな時だから、楽しくやろうと。

#### **支援物資はなかなかこなかった。炊き出しを実施した**

必要なものは、本部に連絡入れているが、なかなか来ない。食べ物は、午前午後で着いていた。炊き出しはできるだけしないと言われていたが、やった。

避難所開設3日目くらいに電気が入ったので。暖かいものをみんなで食べよう。

食べるのは一番笑顔になるので。それで、部分的に手作りするようにした。野菜とか、業者さんから直接もらった。

卸も動かなくなったので、地元出身の札幌の会社の方が野菜を持ってきてくれたり。スーパーに卸す野菜だから、洗わなくてもいいよ、と。そういうことができた。

お年寄りが多く、カレーばかりでは栄養的に不安で、野菜を食べてもらいたかった。

#### **避難所の格差が気になった**

ちらっと聞いた。悩んだことはあるが、ゴルフ場のマスターが食事を2度、豪華なのを作ってくれたが、それは他の避難所にも回してくれと頼んだりした。行政がやると差をつけられないから。

物資は全部寄附。良かったかどうかは避難者が判断することだが。楽しくやった。避難所を引っ越すときには引っ越しそばといってそばを出せた。

ラジオの取材が来たが、こんな楽しい避難所は初めてですと取材者に言われた。寝る準備の時間に来たので結構にぎやかだった。

### **避難所の閉鎖時には2名が残り、他の避難所に統合された。**

避難所閉鎖時2名は他の避難所に。ほかの数名は、公民館には行けないなどとなって。

### **ボランティアの受付を行っていた。被災者の事情がわかっているので対応ができた**

社会福祉協議会のボランティアも片付けを手伝ってくれる、その前にすこし片付けしたい。7日とかは、ダンスが倒れたと言っている高齢者に、いまはそれはいいので手伝いがきってからやればいいという話をした。

ボランティアの受付はここでやっていた。朝、用紙を取りに来てくれることになっていた。

地元の人がいると相談しやすい。それぞれ必要な手伝いは違う。お互い家族構成もわかるし、避難者問い合わせの電話も対応できた。

### **役場職員とは行き違いもあったが、よくやってくれた**

地域の小さい避難所の良さが出たと思う。行政としては管理が大変だと思うが。

役場職員も被災者であるので、自治でやるのが良いのかもかもしれない。本部とのやり取りは役場の方がよいが、ポリエチレンの手袋頼んだら医療用のゴム手がきたりした。十分やってくれたと思う。

役所職員に、メニュー表くれないかなといったら米、パンみたいな大雑把なものが来て、ダメだったねー、まあしょうがないよ。と。

### **自治会による避難所の運営はこれまでのつながりもあり、うまくいったと感じている 振り返りの会を実施し、課題出しをした**

運営がギクシャクすることはなかった。お泊り会またしようかという話も出たくらい。

にぎやか女性部はすぐ動き出す。あのあとも、女性部集めて、11月とかにお昼を食べながら振り返る会もした。話し合った内容を役場に伝えたりもした。

みんなの記憶が薄れないうちに、どこがよかったか、なにが課題か話し合った。

11月の会では、35、6人集まった。みんな不安な反面、話したいことも多かった。高齢者が多かった。農家さんの若い奥さんは何人か来てくれた。

### **避難所には脆弱性の高い方もいた**

6日朝には200人いたんじゃないか。パニック症候群3名いた。ぬくもりで売っているパンを急遽買ってきて配った。必死だった。自宅に帰ったのは4日目。

高齢の方の夜の問題行動が出るだろうと。4人出た。自分の寝る場所がわからなかったり、下着を汚してしまったり。夫婦の方が、奥さんが寝られないとなって、俺の眠剤飲ませてもよいか。ちょっと待ってと言って、冷たい水を飲んでもらって。

### **運営側は夜の対応も実施していた**

管理している方はみんな仮眠みたいな感じで、余震がきたらドアは開けないといけないし。泊まる人間は決まっている。夜は女性部と、男で数人。役場、道庁職員、岩手県職員。普通の役員に夜は帰ってもらって、その人たちには朝の水くみに行ってもらって。

### **被災者が、いろんな課題を話せる人材が必要だ**

女性が必要な部分はあるが、できれば話しやすい状態が必要。風呂も外部の人が説得しても入らないおばあさんがいたが、私がSOSで入ってあっさり入ってもらえたり。

次も頑張ろうね、と話をしている。

### **災害が起こったらどうするかを考えるようになった**

もし災害が起きたら、という考えをみんな持っている。普段かかわりが薄かった役員も参加してくれるようになった。行事の参加率も増えた。コロナで難しい面もあるが。

### **行政との関わりを考えるようになった**

ずっと避難所に入ってくれた職員も、新年会おいでよ、と違う地区だけど誘ったりした。普段から役場職員とつながっていないとやりづらい部分がある。つながっているほうがやりやすい。

他の地区のことはちょっとわからないが、避難して来たら積極的にウェルカムしようとした。

たまたま若い職員がきて、同じ苗字の職員がいたので、●●兄、●●弟、みたいな呼び方をしたりとか。

### **支援者とも食事を分け合った**

本当は、支援に来た人たちの食事は別になるところだが、一緒にご飯食べてください、お話ししてあげてください、と。そうして一緒に食事したほうが、お互い頼みやすい頼まれやすい。

布団も岩手の人がみんな干してくれたり。そしたらみんながお礼を言いにいたりして。町内会が運営を回して、職員が対応したりしていると文句も出にくい。



### **安平町職員も被災者で、大変な思いをしていた**

職員が、与えられる食事はカップ麺だと聞いた。働く人にこの扱いはないだろうと考えていた。

### **小規模避難所のよさ、自治会で運営することのよさを感じた**

大きい避難所とは違い、様々なヒントが聞けた。大きいところで集約するのも手だが、田舎では、小さいところでは地域地域でやるのが、そのほうが自然な流れになる。

配膳は役員、片付けは各自で座りっぱなしにならないように、というようなこともやった。分別もお願いしたりした。

小さいところだから、話を通すことができた。運営後半はみんな手伝ってくれた。できる人ができない人をカバーして。

### **トイレの運営は大変だった**

トイレは大変だった。阪神・淡路大震災のことを思い出した。水が少ないから我々で流して、紙はこっちにと。大をしたときにはこっそり教えて、とか。

### **避難所指定されることのメリットを感じた**

ここはもともと避難所に指定されていなかったが、避難所指定してもらえた。除雪してもらえるのがうれしい。地震の年にいつの間にか指定されていて。

### **その他**

地域の被害では、石膏ボードが割れたが支援が足りなかった。

しいて言えば、建物のクロス、地震で割れたものを直してほしい。私の家では石膏ボードが割れて、直してもらった。見舞金では全然足りなかった。

### **今後も町内会で、防災倉庫の備蓄物資の充実や訓練に努めていく**

コロナで今あまり考えていないが、避難訓練などは継続してやってく。あと、防災倉庫の中身も足してもらえるように。リアカーがないので、役場に補助を出してもらおうように考えている。物も人も運べるし。

### **自衛隊の支援はありがたかった**

自衛隊等の支援者に困りごとをまとめて伝える担い手として、自治会が機能するように務める

公営住宅は停電で大変だった。自衛隊さんに、4階まで水を運んでもらったり、若草の上のほうまで給水車に入ってもらおうお願いをした。

ちゃんと放送入れながら回ってくれたのでうれしかった。自衛隊もプロなので、要望がどこにあるかわかれば行動できる。核になる人間がいると、届いていない人の確認とかもできる。この年齢でもなんとかなるので。

水道開通確認で、行政からどこに避難しているかわからない人の問い合わせとかも来た。行先確認はしっかりしたことで、よく対応できた。小さい町だからできることだった。

次世代への継承、10年20年後のことを考えると、そのあたりを町に考えてほしい。

### 2.3.3.2 J A 追分に対するヒアリング

#### 厚真町に比べれば、安平町の被害は限定的だった

当時の農家の方は、被害的には追分は大した被害を受けていない。早来も、厚真ほど被害を受けていない。

#### 灯油タンクの被害への対応を実施した

私に対応した部分では、灯油タンクが倒れた。町的地盤が悪かったのか、たくさん倒れた。その復旧を毎日。2か月間。家の周りが広ければ車入れてやれるが、家と家の間に石油タンクがあるので、4、5人で行って人力でやった。満タンになっているものもあるので、いくらか石油を抜いてからやるということもやった。J A 給油としての業務なので、一般家庭もやった。

#### 家畜のための水の確保対応を行った

早来は、牛の水。搾乳であれば消毒でも水を使う。当時、富川の J R A から散水車が2、3日後に3台くらい来て、各農家に給水していただいた。

#### ライフラインが途絶したが、支援でまかなえた

初日は停電したが、2日目以降断水となった。トイレは、水を汲んできて、水を流した。飲料水は、農協の付き合いの札幌の業者がペットボトルで持ってきてくれた。飲み物、食べ物、日用雑貨も、いろいろな人に応援していただいた。厚真に救援物資が行き過ぎて、追分、穂別で配ったりもした。飲み水については、農協的には不自由しなかった。

#### ライフラインの復旧には時間がかかった

みずほダムのところで山崩れがあり、その土砂除去に時間がかかった。パイプラインは大丈夫だった。給水栓は、追分は大丈夫だが、早来では使えなくなるところが多かった。

#### 花のための水確保が難しかった。花の出荷や取引が難しかった

農家は、自衛隊の給水車が来てくれていた。追分では、花の農家が2件、けっこう水を使うらしく、対応をしてもらえなかったとのこと。あと、花を札幌に出荷していたが、運輸会社が止まっていたので、自家用車で運んだとか。市場が混乱していたので、市場に出しても値段がとれなかった。

#### ガソリンスタンドは平常化まで時間がかかった

追分では、ガソリンスタンドの塀が倒れ、消防法の関係でしばらく営業できなかった。

追分の人も早来で給油できるようにしたが、ホクレンからどこまで供給できるかわからないという話。うちも在庫切らせないので、2,000円とか、給油量制限をしたりした。スタンドでの優先順位では、販売量制限と、農家の要望、農家の分の余剰は残しながら販売した。

#### **倒壊した畜舎もあり、対応を行った**

古い牛舎は何件か倒壊した。直せるものは直す、壊すものは壊す。農協に任せてもらえるものは業者をお願いしてやってもらった。業者もたくさん話が来るので、私が追分に来た時も復旧途中だった。なんだかんだ2年くらい。当時は仕事が多かった。

#### **震災をきっかけにした離農を心配した**

倒壊をきっかけに離農とか。早来では離農はなかった。厚真の近くでは、牛小屋が壊れて、早来の畜産部の市場を仮に借りて、そこで飼っていた。頭数が多かったが、被害も特に大きかった人がいた。地割れがあり、段差があった。地震の被害はその地区でとくに大きかった。震災の影響で大ダメージというのは、追分はない。震災前からの課題による離農はあったが、追分ではない。早来でもないはず。

#### **元の場所で住み続けられない人もいた**

家も住めないという農家さんがおり、それで復旧したのもある。離農はいなかったと思う。町の方、2年間の「みなし仮設」の中で、苫小牧とかに移り住んじゃう人が多かった。早来では家を壊して移住する人が多かった。ほぼ高齢で、被害はそれほどなかった。家も倉庫も壊れず。

#### **農協の関連施設は大丈夫だった**

9月、メロンももう終わっており、稲刈りがそろそろという時期。農協のコメ関連施設は大丈夫だったが（一部保管物の荷崩れはあったが）。肥料とかもたくさん積んでいたが大丈夫だった。

#### **農家同士の助け合いの調整を実施した。**

牛を飼っている人は、お互いに助け合っている。牛舎の空きスペースを融通しあったりしていた。すでにやめていた農家の牛舎等を利用させたり。だれも地震を想像していなかった。行き当たりばったりでやった。市場の牛舎にいったん動かそう、そのあと、うちの牛舎空いてるから、何頭預かるよ、とか。JAの畜産部で主導しながらやった。酪農振興会とかでもみながら。事前のマニュアル等はない。

#### **(被害) 停電で搾乳ができなくなった**

牛、乳牛は早来で多かったが、電気ないと搾乳できない冷蔵できないで廃棄したようだ。

ホクレンか道かの助成が出たとき、みなさんは発電機を購入したようである。ホクレンも各スタンドに発電機をおいて停電時も販売できるようにした。

#### **(対応) 発災直後は連絡ができず対応が混乱した**

携帯電話はみんな通じない、充電がない。厚真、本所と連絡できない。あやふやで、指令も入り乱れる中で対応した。電話来るが、全然出られなかった。こっちから電話しても出られない、1、2日は非常に混乱した。

#### **(対応) 教訓を踏まえて、災害対策本部体制を整備した**

初めての経験。こういう時だからこそ、災対本部みたいなものを作って、というのはなかった。その後、作った。JAとまこまい広域で作った。対策本部の系統図などはもうできている。風雪害の対策本部みたいなのはもともとあった。それに、あらためて地震に対するものもできた。昔、穂別とかで水害がH4とかに。その辺のときから、当時は広域統合前だが、災害対応については、いろいろできていた。

#### **JA間では人的支援より義援金の手当を実施した**

伊達農協・道外農協から何かあればという話は来ていた。各JAから義援金も相当来た。人的支援はなかった。ほぼ自前の人間で対応した。土日祝関係なく忙しくやった。一日も早くやらないと。ただ収集つかないんじゃないか。

#### **専門知識や経験が無いと支援できない対応もあった**

ホクレンから灯油タンク関連で3、4人、1週間くらい来ていた。ボランティアは来ていない。設置は危険物関連の資格はいらないが、誰でもというわけには。

#### **事務所の内部被害がひどかった**

朝、起きて暗いうちは危ないと思ったので、5時ごろに家出てきて、事務所に来たらぐちゃぐちゃで。

#### **発災後初日は動けなかった**

とりあえず事務所にいてもしょうがないので農家を何件か回って、発電機用意してくれって言われて、でも業者も発電機ないって言って、どうしようもなく厚真に行こうとした。そしたら、自衛隊の支援で車が渋滞していた。それで、今日は営業できないし、1日目は何もできないという状況だった。

#### **被害が限定的で地域格差が大きかった**

町内に限らず苫小牧・千歳から職員が通っている。家は全く被災していないし、イン

フラ大丈夫という、ギャップがあった。私も家は千歳で、水は止まらず、2日たったらコンビニもふつうに空いてる。

#### **役場と農協の支援物資の調整はなかった**

支援物資の配給が役場とバッティングすることはあった。農協に来たものは農協内で、という感じ。不足物の相互融通はなかった。

#### **被害確認を実施した。**

役場の方も、発災当時は各農家を回ったようではある。農協でも回って人的被害等の確認をした。その後、被害が大きいのので、詳細にもう一回まわって、詳細な被害情報を出した。そして、JA共済で直すの直さないのと。

#### **JAと役場では災害時の連絡網がある**

災害時の連絡網は作っている。何かあったときに、産業振興課・町長・地区役員等に連絡できるようにしている。本所でも作っている。

#### **災害後の対応体制の検討は具体化していない**

JAと役場の産業振興課で不足物の調整とか、一本化するのは大切かもしれないが、震災後、改めて会議を行うという話はしてない。JAにおいて、作物別に、コメの農家なら、花ならとかそういうものを作ろうかなという話は出た。農家さんから、組合懇談会でそういう話はでた。またこういう地震が起きれば、こういう場合にはこう対応する、とかそういう検証をしているのか、という話はでた。我々としてはまだ不十分かもしれない。牛関連では、発電機とか、飲料水とか検証されていると思う。今でも、雪・停電対応すぐ行っている。

#### **新規就農は増えている**

新規就農、道外から毎年2組くらいでている。1年研修して、研修農場でやってもらって、3年目に自立。結構、10組くらい来ている。メロン24, 5件のうち10は新規就農。これから研修というひとも4組。震災前からこの傾向。震災後も来ている。震災後のほうが増えている様子もある。新規就農のスカウトに東京・大阪に行くこともある。イベントに、役場と農協で出て行って、自分たちのコーナー作ってスカウトしてくる。数組入るとインパクトがある。もと自衛隊・消防庁…とか、早稲田とか北大とかのひとがメロンをつくりに来る。

夫婦でもと国税庁、っていう人がきたり、有名ゲームメーカーの人がきたり。夫婦でゆっくりに仕事したいとなったら農業しかない。と。

#### **農作物へのコロナへの影響も大きくなるのではと懸念している**

コロナの影響も出た。メロンは安くなった。贈答品だから。嗜好品なので。あと、観光で



売るのもできなくなって。最初のころは苦勞した。イベントがないのがつらい。今年もどうなるかわからないが。同じ傾向がもう2年も続けば影響は大きい。

### 2.3.3.3 J A 早来に対するヒアリング

畜産は広域を早来で管轄している。

#### 家畜のための水の確保への対応を行った

早来では、主要な被害あるが、乳牛家で、最長2週間、3週間電気が来なかった。ブラックアウトは2、3日だが。酪農は乳しぼりのため電気が必要。発電機を持ってる人いたが、持ってないところが半数くらい。苫小牧のリース会社から調達して配って歩いた。

それと、給水もたくさん必要。上水道を使っている農家では、そこが直らないといけない。そこに、3トンの貯水タンクを急遽、農家の状況を聞きながら配って歩いた。

#### 発電機等の助成事業はあったが、条件面で折り合わなかった

#### 被災地において活用できるように、各省庁で調整してほしい

農水省において、発電機の配電盤とかの助成事業は出たが、経産省関連ルールにおいては、電気法の中で、ワット数、10kw 以上は資格者が点検とかやらねばならないという縛りがある。業界団体名を挙げたが、整備に年10万/件かかる、整備のための有資格者がいないと設置できない。農協でまとめて工事しても、その後の整備をどうするか、ということがクリアできず、活用に至らなかった。

#### 支援制度においては、周辺法制度との整合性を先に整理してほしい

堆肥舎の復旧について、建築基準法で違法建築になってしまうところが出た。建物の強度とか調べられて、簡易堆肥舎でも建築基準法にかかると。支援は有難いが、周辺法制度との整合性を先に取っておいてほしい。

#### 市場の一角を間借りして、家畜を避難させた

牛舎に倒壊、市場を間借りして一時避難。農協職員で世話もした。市場自体は北海道半分を対象とした施設なので、非常に大きい。J Aとして市場と交渉して、職員が牛の移動して。

乳絞りについては、台風来て、停電だったので、そのときかからもうリース会社と話をしていたのが、台数を増やしてお願いした。

給水については、浄水場から行政にお願いしてタンク車、J R Aの散水車を確保した。

あと、ミルクローリー、あれも償却期間過ぎたものが、あちこちに残っている。釧路から来てもらったりした。それは、こっちからホクレンに頼んで。農家に後ろの部分だけおいてもらって給水したりした。

集乳ローリーも、牛乳運んだあと、水を汲んで、配ってもらった。それでしのいだ。3tのタンクは、1日とかで空になってしまう。

#### **農家の自助によるそなえが必要である**

とにかく水、電気は酪農家こまる。農家も自分の身は、自分で守るための事前のそなえを考えてほしい。発電機、貯水タンク、発電機を事前から持っていた農家からすると、不公平感あり、皮肉を言われた。

また、酪農家中心に対応していたら、肉牛農家からうちにも対応してくれてもいいんじゃないかという声が出た。

#### **災害対応のマニュアル作成の話が出ている**

震災後にマニュアルが必要という話が出、整理している。酪農家では、停電時、断水時対応括弧していたが、一度にみんな止まってしまうことはない。

市場の空いているところを活用した、その采配は。

それとした。牛で怖いのは、伝染病。相当気を使った。ある農家に過去伝染病あったりすると、ちょっと市場には持ってこないでと。

#### **養豚についてはかなりの実害がでた**

早来地区の養豚農家はかなりの被害だった。ぶたの預かりは無理なので、死ぬか、処分するか。それは地震復旧事業を使った。拡大もした。去年春には軌道に乗ったようである。

#### **農家の生活上の困りごとに役場と連携して対応した**

農家さんの生活上の困りごとについて、役場と連携をとったり。住む家もなくなった方はいたが、直接役場に。簡易住宅とかトレーラーハウスとか。共済金での対応も行った。家建て替えたというより、ギリギリまで仮設住宅までで済んだ人が多い。仮設住宅買い取った人もいる。

物価も上がって、住宅立てるのも大変だった。坪単価で90~100万とか。ウッドショックと、半導体関連で、家が建てられないという話もある。立てるのも大変。

#### **安平町の対応については、親身になってもらっていないと感じた**

復興に関して事業で、ヒアリングして、町が対応していると認識している。行政中心でやることだが、ヒアリングの対応の仕方が、ほかの町の対応と比べて温度差があった。事業に制約があるのはわかるが、なんとかしてくれようという姿勢について、一步遅く感じた。様子見ながら、というような感じ。広域を相手にしているとどうしても他の市町村と比べてしまう。

### **事務所の内部被害がひどかった**

私は1週間ぐらい事務所で寝泊まりして、タンス倒れて痛みで起きたが、けがはたんこぶぐらいで、それで事務所来て、もうぐちゃぐちゃで。日中だったら事務所大変だったかもしれない。事務所に火元もなくてよかった。ガス管も漏れている家があった。停電火災が起きなかったのは幸運かもしれない。

農協あつまったのは2週間ぐらい集まれなかった。本書のほうでは。各所でできることで動いていた。当初は電話繋がらなかったし、他支所との情報共有もできない。

### **J Aが音頭取って行政の取り組みをすり合わせることは手が出せなかった**

市町村ごとのやり方の差に農協として首をつっこむのは、できない。そういう機能があってもいいかもしれない。JA が間に入って意見調整すると、すり合わせる余地ができるかもしれない。

### **事前に行政や他の組織との役割分担が必要**

組合員対応をしないといけない、酪農家を最優先にしないといけない、事前にすりあわせないと。みんな被災者で、それを仕事だということで対応しているわけで、100人に同じ対応ができるわけではない。

酪農家についてはマニュアルを作った。人的なところは、酪農ヘルパーから優先的に派遣したり、そういうことを、うちの事務局でやって。ヘルパー使っていいから、やってくれと。生き物飼っているのだから、自覚の問題はあると思う。

畜産部 14, 5人だが、自分の行動は常にホワイトボードに示すようにしていた。

### **生活支援において、ボラセンと連携ができるのではないか**

産業にかかわる手伝いはできないと社協では扱っていたが、J Aと連携取れば、と思った。

自分らが現場でサポート回れない。外部からのそういう支援がうけられれば、助かるが、専門性が高くて難しい。家の片付けとか、そういう。

### **酪農の専門性を持った人の支援確保を模索すべきであったか**

産業支援ボラは家畜の管理は頼めない。片付けぐらい。現実、活躍の範囲は限定的のよう思う。酪農家さんとか、そういうひとがくれば。そういう情報はない。たとえばそういう人が来ているとわかれば、一声かけてくれば、どこかの農家にたのむのができたかもしれない。結果論だが、そういう、行政との情報の共有はできていない。

こういう技能の人を求めているという情報を出していくのもある。通常のボランティアより産業のサポートはもう少し長い時間必要。

### 季節で実施すべきものは支援を待ってられない

地割れ直すのも、補助出せないよ、自分で治してとなくなってしまった。畑もひどいところあったが、自分で直したこともあった。一刻も早く治さないと、飼料作物作れない、待ってられない、役場を。結構多かった。あとはあきらめて、まだ使っていない畑もあると思う。

### インフラや道路に係る情報は自主的に集めた

インフラ、道路がどうなっているとか、そういう情報は相当集めた。農家さんとか、本所に確認したり。役場からも。農家さんからの情報提供は役場にも同時に提供されるようにしていた。

あちこちから警察自衛隊来て、渋滞があった。そこで、多少割れてるけど走れる道を、と。センターラインから崩れているところもあった。ほんとは地図で一瞬で把握できればいいが。

### コロナ禍で災害が起こったらと不安に思う

中央会がつくったBCPに、細かいところを足して。だけどあれ、今みたいにコロナで震災あったらひどい、動くに動けない。

避難所もできない。

### 万が一に対応できる人を育成する必要がある

万が一に対応できる人を育成しないと。マニュアル通りに行動できるとは限らない、マニュアルは必須だと思うが、機転を利かせて行動できる人材を育成しないといけない。生き物を扱っている以上。

## 2.3.3.4 建設協会に対するヒアリング

### 災害の対応は町にお願いされるがままにやった。

災害のあと2、3年はよいがそのあとは…というのが現状。徐々に去年あたりから厳しくなっている。2年間は忙しかった。それがぬけて。今年はさらに厳しくなる。

### 町内対応は手がまわらなかった。

当日の昼から機材手配した。家のことは何もできなかった。10日水なし電気なしで。土建屋なので発電機持ってくればどうにでもなるが、近所に嫌味を言われるのでやめてくれと言われてもっていかなかった。自分は夜帰るだけだから気にしなかったが。

### 災害関連の対応は次から次へと対応を実施した。

2町のごみ処理場が最初だった。道路は直しようがないので、山を切り開いて道を通した。次は水源地。埋まっちゃった。それらの応急復旧のめど立って、つぎは公費解体の対応を実施した。

**災害関連の業務については、役場から動けるところはいつてくれ、との要請があった。**

当初は土木から最初は直で業者に連絡があった。動けるところはいつてくれ、と。事前の割り振りもなくで。早来のほうが忙しかった。近いところがそれぞれで動いていた。追分は見に行く暇もなかった。4日風呂入らなかつた。震災直後、現場行つてくれ、となつて、その途中で被害を見つけたら、対応するという毎日だった。3日目で携帯が全部つながらなくなった。連絡とるのも難しい。今の車は、バッテリーもあるし、車もあるしで、便利だと思つた。

**事業者単位で対応するより建設協会が指示命令系統を整えた方がよかつた**

役場は追分のことも早来から電話来る。連携協定はあるが活用されていない。災害協定組んでいるから、一回建設協会にきて進め方を共有したほうが速かつた。

**これまでは災害のない町だった**

ここは災害のない町、土建屋泣かせ。地震があつても、安平川びくともしない。護岸が少し壊れた程度。誰も地震を想定していなかつた。

**復旧工事で事業量が一気に増えた**

人手不足。当然あつた。入札にはいつたが。あとまわしにしてくれとは言つた。不落も2件出た。苫小牧は被害少なかつたのでそつちからきてくれたが。このさき、事業が少なくなつて普段から頼んでいるところが減ると災害時に困るかもしれない。役場は地元業者でも応札可能な環境を整えてくれた。もちろん大型物件はJV（共同企業体）組むことが必要だつた。

**住宅工事は低調だった**

新築はかすか。数えるほどだつた。直すといつても、ちょこつと直して。協会としては。解体以外はノータッチ。壊した人の10%も再建していないんじゃないか。

**解体ゴミの分別に協会が音頭をとつて貢献した**

解体ごみの分別とかは協会がやつた。協会が音頭を取つて。忙しかつた。貢献していると思う。

**復旧・復興を3年で実施することは難しい**

奥尻の事例も引くと、復興の後、どう建設業者とかかわっていくか。人手ふやしたり設備投資したりはできたのか。下請けを各会社をお願いして、それで2年くらいの復旧工事に対応した。自社ではなく、下請けをうまく回して。先が見えないので、下請けを、町外、苫小牧札幌から来てもらって、工事を実施した。そういう関係は、お互い付き合いで頼んでいる。協会で調整とかではない。東日本大震災でも、地元以外の事業者中心で回した話があって。今は全然仕事ないようである。国の、3年スパンで全部やれというのがおかしい。急がなくていいものは、10年内などできれば、違うやり方もあると思うのだが…。

#### **震災で傷んだ道路等への対応ができていない**

##### **現状復旧が原則であり、被災地のためになっているとは言いがたい面もある**

9月から3月で1カ年なので、残り2年。道路なんか、通れるところは後回しになってしまった。部分的にダメになった道路、凸凹で、除雪もままならない。そういうところを直すべきだと要望している。国、道の縛りがきつい、現状復旧で、耐震パイプにできない。堤防も、直せない。ほかの補助メニューと組み合わせで実施できないか。

#### **復旧・復興事業とするためには災害査定が前提となるが全部に対応できていない**

災害が少ないせいで、コンサルとの付き合いも少ない。日ごろから付き合っているコンサル少ない。それで査定漏れが多い。道職員や土木技術や2、3人しかいないので、コンサル次第。冬に見て回ってるため、法面が崩れているのが査定漏れになっているところもある。釧路沖でも、春先に斜面災害が出ることもあった。その時は特例的に出せたが。

#### **査定を効率的に実施するためにはデータが必要であるが整備が遅れている**

道路データも紙だったので、古いデータがでてこなくてこまった。役場もコンサルに任せるしかない。時間も限られている。地域のことを知っているところなら。良いのだろうが。

査定期間を長くできるといいのだが。役場も書類作成で大変だったようだが。

役場もコンサル探しで苦労したらしい。大きいコンサルは、被災地全体の対応で、北海道・開発局の仕事に忙殺されていたのでは。

#### **厚真町は土木的な被害も大きく、比較すると対応が手厚くなった**

厚真は、当日翌日から、建設協会が役場内に一室構えていたらしい。厚真は、常時人を置けたようだ。大きい会社だったから。社長が常駐していた。厚真は災害多いので会社が大きい。

#### **安平町では土木工事の発注が減っている**

震災前の発注量を切っている。震災前通りの発注額を出してほしい。補助事業が減った。

2、3年じゃなくて10年で復旧、できれば、地元でできるが。長期的な発注量を考え



ていかないといけない。地方に行けば行くほど復旧後の事業激減が効いている。震災で、各種更新の前倒しができてよかったという声もあったが、前倒しは全然なかった。

#### **土木工事の発注が減ることで、工事業者の確保に影響が出る**

人口動態を見ると、牧場・自衛隊から定着する流れはある。うまくできるといい。

移住者がきても仕事ないのではないか。建設業でなくても、子ども世代が出ていくと、事業継承の問題もある。

いざというときに地元業者が動かないとどうにもならない。除雪も回らなくなっている。道の除雪やっているが、一人1台、交代要員がいない。排雪は何年もやっていない。昔は排雪もやったんだけど。昔は、このあたりの除雪はきれいだねと言われたものだが、最近は。

#### **土木工事のオペレーターの確保ができない**

最近の農家は、地元のオペレーターをやってくれない。高速道路や空港の除雪にでかけて行く。実入りがいいし、待機料もらえる。地元事業者は、除雪が稼働して始めてお金がでる。収入の見込みがある、待機料の出るところが良いのだと思う。

あと、ハウスやっているから冬でも働いている。昔は半分農家だったが、最近は。コメの人は夏も建設に来る人がいたが、コメはだいたいなくなったので。稲刈り田植えで1週間休むとかで、あとは来ていた。

#### **建協として積極的に防災対策には取り組んでいない**

建協としては、炊き出しはやってない。建協は防災訓練にかかわってもいい気がするが、何をすればいいのか。強制参加じゃないと参加しない気がする。高齢者と役員と…。

ライオンズクラブとしては炊き出しをやった。震災の次の日にはライオンズクラブが水持ってきてくれた。安平、遠浅では防災訓練やっているようである。

#### **自宅の被害への対応はできていない**

ぐらっと来るといまだに嫌な感じがする。タンスとか倒れて大変だったので突っ張り棒買った。立て開きの窓もみんな壊れた。うちはまだ直してなくて、クロスにガムテープ張ったまま。寒いから、目張りしてる。うち、クロス貼りなおして、そのあと2月の余震が来てまた壊れた。

#### **次に災害が起こっても、使命感だけでは対応は難しい。**

地震が来た年は中止になった事業が多くて事業費がへった。道の駅は再開早かったが。

事業者のひとは、使命感的に参加するかもしれないが、働きとしては、寝ないで、電話何時に係ってくるかわからなくて、やりたくないと思うと思う。

あの時は家のことは何もできなかった。僕は1、2か月会社に泊まっていた。役場にも1

泊した。家族持ちは、まずは家のことを、とおもってしまう。電気こない10日は長かった。家族が、トイレの水がなくてイライラしていたが、十分に手伝えなかった。

**役場職員が査定や復旧工事に対して、十分に取り組む体制がとれていないのではないか。**  
経験してないだけ町の職員も経験したことないだけ大変だったと思う。職員に災害査定  
の経験が全然ない。いまは行政の技術力がなくなってる。建設課は寝てないが、他課は堂々  
と寝てたりとか、待機してるだけだったり、ということもあり、人的配置がうまくいって  
いない。

### 2.3.3.5 社会福祉協議会に対するヒアリング

#### 社協のそなえは不十分な面があった

社協としては、災害の備えはほとんどしていなかった。想定災害としては地震を想定して  
いたが、マニュアル・参集基準などなかった。

#### まずは福祉サービス利用者の安否確認を行った。

通常業務の訪問介護の、利用者の安否確認をした。4, 50。各戸回って歩いた。両方に職  
員はいるが、訪問介護の事務所は早来のみで、利用者も早来が多かった。自分でやった。役  
場では、ケアマネ・ヘルパー、それと社協で独自に安否確認したので。訪問介護の利用者で  
はタンスの下敷きとかなかったが、地域には部屋から出られなかった人、ケガをされた方も  
結構いた。

#### 地域が安否確認して、福祉的なところについて社協と役場で役割分担が理想ではないか

自治会町内会で、誰がタンスの下敷きになっているかわからないので、要援護者について  
は全員確認するのが大事。まず地域に動いてもらうのが第一。要介護、介護認定の方、認知  
症の方などは、福祉関係が、自治会で生きているのかどうか確認したうえで、福祉関係が状  
態の確認して、切れ目なく支援をする必要がある。福祉関係の人が見れば、次何がこまるか  
わかるので、そこでケアマネ・訪問介護・行政で、手分けして役場に情報を集約するのがよ  
い。

#### 地域が安否確認して、福祉的なところについて社協と役場で役割分担。

安否確認は、多重になるのも悪くはない。まず地域住民、自主防災組織が仕組みを作っ  
ている。総務課でも、災害時要援護者リストつくって登録呼びかけている。被災者もフェーズ  
が変わっていく。けががなければ最初はOK、次に水、暖房、食事、家族との連絡、薬、そ  
ういった問題が出てくると、福祉関係が状況を把握する必要がある。

### **地域、役場、社協で災害時の課題を共有するところには至っていない**

地域のキーパーソンになる方と、地域の支援が必要な情報は共有している。安否確認をしなければいけないという認識はあるのだが、地域の人で協力して安否確認をしようという流れになっていない。

教訓が住民に浸透しているか、そういった課題を共有するところにはいたっていない。振り返り、今後のことを考えるというような感じになっていない。地域における日常的な訓練の状況など、わかるとよいのだが。

地域の核になる人、自治会町内会がコミュニティの基礎単位で、社協主催でミーティングを開いていて、そこに福祉協力員、会長、役場総務課防災担当は行ってやっている。

### **訓練までできている地域は災害時も機能していた**

言葉ではなかなか。うまくいった地域の話をして、ああそっかそっかで終わってしまう。

次につなげるにはまず訓練が大事。まず会館に集まる。そこで来た人でどうするか。それができていた地域は、震災の時もうまく活動できていた。

安平第一自治会、花園自治会。そこではきちんと訓練していたので、地域のキーパーソンが集まって。どうしよう、安否確認に回ろうというのができていた。実際にどう行動しているのか、わからないところが多い。

### **自主防災組織づくりは進んできている。**

自治会町内会単位での検証、ができていない。災害後1年目は役場も大変で、さあ次のこととなったとたんにコロナで。いま計画を立てて、コロナの後にすぐに現場を回していくこともできる。

やりましようの声掛けでは難しい。いつ、どんな訓練をするぞ、といったように具体的な活動と呼びかけないと。防災の日ごろに、地域と一緒に訓練できれば。

自治会と、福祉関係の中で、課題の話し合いというものもない。今後検証が大事。

### **役場には各主体をつなぐ役割を担ってほしい。**

音頭をとる人がいない。全町的・個別ヒア・アンケートやっているが、役場も社協も、それぞれ単独で動けない、外部支援がないと対応しきれないことが分かった。

町外の支援も心強いが、町内で支援してくれる人がいれば、土地勘もあるので、町内でも被害の少ない方もいるのでそういう方をうまく使えば、もっときめ細かく対応できたのではないかと。

### **安否確認は1度では不十分で、継続的に実施する必要がある**

安否確認はまず第一だが、そのあとも毎日状況が変わるので、できれば毎日回れるくらいの対応のほうが良かった。認知症、体調が不安定な方もいるので、空いているヘルパーなど

使って、定期的に巡回する対応をしたり、できればよかったと思う。

**支援に係る人的資源を専門性に応じて、いかに確保するかが課題である。**

外部の応援の保健士さんが訪問活動をしてくれたようだが、それにプラスで、地域の介護職をうまく使って。気づかれずに大変な思いをしたひとはいたと思う。不安な状況なので、気持ちの部分で、誰かが声掛けをして安心するというのも大事。

保健士も数が限られる。じっくり話を聞くのは難しい。保健士、医療食の人も、普段の様子はわからない。町内の福祉職は、平常時の状態がわかるので、町内の人の視点があるといい。

訪問介護の利用者は、家族のところに避難したので、平常時の1/3くらいになっていて、動ける福祉職はいた。

**役場との連携はうまくいったと思っている**

災对本部の話は聞いているが、そこの連携の中で課題などあるか。柔軟に役場が対応してくれた、情報も流してくれた。必要な支援を求めれば対応してくれた。連絡取れるようになってからは問題は少なかった。

**避難所運営については、地区のルールが自然発生的に生まれた**

追分支所、避難所運営なんかは追分と早来でルールが分かれて。最初に集まったところそのまま引き継いでいく体制だったので、幹部の方はそれぞれの課に来たと思うが、避難所運営では、追分に参集した人は追分、という状況だったので。途中でやりかたも変えられず、というのはあった。

**生活再建支援のフェーズにおいては、支援メニューに応じて、各課と対応する必要があった**

その次のフェーズでは課題があった。避難所が閉鎖されてから、いろいろな支援を受けられるようになって、全半壊の家の支援金…医療費無料…いろいろな支援があったが。必要な情報が、縦割りの弊害というのを感じた。

なにかひとつ伝えるのに、健康福祉、総務、建設、税務、みんなに話をしないといけない。災害になると、役場内のいろいろな部署の話がつながってくる。福祉の人は、福祉が必要で、住宅も古く、収入も少ない。いろいろな問題が同時に噴出する。そういう方の困りごとを役場に伝えようとしても、あちこちの部署に行かないといけない。一堂に会して、情報を共有して、というのが、弱かったと思う。

厚真では社協に生活支援員が2名配置されて、定期訪問して状況把握、役場と共有する場があった。安平では、情報を共有する仕組みがなかった。我々も、厚真の事例を聞いて、こういうやり方があったのかと思った。

### **ボランティアセンターを立ち上げた**

ボラセンを立ち上げた。地元社協と、応援社協が中心になってやった。現場に出てコミュニケーションとるのは社協職員が担った。結構ボランティア来ました。ニーズ収集は社協で実施した。

### **災害ボラセンの、やることが、きちんとイメージできていなかった。**

困りごとを解決する、という狭い視点でのセンターというイメージがあった。家の中の片付けとか、水くみの手伝いとか、そういう困りごとを中心に対応するイメージでいた。災害ボラセンでできることはある意味決まりきったこと、健康な方ならだれでもできること。対応できることも普通のことと考えていた。

急性期、1か月程度は実際そんな課題が多かったが、より長いフェイズでは、外部の方と住民で集まって、思いを吐き出すような場であったり、外部の方が入ることのできるような場の設定が必要であった。厚真ではそういうことをうまくやっていたようである

### **ボラセンにおいては、専門性を持った外部団体との連携を試行できればよかった**

他町と比較して、ちょっと足りなかったこととして、いろいろな外部団体との連携が、ちょっともう少し繋がればよかったと思う。外部の専門性のある方と共同できると、ボラセンではできないけど、外部団体の専門性や機材の有無等によって、重機が使えたりといった支援内容も広がる。

また、一般のボランティアと専門ボランティア、つながりがあったほうがいい。大工仕事、こまかな補修ができる人であったり、連携取ればよかった。

### **農協から依頼があって、一緒に支援をするという連携があればよかった。**

J Aでは、灯油タンクの引き起こし2か月かかったという話もあった。そういうところで専門ボランティアと連携取れば、J Aとの連携も課題を感じた。農家さんは困った方、家のことは後回しで家畜の世話、作物の世話をしている人が多く困っていたが、基本生産活動、商業活動にボランティアはかかわらないことにしていた。商店の片付け、復旧のための作業はしてもいいんじゃないか、農家さんでも、今やらなければ手遅れになるようなもの、復旧に絡むようなことであればやってもよかったんじゃないか。

でもそこでJ Aとの共同なしにやると、降りる保証もおりなくなったりして、かえって損させる、そうなるのは困るということで進められなかった。今後も想定されること。農業の町なので。他町でも、大雪被害ハウスの片付けなどボランティアでやるところもあるが、うちはいまだに連携がないのが課題。

**ボラセンで得たニーズをボラセンのみで対応することだけでなく、他団体にもつなぐ視点**

**が必要であった**

外部団体は外部団体で自由に活動できるが、ボラセンがやると、扱える範囲で、対応することとなり、ある意味、支援を狭めることにもなる。そこで外部につながればよかった。信頼できる団体につなげる。うちの支援の限界が支援の限界ではない。ほかの団体の支援につなげる必要がある。

**対応の記録は必ずしも今後につながる形に整理できていない**

記録はこのこってはいる。まずは、帳票で残っている依頼表がある。その現地調査の写真記録、活動完了報告書の紙ベースのセットがある。そのリストもある。初期の部分では、入力が十分でないところもある。

依頼表は、個人の依頼表これは整理されている。それに、行政からの依頼事項、ボラセンの企画もある。そこが帳票として整理されていない。トータルの人数はわかるが。

個人帳票も、一日に一チームで何件、とかなっているので、重複計上で、延べ人数になっているところもある。そこで総人数と合わない部分もある。

**対応資源については、地元のことがわかる人が不足していた**

センターに入れたのが、局長と自分だけ。具体的な町の会館の場所のこととかわからない人が多かった。そういうことがわかる人がもう少しいないと大変。

**コミュニティ単位の地図があるとよかったと思う**

あと、地図をもう少し整備していれば。安平町は、コミュニティ単位の地図があると。名簿は社協にあるが、地図と名簿があれば、じもとの人でなくても、外から来たボランティアにも対応できるのではないか。

刻々と状況が変わるので、頻繁な声掛け、支援物資の分配、こまりごとの採集もできたのではないか。ゼンリン住宅地図も自治会地図に活用するにはそのままでは難しい。

応急危険度判定では小縮尺地図を用意しているところもある。そういうのと紐づけしていいかもしれない。

### **2.3.3.6 商工会に対するヒアリング**

**商工会で災害対応そのものには取り組んでいない**

衣料品店と、居酒屋がつぶれたのがあるが、煙突など使っていないのが壊れたり。支援などは、商工会としては対応してはいない。ほかでは婦人部がやったようなところもあるようだが。

避難所で必要な、ストーブなどの話は来たが、それくらい。

### **仮設店舗での営業も実施した**

3件仮設店舗あったのが、1件は再建して出て行って、お仮設店舗をそのまま家賃取って営業を継続している。あと新聞屋さん。町中に、トレーラーハウスをという試みを行っている。いま募集していて、何店舗かはいる。居住用もできる。期限は1年更新、チャレンジシヨップみたいな感じ。

### **追分、早来、それぞれ事業継続に取り組んでいるが、いろいろと事情もある**

2地区が分かれているが、追分の商店街の近代化をやっていたおかげで建物被害が少ない。そこでも廃業したところはある。早来は立て直すまでの元気がないころもあり、半年くらいやって廃業した店もある。早来は近隣からの流入もあるし、まだ捨てたもんじゃないと思う

一方、廃業という話があったが、親・こどもと相談して続けたいという店もあり、テレビ新聞でメッセージ打ったので、仮設店舗の店でも、売り上げ伸びたところもあった。

また、免除・公金融資等の支援で一息ついたというところもある。

### **2つの地区で統合して取り組みも始めていた**

毎年イベントで補助金半分ずつ使ってやろうと、考えていたが、そういう大きいものはなくなった。20年に統合して、両地区統合してつかえるカードをやっとつくった。だが、思ったほど売り上げは上がっていない。自動車運転できない人にはデマンドバスもやっているが、なかなかでなくなった。

### **発災後は被害確認に追われた**

振興局から何回も被害状況、なんども聞かれて、被害額いくらとか聞かれて、なんども。各加盟業者に被害を聞いて。振興局に週1回報告をいれて、それが大変だった。

### **支援のための融資が実施された**

融資については、公庫・銀行の来る日程を町に聞いて。借りられる金額は少ないが、相談は多かった返済が滞っているところはないらしい。

### **支援メニューも紹介したが、活用につながらない**

経済産業局が年に3回きて、要望とか聞いてもらっている。道にどういうものがある、というのは知っているが、なかなか使っていない。補助メニューの紹介もあった。こういうメニュー使ってくださいという話はしたが、なかなか。

### **業種ごとに影響が出ている**



宿泊・飲食店も、業者が入ってくるようになったので売り上げが上がることもあった。コロナで飲食店はつらいが、飲食店が増えた。

建設屋さんは令和2年度が終わって大変そうだ。工事が減っている。要望は出しているようだ。

宿泊は、地震でボイラーが壊れたのが使えなくなって、素泊まりしかできなくなった。

### **震災以外の要因も多く、消費の盛り上がりには欠ける**

サッポロも千歳も近いし、もうちょっと魅力があって人が住んでもいいような気がするが、人も消費も街に行ってしまう。本当にお年寄りだけ。車運転できない。

### **道の駅ができて、道外からの人の呼び込みに成功している**

道の駅はPRとしてはいい。SL好きな人とか道外からもきている。お菓子屋さんは卸しているところはある。商工会も2年続けて、オープン周年記念で、商店街の500円券配布したりしたが、なかなか道の駅からこっちまで足を運んでくれない。有名なお蕎麦屋さんには、人がきたりするが。道の駅から少しでいいから引き込みたいが、

### **災害があっても会員の意識はどこまで変わったのか**

台風も大したことない、雪も大したことない町だし、災害に関しては今回の地震でやっと目覚めた感じ。災害時には、全員に10万円出してくれたが、会員だからというメリットもなかったが。BCPの作成についての問い合わせはない。

### **追分の住居併設近代化商店の課題**

追分の15~18年での住居併設近代化商店にしたやつ、店舗と住居・トイレが一緒だったりと、後継者いなかったりしても貸すに貸せない。

役場が今度商店街にトイレを作ろうという、できるが、管理できない。

### **若い人の定着に期待している**

少しずつ若い人が、まるっきり増えていないわけではない。年寄りの町なので自然減だけでも。牧場や自衛隊で若い人、外国人等来るが、その人たちが定着していけば。

### **商工会に農業者も入ってほしい**

富良野の山部、商工会が独自にあり、農業者が独自に商工会に加盟している。メロンの直売などの流れで税金の相談などもあり。安平もメロンあるが、どうか。農業者でも入れるようにしている。12月の理事会で、溝口牧場というところ、国道沿いに飲食店ポニーおいて、というのをつくって。

追分では、ハウス野菜いい値段で売っているようだ。そっちの人のほうがうまくやって

いるかもしれない。道の駅でも売っている。積極的にこっちから声かけるのは難しいが、農家から、相談来たら融資とか税務とか。農業と商工会が連携する場になると面白い。

#### あびらチャンネルを活用していた

災害時にあびらチャンネルを活用していたが、情報更新が間に合っていないときもあった。

#### 2.3.4. ④中学生ヒアリング

地震発生時に小学生だった調査時の中学生に対して、自由記述形式のアンケートを行った。

調査対象	安平町内の中学校に通う全生徒（発災当時小学校4, 5, 6年生）
調査手法	質問紙をHR時に配布しその場で記入・回収（無記名）
回答期間	2021年12月
回答数	147名（早来中学校：95名，追分中学校：52名）

#### I. 地震のあと、学校が再開するまでにどんなことがありましたか？

##### こころとからだのストレス

- ・みんなといれたけど、体はストレスを感じていた。
- ・授業中に地震が来るんじゃないかと不安になることがあった。
- ・1人である時に地震が来るとすごく怖い。
- ・息が苦しかった。

##### 支援への感謝

- ・とくになし
- ・支えがたくさんあって、この世はまだ温かい所もあるんだなと嬉しくなった。
- ・自衛隊さんが避難所に来て、お水や食料などを配ってくれて嬉しかった。（助かった。）
- ・自衛隊の方々がやっていたお風呂がありがたかった
- ・自衛隊の人達がいろいろなことをしてくれてとても助かった。
- ・自衛隊のお風呂が気持ち良かった
- ・地震後、ボランティアの方々が助けてくれたことがとてもうれしかった。
- ・水を運ぶのにボランティアの人が手伝ってくれてうれしかった。
- ・公民館でボランティアで炊き出しをしてくれた方々がいてうれしかった。
- ・色々な会社からお菓子などをもらったのがうれしかったです。
- ・会社が発電機を貸してくれてうれしかった
- ・他の所から来た人からアイスをもらったのがうれしかった。

- ・ピザが来てくれたこと。
- ・お菓子とか白い恋人を貰ったこと
- ・復興しえんのおかしなど
- ・避難所へお菓子が大量に送られてきてうれしかった。
- ・公民館でのご飯の配給はうれしかった。

### つながり

- ・笑顔のプロジェクトでは全国などを通してつながったことがすごいと思った。
- ・親と長い時間一緒にいた。
- ・すぐに避難所として解放した「はやきた子ども園」と「早来小学校」の対応が素晴らしかった。

### 日常のありがたみ

- ・普段の日常の大切さを感じた。
- ・普段の生活にありがたみを感じた、
- ・うれしかったこと→学校が再開したときに友達とあえたこと

### 日常がなくなった

- ・暇だった
- ・とても、ひまで、やることがなかったので、別に、なんともなかった。
- ・学校も無いし家の近くには友達もいなかったからひまだった
- ・学校に行けないので、学力の低下が心配になった。

### 非日常体験

- ・楽しく遊んでいた
- ・家のIHが使えなかったから、外で焼肉を食べたこと。
- ・家族いる時間が増えてうれしかった。
- ・電気がない生活が普通に楽しかった
- ・休めてうれしかった
- ・電気が通っておらず、ひまだった。(テレビ、スマホが使えない)
- ・時間の使い方が分らなかった。

### ライフラインの途絶

- ・水道が止まって風呂やトイレなどが使えなかったこと
- ・電気が使えなくて困った。
- ・なかなか電気が復活しなかったことに困った。

- ・水がなかった
- ・電気がなくて困った。
- ・お風呂には入れなかった
- ・電気や水が使えなくなって、苦勞した。
- ・トイレやお風呂が使えなくなって困っていた。
- ・水・電気がなくてこまった
- ・電気や水が使えないのが不便でした。

#### ライフラインの確保

- ・水を運ぶのが大変だった。←もらった水
- ・水がコンビニなどに全然売っていなかった。

#### そなえ

- ・防災バックを用意していてよかったと思った。

#### 寝場所の確保

- ・トラックを持ってたのでねる所があっけうれしかった。

#### 喪失

- ・金魚が2匹のうち1匹死んで泣いた。さらに電気がないので生き残った方の金魚が使用している水その水を循環させるのにだいぶ苦勞した。
- ・知人にだれも死傷者がいなかったこと
- ・友達に会えなくてかなしかったけど、無事なのがうれしかった。
- ・家族の人になにもなかったのがうれしかった。

#### まち

- ・商店街によりやくできたカフェがつぶれちゃって残念だった
- ・帰り道の街灯が消え、いつも暗いまま下校していた。足元が見づらかった。(秋から冬)

#### 広域避難

- ・地震が起きて次の日(たしか)には本州にいる親せきの家へひなんしたので、とくにふべんはなかった。

#### 家の片付け

- ・食器棚やタンスが倒れ、後片づけが大変だったこと。

## II. 10年後、安平町がどんなまちになってほしいと思いますか？

### にぎやかなまち

- ・たくさんの人がいて、みんながわいわいしてる活発な町
- ・人口がもっと増え、にぎやかな町になってほしい。
- ・限界集落になってなければなんでもいい。
- ・活気のある町
- ・今は、お年寄りが多いから、10年後には若い人もたくさん住んでいる町になってほしいなと思った。
- ・何事もない普通なまちでいいけど、人は、減らないで人がいるまちがいい。
- ・人口が増えて豊かな町になってほしい。
- ・人口が今より多く、はなやかな町になってほしい。
- ・今とおなじまま、人が多すぎず少なすぎず、ちょうどいいぐらいのにぎやかさのある町
- ・みんながにぎやかで、活気のある町。
- ・今の安平町のよさものこしつつ、今よりにぎやかな町になってほしい。

### 自然あふれるまち

- ・自然あふれる中で、子供達が思いっきり体を動かしたり、学んだりできる町
- ・今と変わらず、自然の多いきれいな町がいいと思います。
- ・自然豊かな町。
- ・豊かな自然がそのまま残っていてほしいと思う。
- ・もっと自然豊かな町
- ・今の安平町が好きだから10年度今とあまり変わらない自然いっぱい町でいてほしい。
- ・自然が豊かな町。
- ・安平町は自然の景色がきれいなので、町が発達しても残してほしい。
- ・緑がたくさんあって、自然ゆたかな安平町（木をバカスカきり倒さないでほしい）
- ・今と変わらない自然が多い町？
- ・森がのこっている
- ・自然あふれる、のどかなまちになってほしい。
- ・自然豊かなままでいてほしい。
- ・自然豊かでみんな温かい町になってほしい。
- ・緑の多い町。
- ・緑豊か

### 誰もがすみやすい

- ・老若男女住みやすいまち

- ・みんなが幸せなまち
- ・いろいろな人が住みやすい町
- ・自然豊か、国際色豊か、温かい町

### 災害に安全なまち

- ・地震がおこる前よりも良いまちになってほしい
- ・大きな地震があってもみんなが安全で、安心して暮らせるようなまち
- ・地震がくる前の安平町に戻ってほしい。
- ・平和で今よりも更にいい所になってほしい。
- ・いると安心できるまち
- ・災害による死亡者が0人な町
- ・安全・安心な町になってほしい。
- ・安全・安心なまち

### 行政が機能するまち

- ・電気、水を回復させるのをもっと早く。クレームのない町←これ大事です。
- ・災害の時に困らないように、公民館で災害時に水の配給をしてほしいです。
- ・震災後にすぐ対処（町の方の対処は早いですが、バス通生の家の周りにはすぐ対処できていない）してくれる安平町になってほしい。

### 事故のないまち

- ・小さい子や、子どもが、安全に、遊べるふうになってほしい。
- ・事故を防ぐために通学路を確認して、おうだん歩道を見直す。
- ・今も、特に無いが、事件が無くていつまでも平和な町になってほしい。
- ・事件・事故などのない豊か しい町になってほしい
- ・子供が外で楽しく自由に遊べて、大人の人たちも居ごこちの良い町。
- ・安心してらせる町

### つながり・仲良く

- ・今のまま人が温かい町であってほしいです。
- ・安平町の人たち全員が仲良く安心して暮らせる町。
- ・あいさつや思いやりがあって、活気あふれる町
- ・笑顔で思いやりのある町になってほしい。
- ・みんなが笑顔で、やさしさがあふれる安平町にしたい

### 明るいまち

- ・ 明るいまち
- ・ 町民全員が明るい町になってほしい。
- ・ 挨拶が盛んで活気のある町。
- ・ 町の人たちがもっと笑顔で生活している町
- ・ みんなが楽しめる町
- ・ 子どもから大人まで、親しみやすくなるように、明るいふんいき作りができる町
- ・ 明るく、安全な、町民が仲のよい、栄えた町。
- ・ みんなが豊かな町、みんなが関わり合える明るいまち
- ・ 明るくて、にぎやかな町
- ・ 今と変わらず、明るい平和な町であってほしい
- ・ 明るいまち
- ・ みんな仲が良い町
- ・ 明るく笑顔があふれる町
- ・ 楽しい町。

#### 支え合い

- ・ 大人も子どもも元気に暮らしていて、みんなで支え合っていく町になってほしいです。

#### 特色のあるまち（地震に強い）

- ・ 地震に強いまちにしてほしい
- ・ 災害への備えをしっかりとし、もし地震などがきても死者を出さない町
- ・ もし、また地震がきても協力しあい、支えあうことのできる町。
- ・ いつ大地震がきても不便がない町になってほしい。
- ・ 次に災害が起きても、皆で支え合って早い復興を志せる勇気あるまちになってほしいです。

#### 災害の支援

- ・ 他の町に災害がおきたときに役に立てるまち
- ・ 助け合いができる町、避難所の運営をしっかりとしてほしい

#### 特色のあるまち（ほめられたい）

- ・ いなかなのに、すごいつて思われたい。食べ物おいしい所
- ・ 初めて安平町に来た人から「いい町」「笑顔があふれている町」と思ってもらえるような町
- ・ 今のままか、少し有名になる場所



### 特色のあるまち（教育）

- ・教育に力を入れているまちとして、さらに大きな存在となってほしい。
- ・いじめがなくなってほしい。もっと平和になってほしい。
- ・人数が少なくても、今みたいに上下（学年）の差がなく、多くの人が仲の良い町

### 特色のあるまち（便利）

#### （都会）

- ・都会になってほしい
- ・大都会
- ・かいてきて、いなかだけどこかでもあるみたいな、いろんなものがあるまちになってほしい。森とかはいかして、安平町の中べにドカーンとないかがあってほしい。

- ・大きな都市になってほしい

#### （商業サービス）

- ・デリバリーが来る町
- ・デリバリーが届いてほしい。
- ・色々なお店ができて欲しい。飲食店や服屋など。豊かな町。
- ・お店がいっぱい増えて、便利な町。
- ・お店や遊べる場所が増え、他の町に行かなくてもいいような町してほしい。少しそういう点で倉らしづらいと思っている。
- ・スーパーが立ってほしい
- ・もっと発展するように国道沿いにもっと店頭を増やす。
- ・お店が多くなってほしい。
- ・大型スーパーくらいできてほしい
- ・大型スーパーなどがあって他の町や市に行かなくても簡単に買い物ができる町になってほしい

い

- ・都会
- ・大型スーパーがある
- ・交通網があまり発達していないのもあり、買い物できる店が遠いので、店をふやしてほしい。

#### （経済的に豊か）

- ・少しでも建物が増えて豊かに不自由なく暮らせる町
- ・経済的で豊かな町
- ・より豊かな町になってほしい。

### 特色のあるまち（訪問者）

- ・たくさんの人が訪れるまち
- ・他の町からもたくさん人が来る人気のある楽しい町

#### 特色のあるまち（イベント）

- ・町民同士が仲の良いまちになるために、楽しいイベントがあるといいなと思う。
- ・地域の人との交流をするために、イベントや交流できる施設をつくってほしい。
- ・元気のある町…お祭りを増やしてほしい。
- ・いざというときに町の人達みんな協力し合えるような町にするために、交流会などがあつたらいいと思う。
- ・今と変わらず平和なまち、コロナが終束して、お祭りやイベントが盛んに行われて活気づいているまち。
- ・じんじゃまつりがさいかいしてほしい。
- ・まちりなどの行事に力を入れているまち

#### 特色のあるまち（設備）

- ・住みやすいまちにするために、設びとかをつくる。
- ・子どもが遊びやすい町…大町以外の町の遊ぶ場所が少ないと思うから増やしてほしい。
- ・町のみんが楽しいと思えるように、休めたりできてみんなが集まれる場所があるといいと思う。
- ・とても元気な子どもたちになってほしいから、他の子たちとも遊べあえる大きい公園がある町

#### 災害の影響がなくなったまち

- ・新校舎もでき、道路やくずれた山もきれいになってほしいです。
- ・震災を忘れるくらいの元気な町。
- ・地震の前と全く同じ町。
- ・地震がきた後の怖さを、忘れられるぐらいの、笑顔があふれている町になってほしい。
- ・地震がおきる前のような町になってほしい
- ・いままで通りの町

#### キレイなまち

- ・ゴミ0の町になってほしい
- ・きれいな町であってほしいから、ごみ拾いを積極的にやっていてほしい
- ・ごみが落ちていないまち。地域内でのつながりが強いまち。

### 変わらない

- ・今とそこまで変わらないでほしい
- ・今の状態をキープしている町
- ・今と変わらない町
- ・今のまんまでいい（自然、人々の関係など）
- ・今も十分良いと思う。とくに町を変える必要はない。
- ・今の追分が好きだから、今と変わらないでほしい。
- ・発展しすぎず、すたれすぎず、10年後帰郷した時に、「何も変わってないな」と思えるような、心が落ちつくような町になってほしい。
- ・今と変わらないでいてほしい。今の早来からなにもこわさないでほしい。

### 情報化がすすんだまち

- ・どこに行っても光回線が通っている町
- ・安平町全体に「光」（町にしかない。町はずれがないので困っている）が来てほしい。

### ふるさととしてのまち

- ・町民の皆さんがより住みやすく、ふるさととしてふさわしい町
- ・あまり都会すぎず、昔の街並が残る町であってほしい。
- ・落ちつける場所が多くなっているといいな。

### 整備されたまち

- ・こわれた建て物がいつこもなくぎゃくに新しい建て物がふえたらいいなと思った
- ・ちゃんと整ってる町→空き家やボロボロの家を建てなおす等

### その他

- ・エコタウン
- ・ウイルスがないまち。（コロナ）
- ・住民の所得水準が高いまち。
- ・生活しやすい町
- ・母子家庭を支えるようななにかがあるといいと思う。（追分にあるけど何かの役に立っているのだろうか？）
- ・町民のあいさつが輝く町になってほしい。
- ・思考てい止しないまち
- ・近未来的でだれもが過ごしやすいまち。
- ・歴史を大切にする町

Ⅲ. 震災から3年が過ぎ、復興のシンボルとなるものを中学生の皆さんで作るとしたら、どこに、どのようなものを作りたいと思いますか？

- ・自由記述

- ・町の中心部くらいに旗などの町の有名な物を置くなどする。ふくすうのかわいい像を置いたりなど

#### 写真

- ・震災直後の町の写真を集め、作品を作り、学校、公民館にかざる。
- ・震災の時に撮った写真や、ボランティアの方々との写真を集めて、どこかに貼ったり、その写真で作品を作ったりする。
- ・震災の前と後で変わった場所の写真をみんなで撮って、その写真を展示する場所をつくる。
- ・町の人々の笑、めだつ場所
- ・学校などにそのときの写真をおく。
- ・震災から現在までのうつり変わりの写真を駅舎に展示したい。
- ・地震ふっこう展示回、地震の時の写真と、今の写真をはって、見比べる。
- ・場所…道のえき ・1年ずつどのように復こうしたかの写真パネル
- ・旧早来中学校の場所に建物をつくり、震災があったと分かるような写真や物を置き、色々な人が来られるような展示館などが良いと思います。
- ・やくばや駅のところに、かしの木や、じしんのときに写真などをおく。

#### シンボルを作ることはやらない

- ・とくにないです。
- ・無駄な税金は使わなくて良いです。他のことに使ってください。
- ・特にない。
- ・とくにない。
- ・別に作らなくてもいいと思う
- ・とくに無し
- ・特にないです。
- ・特にない
- ・ないです。
- ・特にない。
- ・自分達にとって震災はわすれたい思い出なので復興のシンボルとかを作りたくないです。

#### 支援者への御礼

- ・役場に支えてくださった方にお礼ができるようなボードを作る。
- ・緑色の手形を紙にはり木の葉っぱのような形にする。これを復興に携ってくださった方々や安平町の方々の手形もはればとても大きな木ができて良いと思った。(裏にイラストあり)

## 絵

- ・新校舎内に大きなモザイクアート。
- ・1枚1クラスでみんなで協力してその1枚に絵を描く
- ・新校舎のグラウンドに絵を書く
- ・フェンスに絵をかく。
- ・みんなが笑っている絵を書く(町民センター)
- ・「地震い負けずに新しい学校の建築が順調に進んでいる。」のような内容のポスターなどを作ってまちの施設やお店にはる。
- ・復興テーマにした絵をかくとか。
- ・たくさんの人が通る場所に、絵を描く。
- ・旧中学校を残こしておく」すこし直して、当時あった写真などを展示しておく
- ・追分駅の壁に中学生が描く、オリジナルアートやよせがき。

## ポスター

- ・新しい小・中学校のPRポスターを作る。
- ・新しくできる学校や、公民館などにポスターなどで、復興に向けて書く。
- ・無事復興できた事のポスター。安平町のPRの動画やポスター。
- ・新しい校舎の入り口に大きいポスター(見とれる)(前向きな)をはる。(学校に来る先生や生徒以外の人も「今日1日頑張ろう」と思える)
- ・町外の人がきたときに、安平町はこんなところなんだと、分るようなかんばんやポスターなど。

## 施設

- ・れんがの建物がこわれたところに、れんがの何かをたてる。
- ・場所は人が多く集まる場所ならどこでもいいと思います。人の温かさや親切さを感じるものがないなと思います。
- ・プレハブ校舎(また使えなくなった早来中学校)跡地に公演を作る(災害時になったら避難所になる)

## まく

- ・新しい学校に、横断幕をつくってかざる。

- ・道の駅に復興のたれまくをつくる。

## 看板

- ・「安平町がんばろう！！」みたいなのを看板とかにはる。
- ・道端に看板を立てたいと思った。
- ・かんばん
- ・「防災グッズをそろえよう」という看板を、交差点から見えるところにたてる。
- ・かんばんにして、学校の前におく。
- ・役場や道の駅に復興の道のりをまとめた看板のようなもの

## 配布物

- ・マスク、シャーペン、ボールペン

## モニュメント

### (オブジェ)

- ・旧早来中学校の場所に、震災で亡くなった人のお墓的なものを作りたい。
- ・新しくできる学校に、復興のシンボルとなるモニュメントを作る。
- ・新しい学校のすずらの丘なるものの中央に何かつくって下さい。(地震でぎせいになった金魚の像とか) ちなみにらんちうでした。
- ・震げん地の近くに地しんを忘れないような石をおいたらいい
- ・新しくできる早来の学校の校庭にオブジェなどを作りたい
- ・公民館に何か作る
- ・今の仮設校舎の土地に、安平町の象徴をなるものを作る。

### (石像)

- ・ときわ公園に石像をおいてみたい。
- ・国道沿いや、旧早来中跡地、地震の象徴となるようなものを埋めたり、像に入れたりする。
- ・雪だるまの石象
- ・公民館に赤いひまわりの像を作る
- ・S Lの像みたいな物
- ・石像
- ・町民センターに平和のシンボルの何かを(像)立てる
- ・駅などのできるだけ目立つ場所にメロンの像を皆でつくる。(イラストあり)

## ゆるキャラ

- ・安平町のゆるキャラを作ったらいいと思う。

・安平町のゆるキャラをデザインして、役所に提出しましょう！ たとえば…安平町といえ  
ば馬とかメロンが有名なので、メロンウマをつくりましょう！！

- ・ゆるキャラ

#### D51

- ・D51 ステーション ・地震のときの風景
- ・D51 ステーションに握手の絵をかざる
- ・安平町にD51 の絵
- ・道の駅にじょう気きかんしゃのシンボル（イラストあり）

#### グッズ

- ・安平町のキャラクター（生徒会のやつ）をグッズにして売る
- ・シンボルを作っただけでなく、そのお菓子などを道の駅でなど、さらに活用すること  
をした方が、作ったかいがあると思う。

#### スマイル

- ・地震できょうふしかなかったけど少しでもきょうふをなくしていくためにシンボルに  
スマイルをつけたらいいと思います。
- ・「この町は、笑顔でいっぱい」とわかるようなシンボル。
- ・にこちゃんマーク的なものを入れてほしいです。
- ・笑顔

#### 大きく掲示

- ・シンボルマークのサイズは大きめに作り町の人みんなに見せるために町にかざる
- ・今あるものを大きくする。
- ・安平町のマークを大きい紙に書いたり、作ったりしたい

#### 安平のよいところをシンボルに

- ・目立つ場所に見ただけで元気がでるようなものだったり、今の安平町の良い所を表現し  
てほしい。
- ・安平町の特産物など、安平町を象徴するものを入れる。
- ・カラーにするなら、緑をたくさん入れて安平町を表現する。

#### 目的別シンボルマーク

- ・消防しょに防災シンボルを作ってほしいです。
- ・震災の記憶を風化させないシンボル。早来に作る。

- ・ボランティアをしてくれた人に感謝を伝えるようなシンボル
- ・追分駅に中学生が考えたマークをかざる。
- ・これから復興させていくものにシンボルマークを付けたい。(安平町のマーク、雪だるま、馬、メロンなど)

### 衣服

- ・安平のTシャツを作る(地域町おこしのな…) (鶴川はそういうのあったはず…) → 色々な人に安平町を知ってもらおう。
- ・安平町のぼうしとか
- ・応援のメッセージが掛れた服を作りたい。
- ・かしわの木や、じしん後などの写真をプリントして服にする。

### 植樹

- ・大きな木(桜の)を学校の近くにうえたい。
- ・学校のそばにたくさんの花を植える。(ひまわりなど)
- ・学校の子供たちに木を空き地に植えてみんなで育てること。

### 場

- ・せいこドーム周辺のどこか シ かしわの木
- ・人が集まる所に花を植える。(何かの数字)
- ・風雪など厳しい環境下でも大地に強く根差す柏を、どこか目立つところに植えて、町の人で見守っていくとかどうだろうか?
- ・はげた山に林をつくろう! エイエイオー
- ・柏や桜などの木を植える。

### 広報

- ・新しくできる学校に地震の時の状況についての新聞とかポスターを作りたい。

### メッセージ

- ・小・中学生や先生方などなど、協力してくれる人に、何かキャッチフレーズを考えてもらって、1人1人紙に書く。それを駅やお店、せいこドームなどの施設に貼るといいと思う。
- ・新しい校舎に大きく紙に応援のメッセージなどを書いて飾る。メッセージカードを書く。小さい子たちから年ばいまでみんな元気になるようなとび飛すしかけのメッセージカードを作る。
- ・おうえんのメッセージなどをかいて元気をもらえるようなポスター。



- ・震災にあった人たちにメッセージを書く
- ・新小中学校にみんなに「ありがとう」の気持ちなどを入れてつくる

#### 手紙

- ・震災で亡くなって悲しい人達に手紙を書き台紙にはって作る事。

#### 展示

- ・追分駅の前に災害で失われたり壊れたりした物を直し、置いておく。(イラストあり)

#### 旗

- ・はた
- ・町民みんなが見れるところに、元気が出るような大きな旗（復興をイメージした旗）を作りたいと思う。
- ・安平町の旗
- ・復興の時に安平町を助けて下さった方々の名前を書いた旗を立てる。

#### 雪だるま

- ・冬になったらそれぞれの思いを込めて、町の色々な所（ときわや学校前など）に雪だるまを作って置く。
- ・様々な場所に雪だるまをつくる。

#### マンホール

- ・マンホールをかざる

#### まつり

- ・大きな祭りをひらいてほしい

#### 校舎

- ・としようしつ多くしてほしい。
- ・北進の校舎をシンボルとすればいいと思う
- ・北進校舎を残しておく

#### ベンチ

- ・スマイルベンチを町のいたるところにつける

#### その他

- ・余ったスペース
- ・ローソン
- ・3年もたちましたが、忘れてはいけないものなので、思いだせる（震災）ものがないなと思います。
- ・(イラストのみ)

### みんなが使える場所

・次に地震があったら使えるようにする。この地震は地下に CO2 を苦小牧で入れてたからだった。だからCO2を減らす努力をしないともっと地震が増え、いくら災害に強い町を作っても命が落とされる。何かしないと「災害に強い町」は作れず、復興は成功ではないと言える。

※イラスト転記（順不同）



イラスト 1

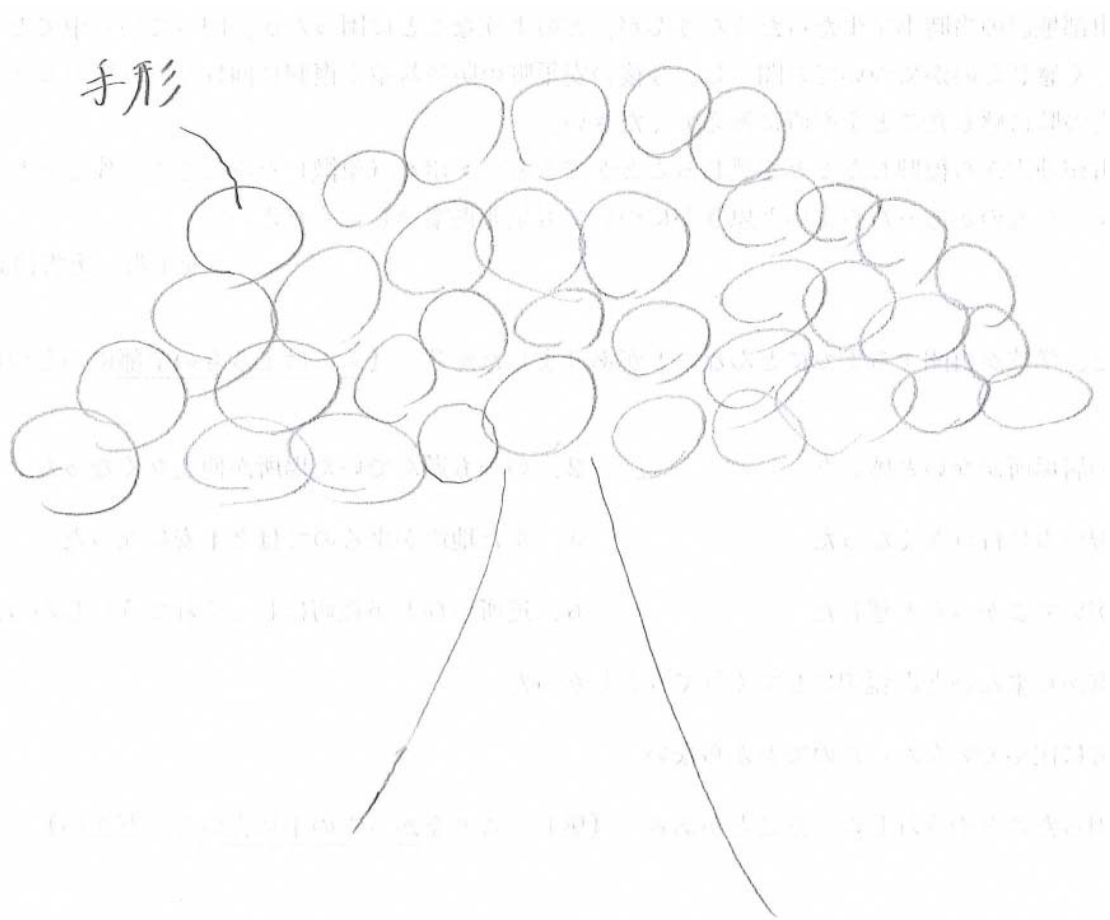


イラスト 2



イラスト 3

ば、裏面に書いてもかま

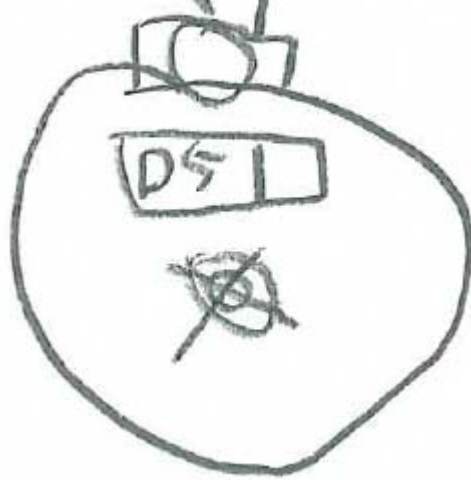


イラスト4

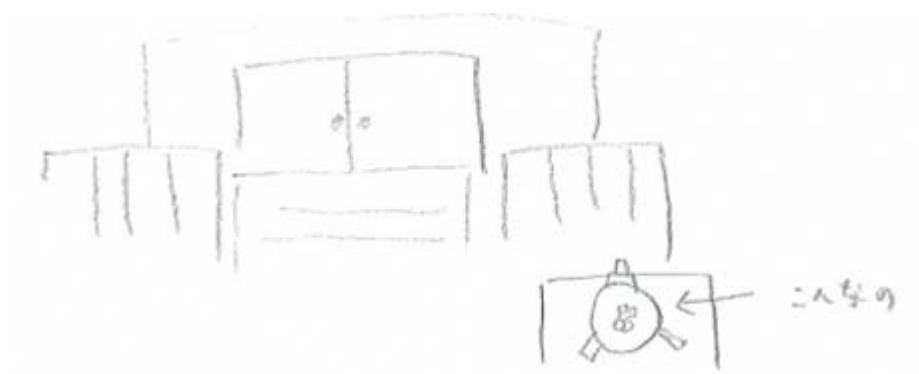


イラスト5